

加古川市

美乃利遺跡 II

—一級河川別府川河川改修事業に伴う発掘調査—

2006年3月

兵庫県教育委員会

加古川市

み の り
美乃利遺跡 II

—一級河川別府川河川改修事業に伴う発掘調査—

2006年3月

兵庫県教育委員会



遺跡遠景（南西から）



遺跡近景（南西から）

巻首図版 2



遺跡遠景（南から）



遺跡近景（南東から）



第1面 南西上空から



第1面（2） 南西上空から



第2面 南西上空から

卷首図版 4



S D08断面



S D08出土角杯



S D08出土墨書土器

例　　言

1. 本書は、加古川市加古川町大野に所在する美乃利遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、一級河川別府川河川改修事業に先立つもので、兵庫県加古川土木事務所からの委託を受け、兵庫県教育委員会が平成元年度に確認調査を、平成2年度・3年度・9年度に本発掘調査を実施した。平成2年度・3年度に実施した本発掘調査については、既に平成9年3月に調査報告書が刊行されており、本書は、平成9年度に実施した調査に関するものである。
3. 調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所山田清朝・松岡千寿が担当した。なお、本発掘調査の遺跡調査番号は、970365である。
4. 調査後の空中写真の撮影は、株式会社ジェクトに委託して行った。他の遺構の写真撮影は調査員が、実測は調査員と調査補助員が実施した。
5. 整理作業は、平成15年度から兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて実施した。
6. 遺物の接合・実測・復元・トレースについては上記事務所整理保存班で行った。
7. 遺物写真的撮影は、谷口フォトに委託し、平成17年度に行った。
8. 調査は、平成2年度・3年度の調査で使用した基準点をもとに三級基準点を設置し、これを基準とした。
9. 座標値については、調査時における測量では旧測地系に基づくものであったが、本報告では、国土地理院が公開するプログラム「T K Y 2 J G D」により、世界測地系への変換をおこなっている。経緯度についても同様である。なお、調査地は第V系に位置する。
10. 本書の編集は岸野奈津子の補助を得て山田が行い、石器については藤田　淳が、他は山田が執筆した。
11. 本報告にかかる遺物は、兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水）に、写真は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に保管している。
12. 最後に、発掘調査および報告書の作製にあたっては、以下の方々の御援助・御指導・御教示をいただいた。記して深く感謝の意を表するものである。

高橋　学(立命館大学) 工業普通(奈良国立文化財研究所: 当時)

目 次

第1章 美乃利遺跡	1
第1節 遺跡の環境	1
第2節 調査の経緯	5
第2章 調査の成果	7
第1節 基本土層と遺構の検出	7
第2節 第1面の調査	11
第3節 第1面（2）の調査	19
第4節 第2面の調査	33
第5節 第3面の調査	47
第3章 まとめ	48
第1節 遺物	48
第2節 埋没過程	51
第3節 総括	58

挿図目次

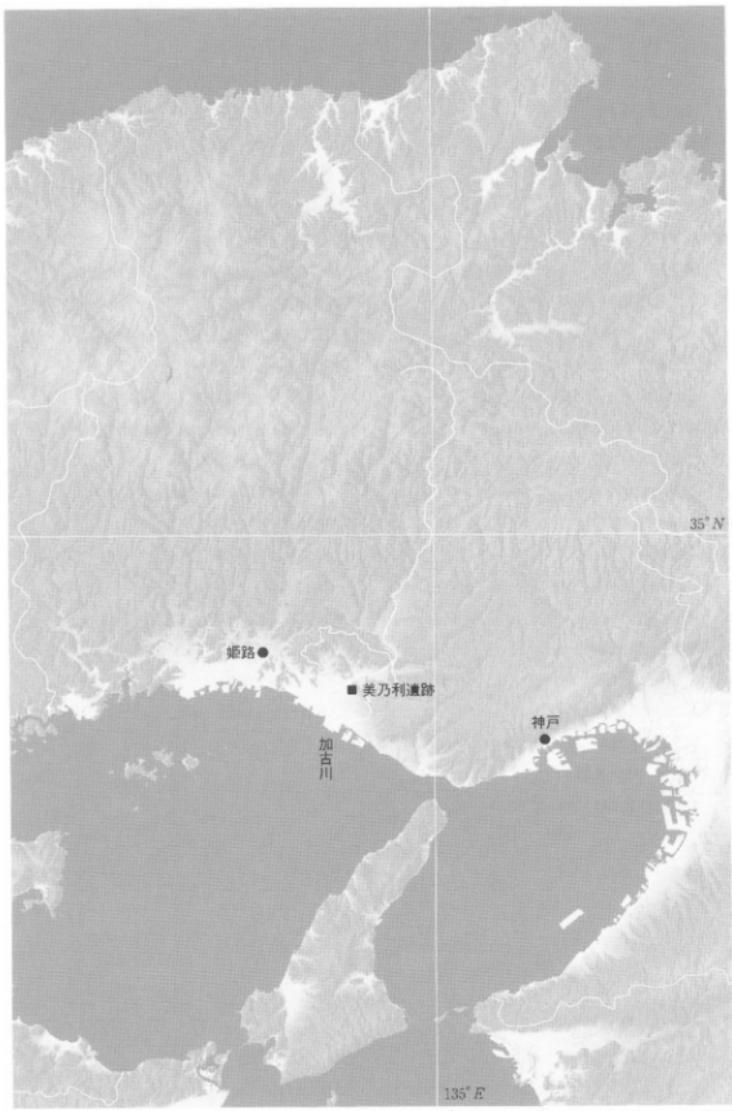
第1図 遺跡の位置	第20図 S D05	14
第2図 主要周辺遺跡	第21図 S D05出土土器	15
第3図 美乃利遺跡・大野遺跡の調査	第22図 S D06	15
第4図 美乃利遺跡周辺地形分類図	第23図 S D07	15
第5図 調査位置図	第24図 水田跡	16
第6図 調査風景	第25図 土器溜出土土器	17
第7図 基本土層図	第26図 第1面（2）	18
第8図 泥濁原面出土土器（1）	第27図 S D08（1）	19
第9図 泥濁原面出土土器（2）	第28図 S D08（2）	20
第10図 水田被覆層出土土器	第29図 S D08断面の実測	21
第11図 泥濁原面出土石器	第30図 S D08の埋没過程（1）	22
第12図 第1面	第31図 S D08の埋没過程（2）	23
第13図 S D01	第32図 S D08出土土器（1）	24
第14図 S D01出土土器	第33図 S D08出土土器（2）	25
第15図 S D02	第34図 S D08出土土器（3）	27
第16図 S D02出土土器	第35図 S D08出土土器（4）	28
第17図 S D03	第36図 S D08出土土器（5）	28
第18図 S D03出土土器	第37図 S D08出土土器（6）	29
第19図 S D04	第38図 S D08出土土器（7）	30

第39図 S D09	30	第60図 埋没過程（3）	52
第40図 S D10出土土器	31	第61図 埋没過程（4）	53
第41図 S D10	31	第62図 埋没過程（5）	54
第42図 第2面	32	第63図 埋没過程（6）	54
第43図 S D11	33	第64図 埋没過程（7）	56
第44図 S D11出土土器	34	第65図 埋没過程（8）	56
第45図 S D12	35	第66図 埋没過程（9）	57
第46図 S D12出土土器（1）	37	第67図 第1期	58
第47図 S D12出土土器（2）	38	第68図 第2期	59
第48図 S D12出土石器	39	第69図 第3期	59
第49図 S D13出土土器	39	第70図 第4期	60
第50図 S D14	40	第71図 第5期	61
第51図 S D14出土土器（1）	41	第72図 第6期	62
第52図 S D14出土土器（2）	42	第73図 第7期	62
第53図 S D15	43	第74図 第9期	63
第54図 S D15上層検出状況	44	第75図 第10期	64
第55図 S D15出土土器	45	第76図 第11期	64
第56図 第3面	46	第77図 第12期	65
第57図 水田跡検出状況	47	第78図 第13期	66
第58図 埋没過程（1）	51	第79図 第14期	66
第59図 埋没過程（2）	52	第80図 第15期	67

写真図版目次

写真図版1 第1面	写真図版6 第1面（2）
南上空から 北東上空から 南西上空から	真上から 全景 北東から
写真図版2 第1面	写真図版7 第1面（2）
真上から 北東から	S D08全景 南西から S D08全景 南西から
写真図版3 第1面	S D08北壁 南西から
S D01 12出土状況 S D01 13出土状況	写真図版8 第1面（2）
S D01 14出土状況 S D02 南から	S D08 44・45他出土状況
S D03 北から	36出土状況 96出土状況
写真図版4 第1面	97出土状況 98出土状況
水田跡全景 南から 畦畔断面 南から	99出土状況 104出土状況
写真図版5 第1面（2）	写真図版9 第2面
南上空から 北西上空から 南西上空から	全景 南上空から 全景 北西上空から
	全景 南西上空から

- 写真図版10 第2面
全景 真上から 全景 北東から
- 写真図版11 第2面
S D11 南から S D12 南から
S D14 北から
- 写真図版12 第2面
S D15全景 北東から
S D15断面 北東から
- 写真図版13 完新世段丘
調査前 南西から 完新世段丘崖 北から
完新世段丘崖 西から
- 写真図版14 出土遺物
包含層出土土器 (2・6・9~11)
S D01出土土器 (12~14)
- 写真図版15 出土遺物
S D02出土土器 (16・20~23)
土器層出土土器 (32)
S D08出土土器 (41・43)
- 写真図版16 出土遺物
S D08出土土器 (44・45・49・51・62・65・
70)
- 写真図版17 出土遺物
S D08出土土器 (66・67・73・74・83)
- 写真図版18 出土遺物
S D08出土土器 (91~96・99)
- 写真図版19 出土遺物
S D08出土土器 (97・98・100~103)
- 写真図版20 出土遺物
S D08出土土器 (104~106・110・112)
- 写真図版21 出土遺物
S D08出土土器 (113・115)
S D11出土土器 (121・122・124・128・129)
- 写真図版22 出土遺物
S D11出土土器 (134~137)
S D12出土土器 (138・141・143)
- 写真図版23 出土遺物
S D12出土土器 (144・145・149~153)
- 写真図版24 出土遺物
S D12出土土器 (155・164・165・169~171)
- 写真図版25 出土遺物
S D12出土土器 (172~176)
S D14出土土器 (179・180)
- 写真図版26 出土遺物
S D14出土土器 (181・186~190)
- 写真図版27 出土遺物
S D14出土土器 (191・200・201・205・207・
208)
- 写真図版28 出土遺物
S D14出土土器 (209~212)
第1面出土石器 (S 1)
S D12出土石器 (S 2)



第1図 遺跡の位置

第1章 美乃利遺跡

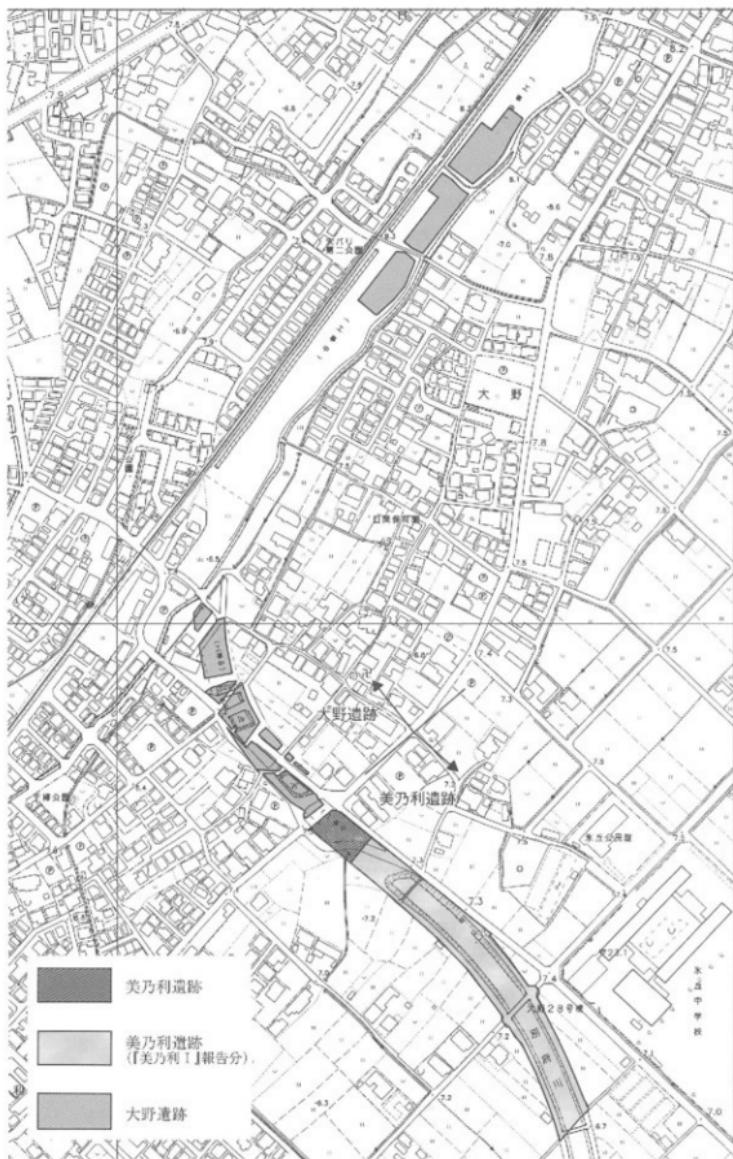
第1節 遺跡の環境

はじめに 当遺跡の地理的環境・歴史的環境については、すでに『美乃利遺跡⁽¹⁾』で紹介している。ここでは、当該報告書刊行後に遺跡の存在が明らかとなった遺跡もしくは、新たに調査が実施された美乃利遺跡周辺の遺跡について、紹介するにとどめたい。他の遺跡については、『美乃利Ⅰ』を参照されたい。



第2図 主要周辺遺跡

- | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 1. 美乃利遺跡 | 6. 二塚古墳群 | 11. 坂元遺跡 | 16. 粟津遺跡 |
| 2. 大野遺跡 | 7. 石守橋居跡 | 12. 野口庵寺 | 17. 北在家遺跡 |
| 3. 中津橋居跡 | 8. 石守古墳群 | 13. 教信寺 | 18. 菊林寺 |
| 4. 日岡山古墳群 | 9. 木足古墳群 | 14. 具平塚遺跡 | |
| 5. 若神社古墳 | 10. 溝之口遺跡 | 15. 平野遺跡 | |



第3図 美乃利遺跡・大野遺跡の調査

歴史的環境 『美乃利Ⅰ』刊行後、大野遺跡と坂元遺跡が新たに周知され、調査が行われている。また、溝之口遺跡の調査も數次にわたり行われている。

大野遺跡 今回報告する美乃利遺跡の北西側に隣接する遺跡で、美乃利遺跡の調査と同じ事業に伴い、平成9年度～14年度にかけて、6次にわたり調査が行われている(第3図)。美乃利遺跡自体、本来なら加古川市加古川町大野に所在することから、大野遺跡と一帯の遺跡とすべきものと考えられる。

調査では、弥生時代・飛鳥時代・奈良時代・平安時代後期～鎌倉時代・鎌倉時代～室町時代の遺構・遺物が明らかとなっている。弥生時代の遺構としては、中期後半の水田跡が検出されている。飛鳥時代の遺構としては、掘立柱建物跡が検出されている。奈良時代の遺構としては、壇薦用の水路が検出されている。平安時代後期～鎌倉時代の遺構としては、墓・掘立柱建物跡・土坑・溝が検出されている。鎌倉時代～室町時代の遺構としては、方形区画を伴う集落跡が検出されている。

坂元遺跡 JR山陽本線等連続立体交差事業に伴い、初めて明らかになった遺跡で、同事業に伴う調査が平成11年度に実施されている。この調査では、弥生時代中期の土坑、後期前半の溝、飛鳥時代～奈良時代の掘立柱建物跡・溝・土坑などが検出されている。

その後、東播都市計画事業坂元・野口土地区画整理事業の計画に伴い、加古川市教育委員会が平成10年度に分布調査を実施し、当遺跡の範囲が明らかとなっている。平成15年度～17年度にかけて、計3次にわたり上記事業に伴う調査が行われている。また、当該事業地を南北に貫く主要地方道加古川小野線(東播磨南北道路)改良事業も併行して計画され、当事業に伴う調査も実施されている。

上記事業に伴い計4次の調査が行われ(平成17年度終了段階)、弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代の遺構・遺物が明らかになっている。弥生時代では、中期の方形周溝墓群・古墳時代では倉庫と考えられる掘立柱建物跡や溝・埴輪焼成窯、奈良時代では井戸・掘立柱建物跡・平安時代では水田跡などがあり、明らかとなっている。特に、奈良時代の遺構・遺物から、「駅家里」のなかの集落の一つではないかと注目されている。

溝之口遺跡 坂元遺跡同様、JR山陽本線等連続立体交差事業に伴い平成13年度と平成15年度に調査が実施されている。この調査では、平安時代後期の掘立柱建物跡や溝が検出されている。

地理的環境 『美乃利Ⅰ』における高橋⁽³⁾学の分析以降、大きな知見の変更は認められない(第4図)。むしろ、当該報告書での分析を支持するような成果が、今回報告する調査で得られている。これについては、次章以降で報告していくこととする。ただし、先述した大野遺跡と坂元遺跡の報告において、調査成果を踏まえたより詳細な知見が得られるものと期待される。

なお、第4図は、高橋が行った地形分類を報告者がまとめたものである。

[註]

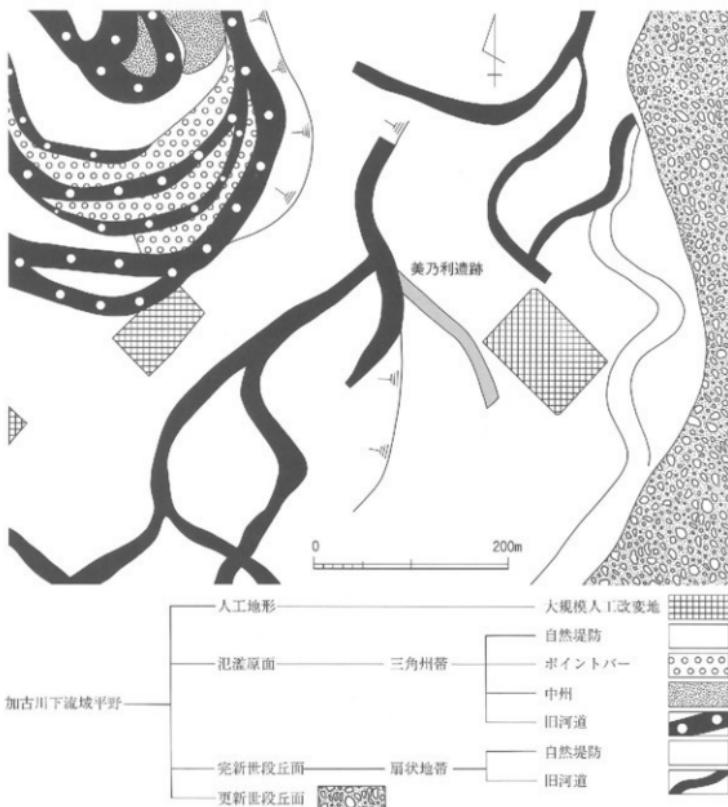
(1) 兵庫県教育委員会『美乃利遺跡－一級河川別府川河川改良事業に伴う発掘調査報告書－』1997

以下、「美乃利Ⅰ」と呼ぶ。

(2) 森内 秀造「大野遺跡」『平成12年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2001

村上泰樹他「大野遺跡」『平成13年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2002

西口 圭介「大野遺跡」『平成14年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2003



第4図 美乃利遺跡周辺地形分類図

- 渡辺 昇他「大野遺跡」『平成14年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2003
 (3) 中川 涉他「坂元遺跡」『平成11年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2000
 平田 博幸「坂元遺跡」『平成15年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2005
 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『坂元遺跡現地説明会資料』2004
 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『坂元遺跡現地説明会資料』2005
 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『坂元遺跡現地説明会資料』2006
 (4) 甲斐 昭光「溝之口遺跡」『平成15年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2005
 藤田 淳他「溝之口遺跡」『平成13年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2002
 篠宮 正他「溝之口遺跡」『平成15年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2005
 (5) 高橋 学「加古川下流域平野の地形環境分析」「美乃利遺跡——級河川別府川河川改良事業に伴う発掘調査報告書一」兵庫県教育委員会 1997

第2節 調査の経緯

1. 調査の契機

今回報告する調査は、『美乃利Ⅰ』の調査と同じく、一般河川別府川河川改修事業に伴うものである。当初、前回の調査と連続して調査する予定であったものが、用地買収等の都合から、6年の時期を隔てて調査を行うこととなったものである。平面的にも『美乃利Ⅰ』の調査地に連続するものである。

2. 確認調査

今回報告する調査地を対象とした確認調査は、前回報告分と合わせて、平成元年度に実施したものである。その詳細については、『美乃利Ⅰ』を参照されたい。

3. 本発掘調査

平成9年11月26日から平成10年3月13日まで実施した。調査地は、V区の北西側にある(第5図)。調査面積は、681m²である。調査体制等は、以下の通りである。

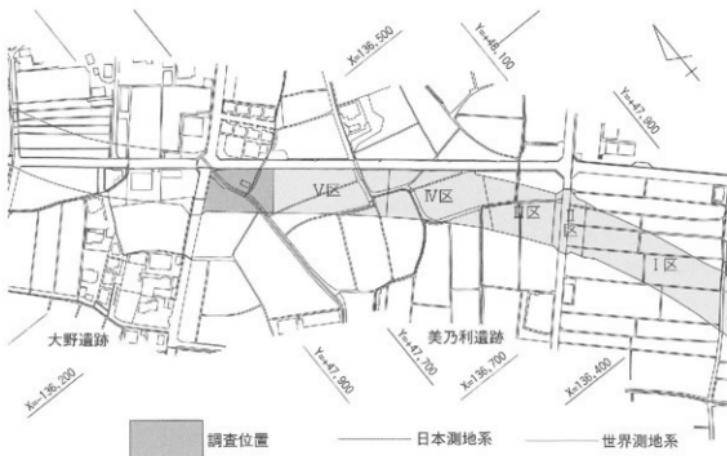
遺跡調査番号 970365

調査体制 調査主体 兵庫県教育委員会

調査担当 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 山田清朗・松岡千寿

調査補助員 中塚克浩・中谷悟史・山本陽子・小野亜由美

室内作業員 五百歳道代・菊島昌子・覚野都子



第5図 調査位置図



第6図 調査風景

4. 整理作業

出土遺物の水洗およびネーミング作業については、発掘調査と平行して、発掘調査事務所内にて実施した。以後の作業は、平成15年度から兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて実施した。平成15年度以降の整理作業及びその体制は、以下の通りである。

平成15年度 整理内容 土器の接合と実測を行った。

整理担当職員 整理保存班 長濱誠司

調査班 山田清朝・松岡千寿

企画技術員 岸野奈津子

平成16年度 整理内容 土器の実測・復元・写真撮影・実測図のトレース、遺構図の製図・トレースを行った。

整理担当職員 整理保存班 長濱誠司

調査班 山田清朝

企画技術員 岸野奈津子

平成17年度 整理内容 遺構図の製図及び本書の編集を行った。

整理担当職員 整理保存班 別府洋二

調査班 山田清朝

企画技術員 岸野奈津子

第2章 調査の成果

第1節 基本土層と遺構の検出

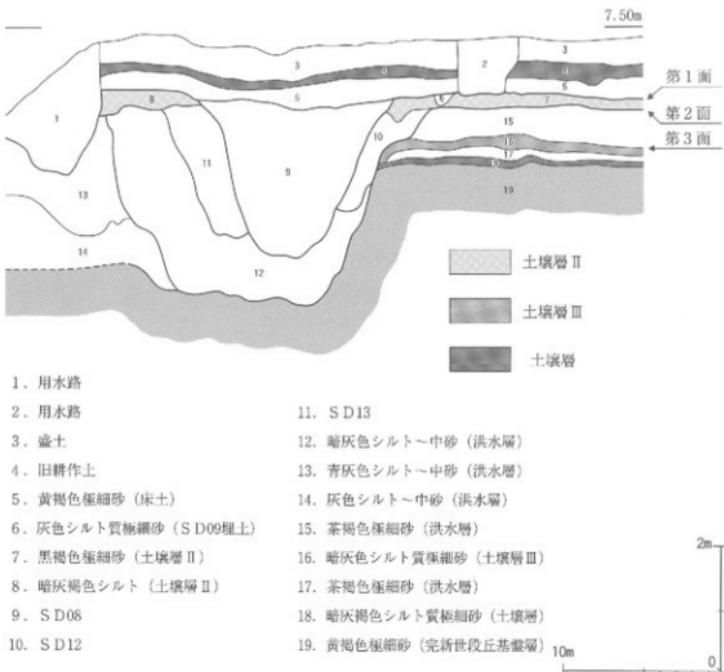
(1) 基本土層と遺構検出

完新世段丘
 調査区中央部をほぼ南北方向に完新世段丘崖が伸び、この崖を境に調査区の基本土層（第7図）は大きく異なる。完新世段丘については、「美乃利Ⅰ」においてすでに想定されていたもので、今回、実際に平面的・断面的に確認することができたものである。

調査区東側
 東側は、「美乃利Ⅰ」のV区で報告した基本土層と同じである。V区の北西側と一致するもので、V区で認められた「土壤層Ⅱ」と「土壤層Ⅲ」が認められた。

土壤層Ⅱについては、その上面と下面で遺構を検出することができ、前者を第1面、後者を第2面と呼称し、調査を進めていった。また、第1面において、溝状遺構の規模が大きく、かつ切り合い関係が顕著であるため、便宜上、2回にわけて遺構の検出を行った。

2回目の調査については、第1面（2）として、調査を進めていった。



第7図 基本土層図

「土壤層Ⅲ」については、本調査区においても水田土壤層で、調査区東隅において、水田畦畔を検出することができ、第3面として調査を進めていった。また、土壤層Ⅲの下層においても土壤層（第18層）を確認することができたが、当土壤層上面において畦畔を確認することはできなかった。この下層の第19層は、後述する完新世段丘の基盤層となっている。他の土層と比較してかなり硬質な層である。

調査区西側 調査区西側の土層は、完新世段丘形成後、東側を段丘崖によって隔てられた氾濫原面にあたり、徐々に埋没していく。この過程で最初に堆積したのが第13層と第14層である（第7図）。両層とも明らかな洪水層で、両層の堆積には大きな時期差は存在しないものと考えられる。

その後、堆積→再掘削を繰り返し、段丘崖が埋没していく。この再掘削の過程として確認できたのが、今回報告する多くの溝状造構である。第7図では、SD08・SD12・SD13がこれに該当する。そして、この過程の最終形態が、平面的に段丘崖と西側には平行する用水路（第1層）である。また、それぞれの溝のなかにおいても、堆積→再掘削が認められる。詳しくは、各造構の項で報告する。さらに、当段丘の埋没過程については、今回報告する西側の調査結果を合わせて検討する必要がある。

完新世段丘崖がほぼ埋没した段階で形成されたのが、第7層・第8層（土壤層Ⅱ）である。そして、西半部においても、当該土壤層の上面と下面とで造構を検出し、前者を第1面、後者を第2面としている。検出面としては、それぞれ、東半部の検出面と対応するものである。

なお、西半部の第8層と東半部の第7層とが同時期に形成されたのかについては、調査では明確にできなかった。

（2）包含層出土土器

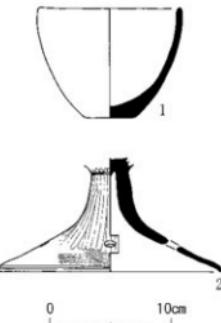
第1面を検出するにあたって、多くの土器が出土している。これらの土器については、直接造構に伴うものではないが、当地区における土地利用の時期を検討するうえで参考となるものと考えられる。そこで、特徴的な造物について報告したい。ここでは、氾濫原面出土土器と水田被覆層出土土器とに分けて報告する。

氾濫原面出土遺物 弥生時代後期と平安時代以降の土器が出土している。

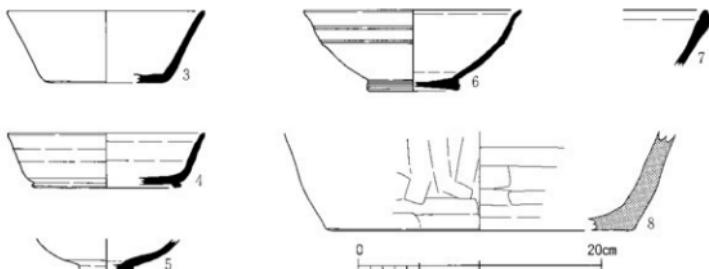
弥生土器 鉢（1）と高杯（2）が出土している（第8図）。

1は、完形に復元できた鉢で、直口鉢に分類できるものである。底部は平底をなす。内外面とも摩滅が顕著で、唯一観察できる内面下半は、ヘラナダ調整により仕上げられている。

2は、高杯の脚部である。外面はハケ調整後、縦方向のヘラミガキにより仕上げられている。内面の調整は摩滅のため観察できない。径1cmの透穴が2箇所に残存する。その位置関係から、本来は4ヶ所にあったものと推定される。



第8図 気温原面出土土器（1）



第9図 沖縄原面出土土器(2)

奈良時代以降 平安時代の須恵器と備前焼が出土している(第9図)。

須恵器 杯・杯B・碗・捏鉢が出土している。杯は3の1個体である。

底部は回転ヘラ切りにより切り離されている。杯Bは4の1個体のみで、平安時代前期に位置付けられる。碗は、5と6の2個体で、いずれも突出した平高台を有するタイプである。6の外面には2条の沈線が施されている。捏鉢は7の1個体で、口縁部がわずかに残存する小片である。端部をわずかに捲み上げている。鎌倉時代まで下がるものと考えられる。

備前焼 8の1個体である。壺の底部と考えられる。

水田出土遺物 水田を埋めるために整地された層の中から出土した土器である。土師器と須恵器が出土している(第10図)。

土師器 9の1個体である。口縁部は横ナデ調整により仕上げられ、底部は回転糸切りにより切り離されている。また、体部外面は、ヘラ削りの後ナデ調整が加えられている。平安時代後半～鎌倉時代に位置付けられるものと考えられる。

須恵器 杯B(10)と碗(11)が出土している。10は、底部にヘラ削りが施されている。11は、平高台を有するもので、回転糸切りにより切り離されている。口径に対して底径が大きい点が、特徴的である。

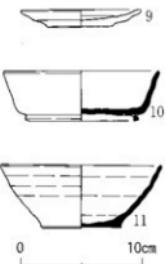
石器 サヌカイト製の石錐(S1)が出土している(第11図)。幅広の素材剥片の打面側に作り出し、末端

側を捲み部としているが、錐部は捲み部の近くで折れている。錐部の作出は急角度の二次加工で行われている。末端側にも錐部様の折れた突起が認められるが、錐部としては薄く硬度のあるものの穿孔には向きである。サヌカイトの風化と自然面の状況は金山産のものに類似する。

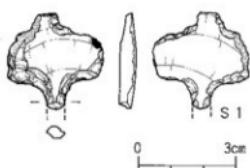
〔註〕

(1) 高橋 学「加古川下流域平野の地形環境分析－完新世段丘面の段丘化と美乃利遺跡の鉄状遺構－」

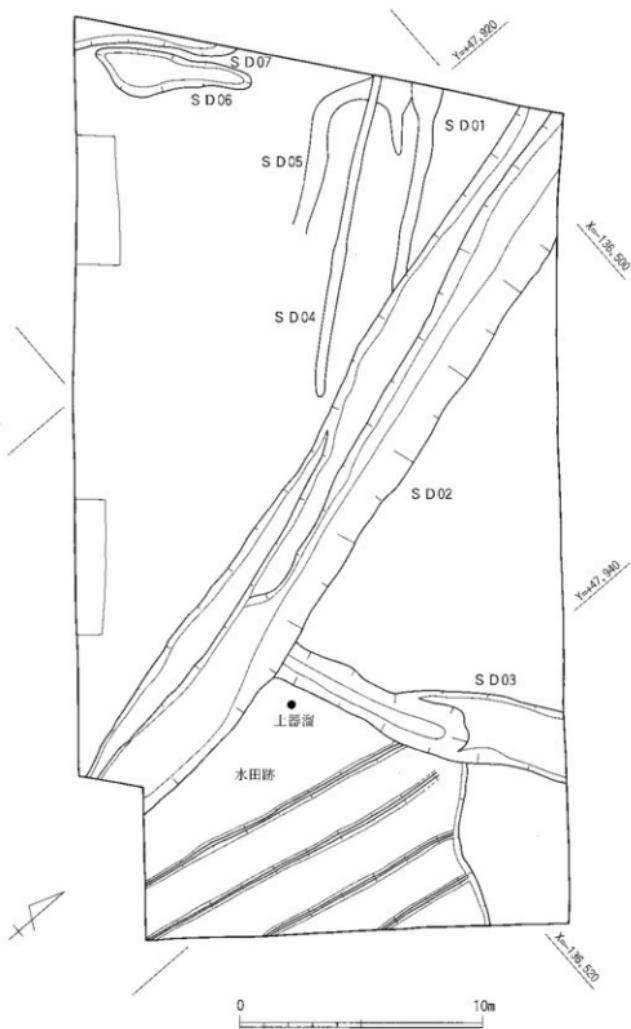
『美乃利遺跡－一級河川別府川河川改良事業に伴う発掘調査報告書－』兵庫県教育委員会 1997



第10図 水田被覆層出土土器



第11図 沖縄原面出土石器



第12図 第1面

第2節 第1面の調査

(1) 概要

当遺構面は、段丘崖を境に約40cmのレベル差をもって検出されている。段丘崖西側の氾濫原面にあたる地区では溝状遺構が、段丘面においては溝状遺構と水田跡が検出されている。また、段丘面上で土器が数点まとめて出土している。本報告では土器面として報告する(第12図)。

(2) 溝

SD01

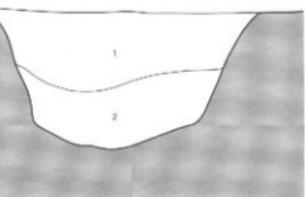
6.40m

検出状況

調査区北隅で検出した(第12図)。調査区中央を対角線状にはしるSD02の西側、及びSD04の北側に位置し、SD04とはほぼ平行する。また、SD02・SD05と切り合い関係にあり、SD02に切られ、SD05を切っている。北西—南東方向には直線的にのびる溝で、北西側は調査区外へ、南東側はSD02に切られ、収束している。

形状・規模

8.10m検出した。横断面はU字形をなし、検出面における幅1.35m~50cmを測り、最深部における検出面からの深さは32cmである。



1. 明灰黄色極細砂
(褐色極細砂ブロック状に混入)
2. 淡褐色極細砂
(褐色極細砂ブロック状に混入)

第13図 SD01

埋没状況

2層からなる(第13図)。層相から判断して、2層とも人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物

須恵器の小皿と椀が出土している(第14図)。

小皿

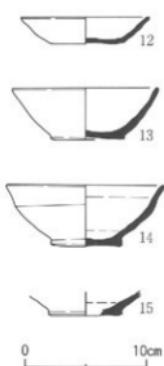
12の1個体が出土している。底部は、平高台の痕跡は認められず、回転糸切りにより切り離されている。

椀

13~15の3個体出土している。いずれも、突出した平高台を有するものである。ただし、13は口径に対して底径が大きく、突出がわずかである点において、14・15と特徴を異にする。また、底部はヘラ切りにより切り離されている。一方、14は回転糸切りにより切り離されている。15の底部の切り離しは観察できず、ハケ目が認められる。

時期

出土土器から判断して、11世紀後半と考えられる。



第14図 SD01出土土器

SD02

検出状況

調査区中央部で検出した（第12図）。調査区の南北対角線上を直線的にのびる溝で、両端とも調査区外までのびている。SD01・SD03と切り合い関係にあり、両遺構を切っている。

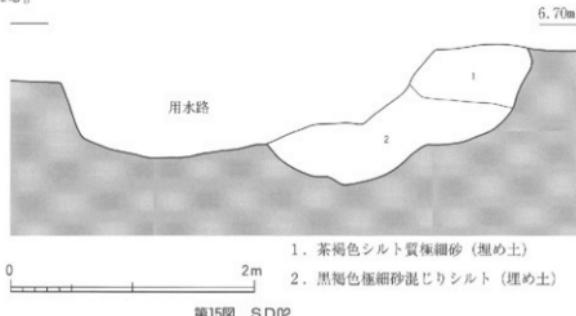
なお、当溝は、調査前まで機能していた用水路と平面的に一致するものである。当遺構埋没後、西側肩部を中心用水路が掘削されている。

形状・規模

33.30m検出した。横断面はU字形をなし、検出面における幅2.70m～4.50mを測り、最深部における検出面からの深さは1.15mである。底部の標高は、北端で6.37m、南端で6.48mと、ほぼ一定している。

埋没状況

2層からなる（第15図）。層相から判断して、2層とも人為的に埋められたものと考えられる。



出土物

土師器・須恵器・瓦が出土している（第16図）。

土師器

16の甕1個体が出土している。口縁部は内外面とも横ナデ調整により、体部は内外面ともハケ調整により、仕上げられている。口縁部には、径9mmの縦穴が1穴残存する。

須恵器

杯G蓋（17）・杯B蓋（18・19）・杯A（20・21）・高杯（22）・椀（23）が出土している。これらのなかで、蓋・杯A・高杯については、ほぼ同時期のものと考えられる。一方、椀については、時期的に新しく位置付けられるものである。

なお、20の底部はヘラ切りにより切り離され、その後は未調整である。21は、回転糸切り後ナデ調整が加えられている。また、23の底部も、回転糸切りにより切り離されている。

瓦

24と25の2点出土している。いずれも平瓦の小片で、凹面には布目が残存する。凸面は、格子叩きが認められる。須恵質の瓦である。

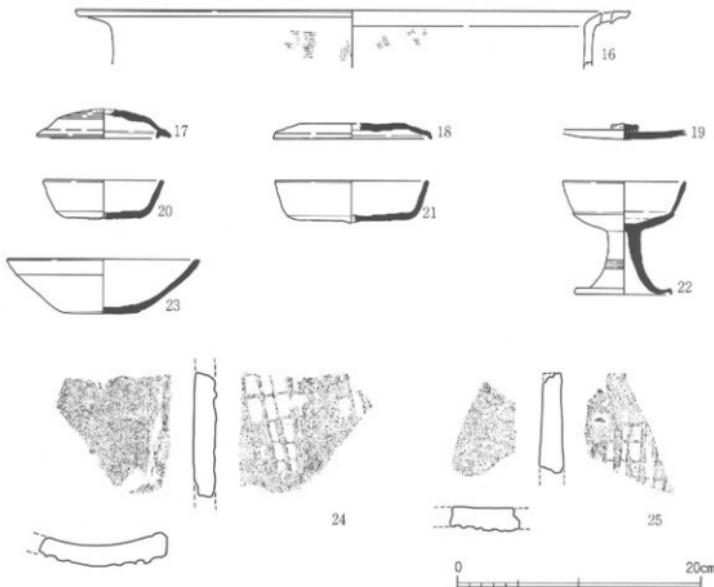
時期

出土土器をみると、7世紀代～12世紀代と時期幅を有することから、12世紀以降と考えられる。

SD03

検出状況

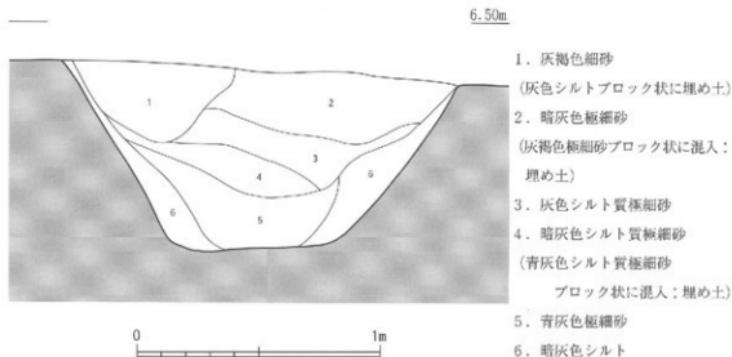
調査区東部で検出した（第12図）。唯一、段丘面上で検出された遺構である。SD02の東側に位置し、北東～南西方向にはば直線的にのびている。SD02と切り合い関係にあり、SD02に切られている。東端は調査区外までのび、西端はSD02に切られて収束している。



第16図 SD02出土土器

形状・規模 12.90m検出した。横断面は逆台形をなし、検出面における幅1.60m～3.90mを測り、最深部における検出面からの深さは79cmである。底部の標高は、東端で6.32m、西端で6.24mと、わずかに西側へ傾斜している。

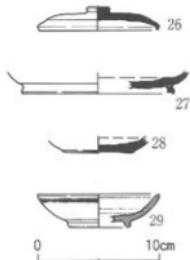
埋没状況 6層からなる（第17図）。1・2・4層については、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。また、1層については、調査前まで用水路として機能して



第17図 SD03

いたものである。

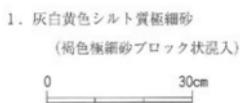
- 出土遺物** 須恵器と染付け磁器が出土している（第18図）。
- 須恵器** 杯B蓋（26）・杯B（27）・椀（28）が出土している。これらの中で、椀については時期的に新しく位置付けられるもので、底部は回転糸切りにより切り離されている。
- 染付** 29の1個体である。高台畳付から底部にかけては露胎し、内外面に各2条の回線が認められる。
- 時期** 出土土器から判断して、奈良時代に掘削され、最終的に江戸時代に埋没したものと考えられる。



第18図 SD03出土土器

S D 0 4

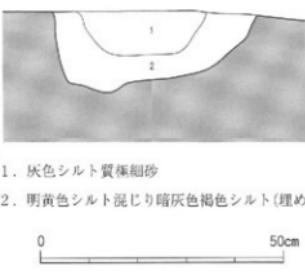
- 検出状況** 調査区西部で検出した（第12図）。SD01の南西側、SD02の西側に位置し、北西—南東方向にはほぼ直線的に伸びている。SD01とはほぼ平行する。SD05と切り合い関係にあり、SD05を切っている。北西端は調査区外までのび、南東端は調査区内で収束している。
- 形状・規模** 13.40m検出した。横断面はU字形をなし、検出面における幅32cm～50cmを測り、最深部における検出面からの深さは16cmである。底部の標高は、北西端で6.18m、南東端で0.08mと、わずかに南東側へ傾斜している。
- 埋没状況** 1層からなる（第19図）。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。
- 出土遺物** 出土していない。
- 時期** 土器が出土していないため、時期の特定は困難である。SD05との切り合い関係から判断して、鎌倉時代以降と考えられる。



第19図 SD04

S D 0 5

- 検出状況** 調査区西部で検出した（第12図）。SD01の西側、SD06の東側に位置し、北西—南東方向から南北方向に屈曲し、L字形をなしている。SD01・SD04と切り合い関係にあり、両邊構に切られている。北西端は調査区外までのび、南東端は調査区内で擾乱を受け、途切れている。
- 形状・規模** 7.80m検出した。横断面は逆台形をなし、検出面における幅65cmを測り、最深部にお



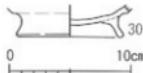
第20図 SD05

ける検出面からの深さは17cmである。底部の標高は、ほぼ一定している。

埋没状況 2層からなる（第20図）。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 土師器の腕の底部片1点（30）が出土している（第21図）。高台が貼り付けられ、横ナデ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から判断して、平安時代末と考えられる。



第21図 SD05出土土器

SD06

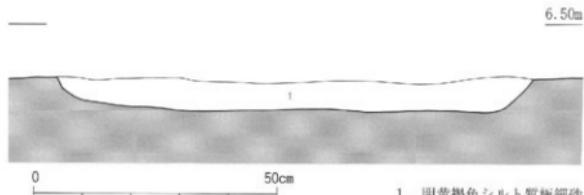
検出状況 調査区南西隅で検出した（第12図）。SD07の南東側に位置し、どちらかというと、不定形な落ち込みに近い形態である。他の遺構との切り合い関係は認められず、両端とも調査区内で収束している。

形状・規模 6.50m検出した。横断面は皿形をなし、検出面における幅70cm～2.00mを測り、最深部における検出面からの深さは11cmである。底部の標高は、ほぼ一定している。

埋没状況 1層からなる（第22図）。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 出土していない。

時期 土器が出土していないため、時期の特定は困難である。鎌倉時代以降と考えられる。



第22図 SD06

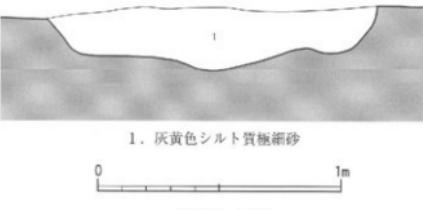
1. 明黄褐色シルト質極細砂

SD07

検出状況 調査区南西隅で検出した（第12図）。SD06の北西側に位置する。大半が調査区外へ抜がっており、全体を把握することはできなかった。

方向性としては、SD06
とはほぼ平行する。

形状・規模 6.70m検出した。横断面は皿形をなし、検出面における幅は70cmを測り、最深部における深さは26cmである。底部の標高は、ほぼ一定



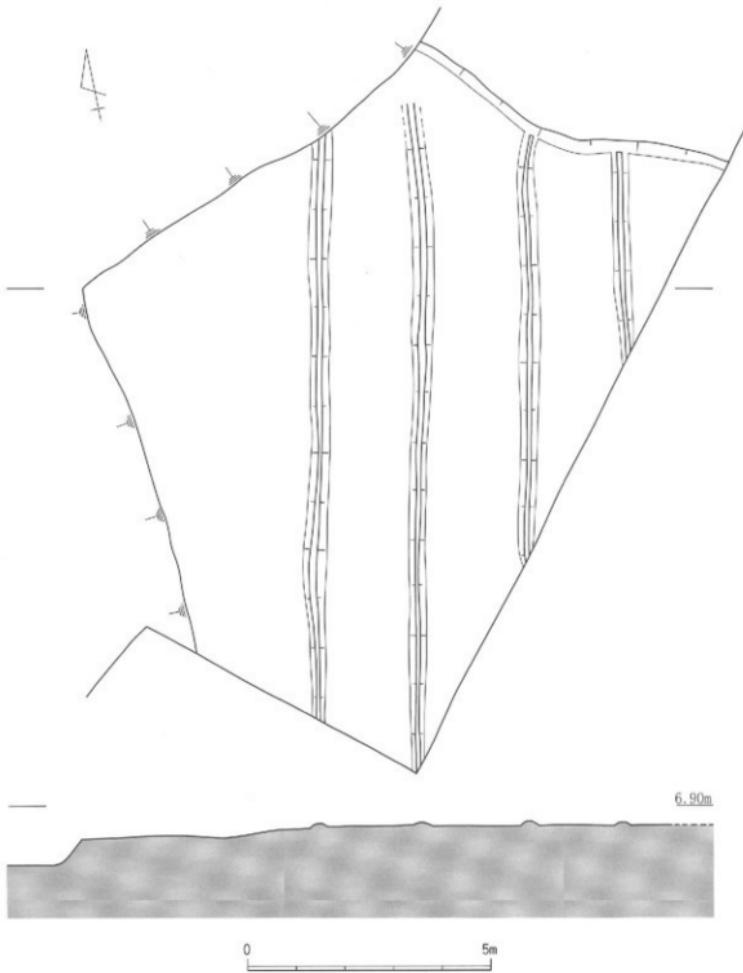
1. 灰黄色シルト質極細砂

している。

埋没状況 1層からなる（第23図）。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 出土していない。

時期 土器が出土しないいため、時期の特定は困難である。鎌倉時代以降と考えられる。



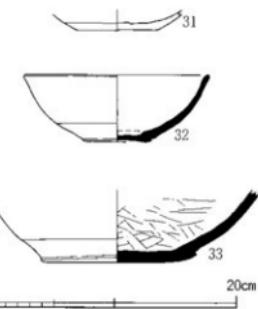
第24図 水田跡

(3) 水田跡

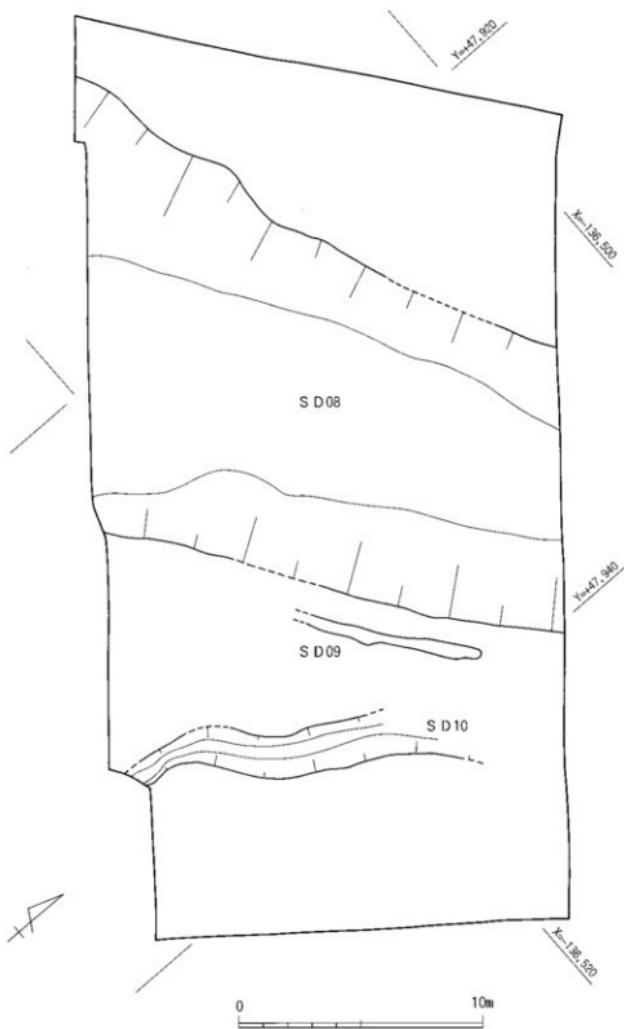
- 検出状況** 調査区南東隅、段丘面上で検出した（第12図）。4本の直線的にのびる畦状の高まりが、ほぼ同じ間隔をもって平行して検出されたもので、「美乃利Ⅰ」のV区の調査報告で「上層水田」として報告したものと一帯のものである。SD02の西側、SD03の南側に位置する。
- 形状・規模** 畦状の高まりは、断面蘆鉢形をなし、基底部における幅30cm、基底部からの高さ5~10cmを測る。畔の長さは最大で13.8m残存する。畝相互の間隔は、西側から1.70m・1.80m・1.70mと、ほぼ一定している。
なお、水田は全体的に約20cm掘り下げ、盛土により畝が造られている。
- 埋没状況** 畝は人為的に埋められ、整地されている。
- 時期** 出土土器（第2章第1節）からは平安時代後期と考えられるが、覆土の特徴から、「美乃利Ⅰ」で報告したとおり、近世以降と考えられる。

(4) 土器溜

- 土師器** 土師器と須恵器が出土している（第25図）。
- 31の杯1個体が出土している。内面見込みは、ヘラ先によるヘラ削り、他は横ナデ調整により仕上げられている。底部は回転糸切りにより切り離されている。底径から杯と判断したが、皿の可能性も考えられる。
- 須恵器** 杯（32）と捏鉢（33）が出土している。
杯は、完形に復元される個体で、底部はわずかに平高台の痕跡が認められる。底部は、回転糸切りにより切り離されている。
捏鉢は、底部を中心には存する。内外面ともナデ調整により仕上げられている。また、底部は回転糸切りにより切り離されている。
- 時期** 平安時代末と考えられる。



第25図 土器溜出土土器



第26図 第1面 (2)

第3節 第1面（2）の調査

(1) 概要

3条の溝状造構を検出した。

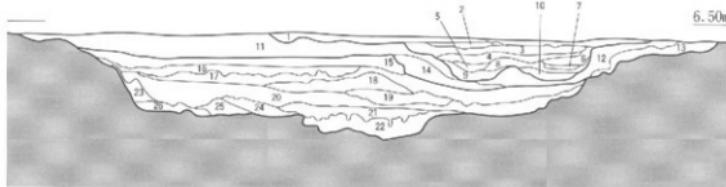
(2) 溝

SD08

検出状況 調査区南西半で検出した（第26図）。今回報告する造構のなかで最も大規模な造構で、平面的に調査区全体の約1/3以上を占める。SD09の南西側に位置し、南西→北東方向には直線的にのびる溝である。両端とも、調査区外まで伸びている。他の造構との切り合ひ関係は認められなかった。

形状・規模 22.78m検出した。横断面は逆台形をなし、検出面における幅は10.45m～14.50mを測り、最深部における検出面からの深さは2.30mである。底部の標高は、北端部で4.00m、南端部で4.10mと、ほぼ一定している。

埋没状況 堆積は、19層（第28図）～25層（第27図）と、かなり複雑な様相を呈している。当溝は、当初の掘削後、埋没→再掘削を幾度か繰り返し、最終的に全体が埋没している。第28図の



- | | |
|--------------------------|------------------------|
| 1. 灰褐色シルト質極細砂 | 14. 暗灰色シルト～極細砂（洪水砂） |
| （明黄色シルト質極細砂ブロック状に混入：埋め土） | 15. 茶褐色シルト質極細砂（土壤層） |
| 2. 揭色疊混じり細砂（洪水砂） | 16. 黒褐色シルト（自然堆積） |
| 3. 灰色シルト質極細砂（洪水砂） | 17. 灰色粗砂～シルト（土壤層） |
| 4. 黒褐色シルト（自然堆積） | 18. 灰色シルト～極細砂（洪水砂） |
| 5. 黒褐色シルト（自然堆積） | 19. 暗灰色シルト～粗砂（洪水砂） |
| 6. 灰色シルト質極細砂（洪水砂） | 20. 灰色粗砂～極細砂（洪水砂） |
| 7. 黒褐色シルト（自然堆積） | 21. 暗灰色疊混じり極細砂～粗砂（洪水砂） |
| 8. 灰黄褐色シルト質極細砂（洪水砂） | 22. 暗灰色疊混じり極細砂～細砂（洪水砂） |
| 9. 灰色シルト質極細砂（洪水砂） | 23. 暗灰色極細砂（洪水砂） |
| 10. 灰褐色シルト質極細砂（洪水砂） | 24. 灰色シルト～細砂（洪水砂） |
| 11. 揭灰色シルト質極細砂 | 25. 青灰色シルト～細砂（洪水砂） |
| 12. 灰色極細砂（洪水砂） | |
| 13. 黑褐色シルト質極細砂 | |



第27図 SD08 (1)

断面を例にとると、9ステージにその過程を細分することができる（第30図・第31図）。

その具体的な埋没過程は、以下の通りである。

第Ⅰステージ 最初の掘削である。

第Ⅱステージ 16～19層が堆積する。19層を除いては、洪水に起因する堆積である。これらの層中からは、弥生時代中期（第32図～第33図）の土器が出土していることから、当該期に堆積したものと考えられる。19層に関しては、その層相から判断して、16～18層の堆積以前の堆積で、16～18層が堆積する際に抉られたものと考えられる。

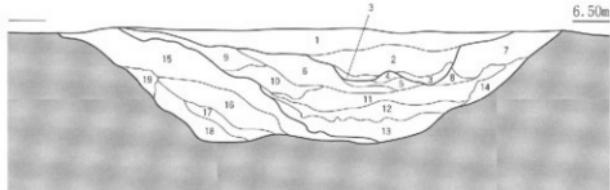
第Ⅲステージ 14層と15層が堆積する。この段階で、一端、当溝は完全に埋没したものと考えられる。

前ステージの16～18層と、層相的に大きな差は認められない。ただし、弥生時代後期の土器（第34図・第35図）が含まれていることから、16～18層とはやや時間差が認められ、異なるステージとした。

第Ⅳステージ 大規模な掘削が行われる。これが、14層・15層上面のラインである。この時期を特定することは困難であるが、この掘削ラインの上層の13層中からは、古墳時代中期の土器が出士している。よって、当ステージを当該期に位置付けることができる。

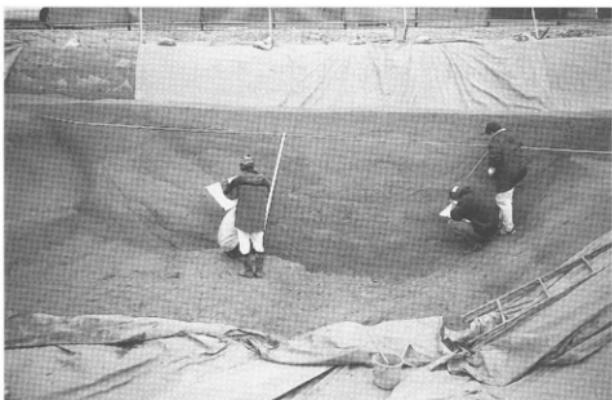
第Ⅴステージ 10～13層が堆積する。各層とも、洪水に起因する堆積である。これらの層中からは、古墳時代中期の土器（第36図）が出土していることから、当該期に堆積したものと考えられる。

第Ⅵステージ 4～8層が堆積する。6層と8層以外は、明らかに人為的に埋められた層である。よっ



- | | |
|---|--|
| 1. 淡褐色シルト質極細砂（埋め土） | 9. 青灰色シルト質極細砂
(褐色シルト質砂ブロック状に混入：埋め土) |
| 2. 青灰色シルト
(黒褐色シルトブロック状に混入：埋め土) | 10. 暗灰色シルト質極細砂（洪水砂） |
| 3. 青灰色シルト
(黒褐色シルトブロック状に混入：埋め土) | 11. 灰色極細砂（洪水砂） |
| 4. 青灰色極細砂～細砂（盛土） | 12. 灰色極細砂～中砂（洪水砂） |
| 5. 茶褐色シルト質極細砂
(黄褐色シルトブロック状に混入：埋め土) | 13. 灰色極細砂～粗砂（洪水砂） |
| 6. 灰色細砂～中砂（洪水砂） | 14. 暗灰色シルト |
| 7. 灰色シルト質極細砂
(灰色シルト質極細砂ブロック状に混入：埋め土) | 15. 黄褐色シルト質極細砂～灰色シルト（洪水砂） |
| 8. 青灰色極細砂～細砂 | 16. 青灰色シルト～極細砂（洪水砂） |

第28図 SD08 (2)



第29図 SD08断面の実測

て、当ステージにおいて、当溝全体が埋められたものと考えられる。ただし、上記の層の上面のラインから判断して、完全には埋没しなかったものと考えられる。

第Ⅶステージ 一部が再掘削される。これが、3層下面のラインである。このラインの形状から、水路として機能していた可能性が考えられる。当層から飛鳥時代の土器（第37図）が出土している。

第Ⅷステージ 2層が堆積し、前ステージの溝が再び埋没する。層相から、人為的に埋められている。2層中から、奈良時代を中心とした土器（第38図）が出土していることから、当該期に埋められたものと考えられる。

第Ⅸステージ 1層が堆積して、当溝は完全に埋没する。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 弥生時代・古墳時代・飛鳥～奈良時代の土器が出土している。

弥生時代 前期・中期・後期の各時期の土器が出土している。

前期 蓋と底部片が出土している（第32図）。いずれも、胎土中に3・4mm大の砂粒が多く含まれていることから、当該期に位置付けたものである。

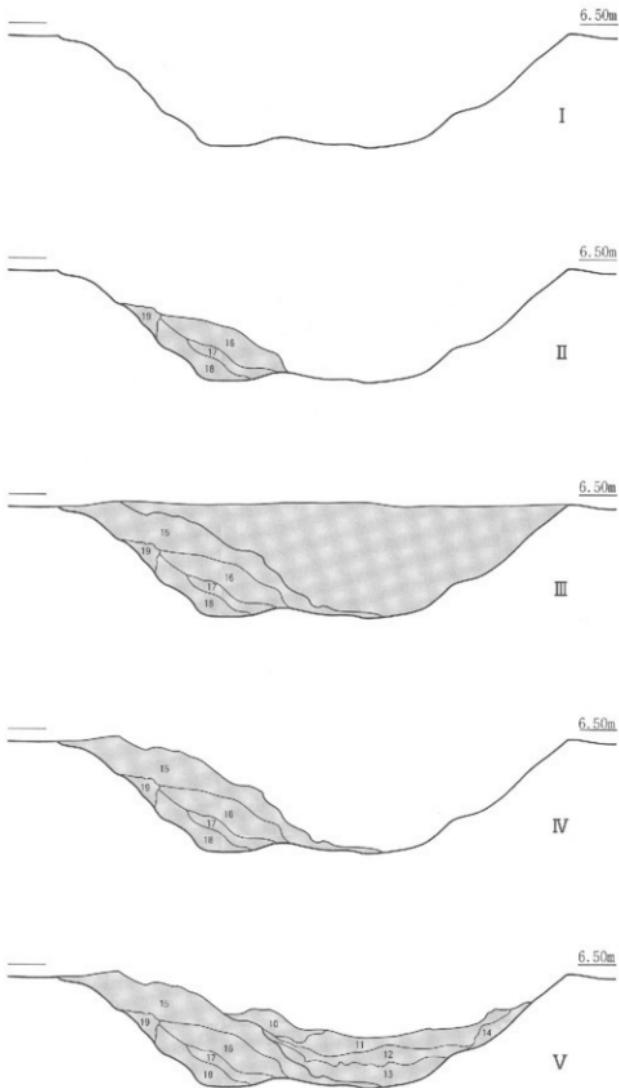
蓋は34の1個体のみである。全体的に摩滅が著しいが、外面はハケ調整、天井部と内面はナデ調整により仕上げられている。

底部片は、35～37の3個体を図化した。35は、外面がハケ調整により仕上げられるもので、蓋の可能性も考えられる。37は、内外面ともハケ調整により仕上げられている。36は、摩滅が著しく、調整は観察できない。

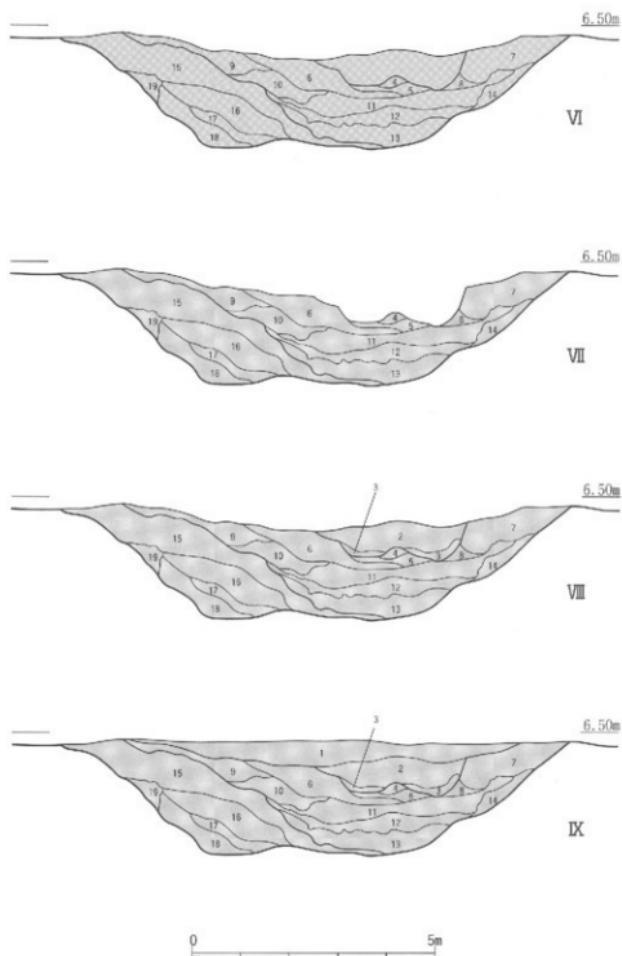
中期 痢・壺・高杯・器台・複合土器・脚部・たこ壺の各器種が出土している（第32図～第34図）。

壺 広口壺・直口壺・無頸壺・体部・底部の各器種が出土している。

広口壺は、38～42の5個体を図化した。いずれも、残存する範囲においては、内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。ただし、施文方法においてはバリエーションが認

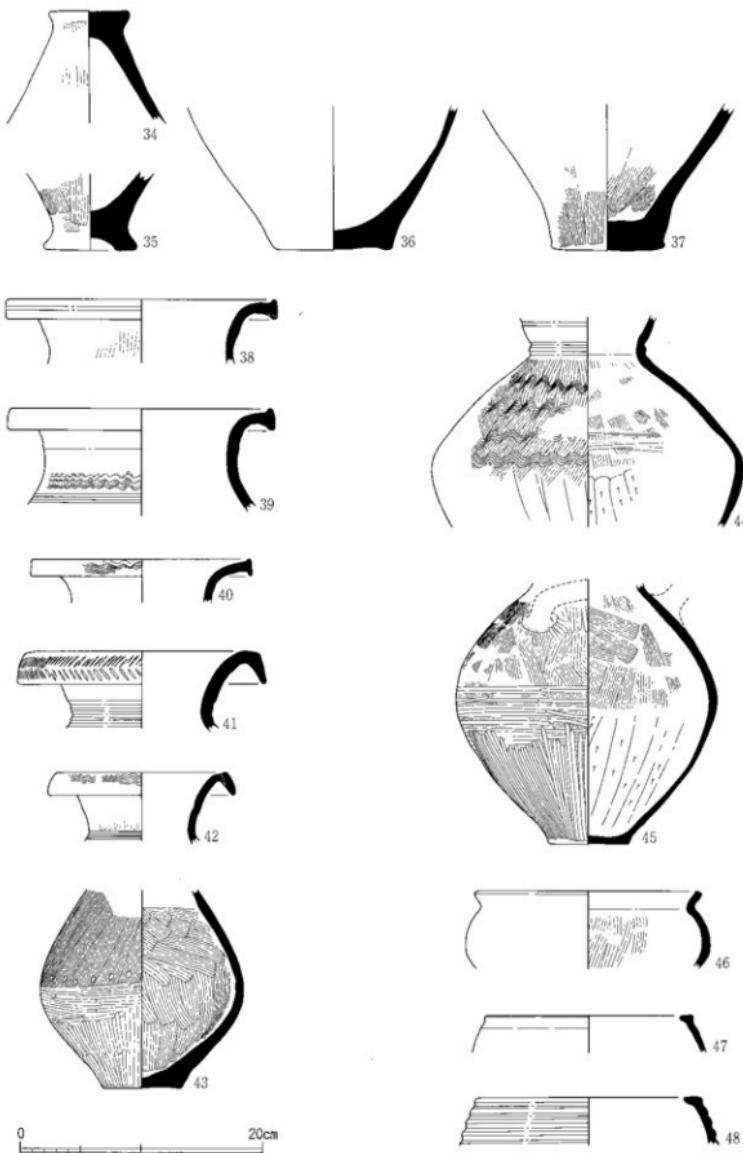


第30図 SD 08の埋没過程 (1)

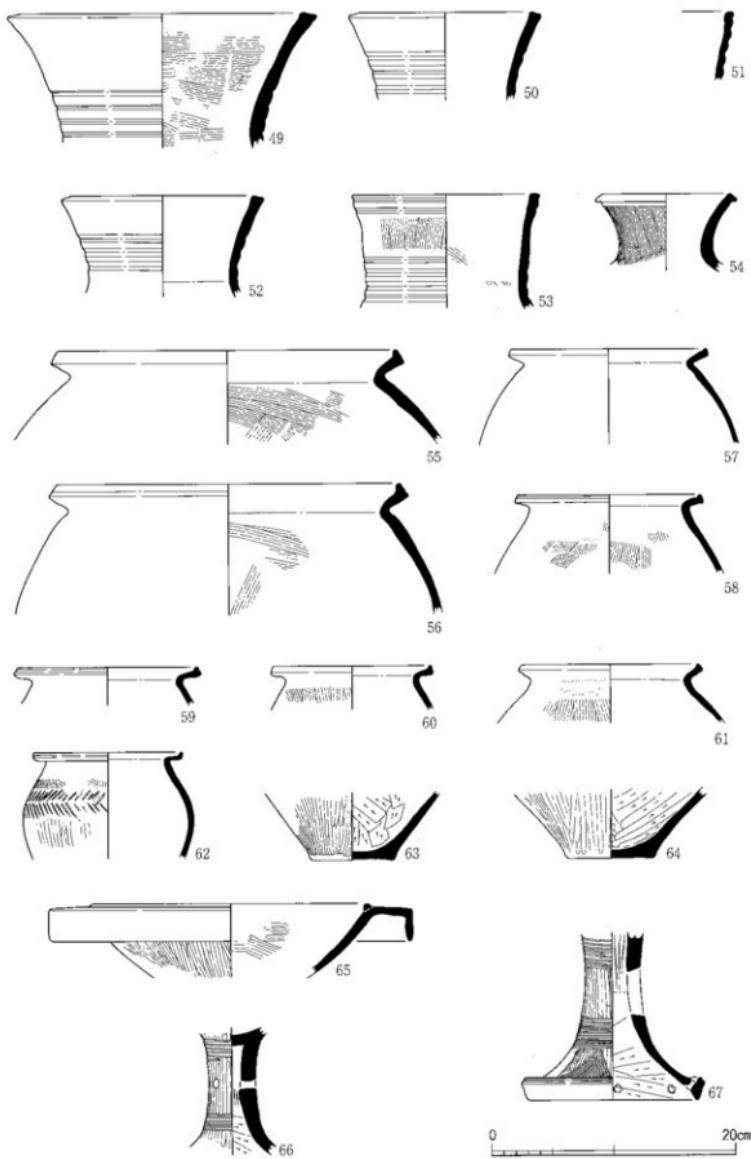


第31図 SD08の埋没過程(2)

められる。38は、施文が認められない。39は、頸部下外面に8条からなる櫛描波状文と4条からなる櫛描直線文が施文されている。40は、口縁端面に櫛描波状文が施文されている。41は、頸部外面に3条の凹線文が、口縁端面にキザミ目が絞杉状に施文されている。42は、口縁端面に5条からなる櫛描波状文が、頸部に5条からなる櫛描直線文が施文されている。体部は、43~45の3個体を固化した。43は、底部から肩部にかけて残存するもので、内外面がハケ調整により仕上げられている。また、外面下半はヘラミガキ（横方向→縦方向）



第32図 SD08出土土器(1)



第33図 SD08出土土器（2）

により仕上げられている。体部中位には、円形の刺突文が認められる。44は、広口壺の体部と考えられ、頸部から体部中位にかけて残存する。体部は、内外面ともハケ調整が施され、その後、内面下半はヘラ削り（下→上）、外面は5条1単位の撫描波状文が5単位施されている。頸部は、内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。45は、把手の調離痕が認められることから、水差形土器の可能性が考えられる。内外面をハケ調整後、内面下半は縦方向（下→上）のヘラ削り、外面下半はヘラミガキ（横方向→縦方向）により仕上げられている。

無頭壺は、46～48の3個体である。46は、口縁部をく字形に短く屈曲させ、横ナデ調整により仕上げられている。体部内面はハケ調整により仕上げられ、外面は摩滅のため観察できない。47・48は同タイプに分類されるものである。ただし、48は外面に凹線文が認められるのに対して、47には認められない。

直口壺は、49～53の5個体を団化した。いずれも、口縁部外面に凹線文が施されている。ただし、49～51の口縁部は、広口壺に近い形態である。

この他、54については、その胎土の特徴から、生駒西藍産と判断されるものである。頸部内面はヘラ削りの後ナデ調整、口縁部内面はナデ調整により仕上げられている。

甕 口縁部を中心に残存する個体と底部片が出土している。口縁部を中心とする個体は、基本的に同じ特徴を有するものである。ただし、口縁端面に門線が施されるもの（56・58・59・62）と施されないもの（55・57・60・61）とに分類できる。また、法量的にも、大型と小型の2タイプが認められる。また、62の体部中位外面には、キザミ目が2段に綾糸状に施されている。

底部は、63・64の2個体で、外面は縦方向のヘラミガキ、内面は縦方向のヘラ削りにより、仕上げられている。

高坏 坏部と脚部が出土している。坏部は、いわゆる木器形高坏に分類されるもので、内外面ともヘラミガキにより仕上げられている。また、口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

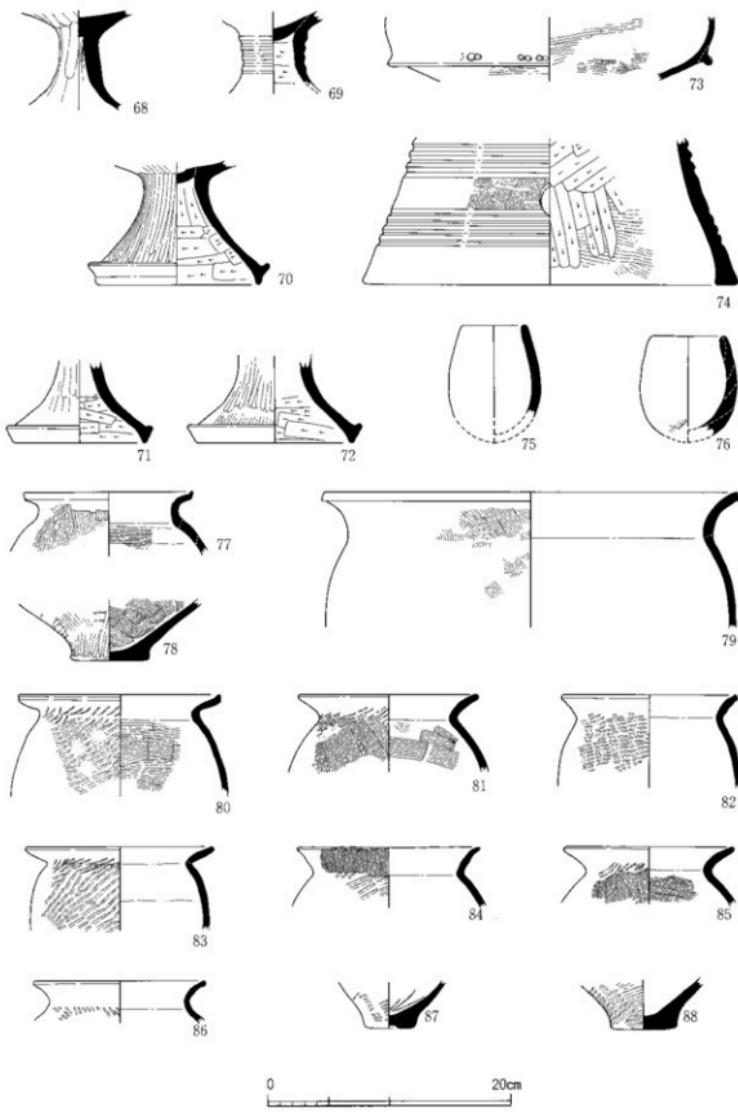
脚部は、66～69の4個体が出土している。66と67は、同タイプに分類できるものである。外面はヘラミガキで仕上げた後、ヘラ描による沈線が施されている。ヘラ描沈線は、上から、66が5条と6条、67が8条と10条、それぞれ施されている。また、66の脚部中位には円形の透穴が3箇所に、67の脚部中位には方形の透穴が2箇所に穿たれている。ただし、66の円形透の1つは、貫通していない。

この他、68は、外面が粗いヘラミガキにより仕上げられている。69は、外面に凹線文が施され、内面はヘラ削りにより仕上げられている。

脚部 高坏もしくは台付土器の脚部で、その器種を特定できないものである。70～72の3個体を団化した。いずれも、外面はヘラミガキ、内面はヘラ削りにより仕上げられている。

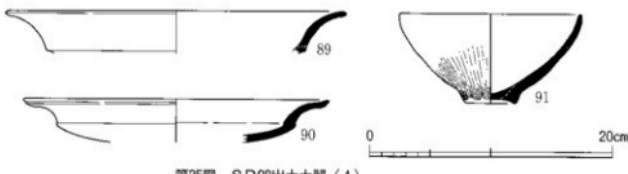
複合土器 73の1個体を団化した。体部がわずかに残存するもので、外面には突帯が貼り付けられている。この突帯の上側には、円形浮文が貼り付けられている。残存する範囲では、隣接する2個が1対をなし、2対が単位となり、貼り付けられているようである。

器台 74の1個体のみである。底部付近の残存で、外面はハケ調整後、上から3条と4条の凹



第34図 SD08出土土器(3)

線文が施されている。内面は、ハケ調整後、ヘラケズリが施されている。底部は横ナデ調整により仕上げられている。



第35図 SD08出土土器（4）

たこ壺 75と76の2個体が出土している。いずれも同タイプのもので、内外面とも指オサエヒナデ調整により仕上げられている。

後期 壺・壺・高壺・鉢の各器種が出土している（第34図・第35図）。

壺 広口壺（77）と底部（78）が各1個体出土している。77は、体部内外面をハケ調整後、口縁部が内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。口縁端面には、擬凹線の痕跡がわずかに観察できる。78は、壺の可能性も考えられるが、その形態から壺に分類した。外面は、叩き整形後ハケ調整、内面はハケ調整により仕上げられている。

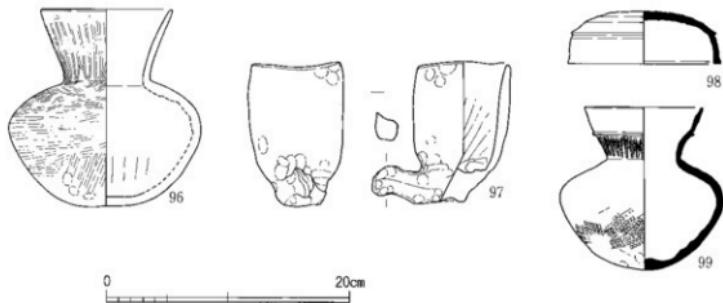
壺 いわゆるV様式系壺と、それ以外の壺の2タイプに分類できる。後者は、79の1個体のみで、他は、底部片も含めて全てV様式系壺に分類できるものである。

79は、口径33cmを測る大型の壺で、鉢に分類される可能性も否定できない。体部から口縁部にかけての外面をハケ調整後、内外面がナデ調整により仕上げられている。

V様式系壺は80~88の9個体を図化した。外面は、叩き整形後ハケ調整を加えるもの（81・84・85）と、加えないものとが認められる。内面は、ハケ調整により仕上げられるものと、ナデ調整により仕上げられるものとが認められる。ヘラ削りは認められない。

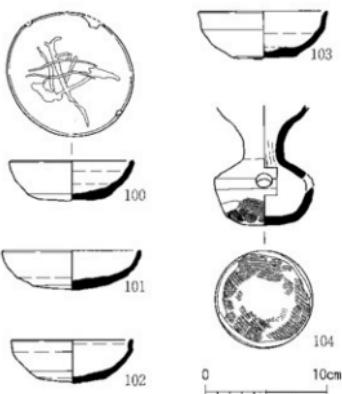
高壺 2個体（89・90）出土している。2個体とも同タイプに分類できるもので、体部と口縁部の境が明瞭な稜をなす。89は、内外面ともナデ調整により仕上げられている。90は、磨滅が著しく、調整は観察できない。

鉢 91の1個体のみである。楕形を呈する鉢で、外面はハケ調整後ヘラミガキ、内面はナデ調整により仕上げられている。内面については、磨滅のため十分な観察ができないが、ヘラミガキが施されていた痕跡がわずかに観察できる。底部は、指オサエにより仕上げられている。

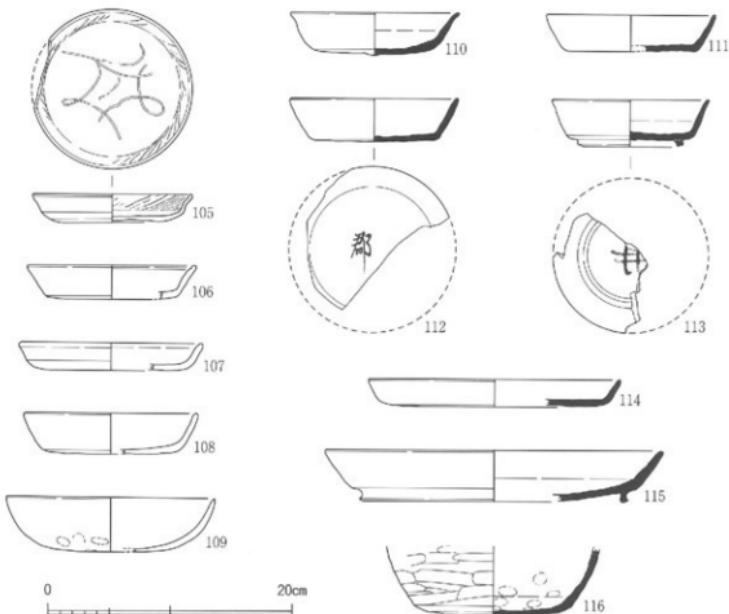


第36図 SD08出土土器（5）

- 古墳時代 中期の土師器と須恵器が出土している（第36図）。
- 土師器 直口壺（96）と角杯（97）が出土している。
- 直口壺は、ほぼ完存する。外面はヘラ磨きにより仕上げられ、特に口縁部は暗文状にヘラミガキが施されている。口縁部内面は横ナデ調整後、縱方向のヘラナデ調整により仕上げられている。体部内面は、下半が板ナデ調整、上半がナデ調整により仕上げられている。
- 角杯もほぼ完存する。全体的に指オサエにより仕上げられている。
- 須恵器 杯蓋（98）と壺（99）が出土している。
- 杯蓋の天井部は、全面にヘラ削りが施されている。
- 壺については、一見したところ、龜のようにみられるが、完存するにもかかわらず体部に穴が認められないことから、壺に分類した。頸部外には13条からなる櫛描波状文が施されている。また、体部外面は格子状の叩きによる整形後、不定方向のヘラ削りにより仕上げられている。
- 飛鳥時代 須恵器の杯と龜（104）が出土している（第37図）。
- 龜は、口縁部を丸くが、頸部以下は完存する。体部中位に径1.3cmの穴があけられ、体部下半は叩き整形により仕上げられている。また、体部中位は、ヘラ削りの後ナデ調整により仕上げられている。
- 奈良時代以降 土師器と須恵器とが出土している（第38図）。
- 土師器 直・杯A・椀が出土している。
- 直は、105と107の2個体である。105は、口縁端部がての字形をなす。口縁部内面に放射状の暗文、見込みに螺旋状の暗文が施されている。底部は、ヘラ切りの後ナデとヘラ削りにより仕上げられている。飛鳥～奈良時代に位置付けられる。一方、107は、平安時代～鎌倉時代に位置付けられるもので、口縁部は二段の横ナデ調整により仕上げられている。また、底部は指オサエとナデ調整により仕上げられている。
- 杯Aは、106と108の2個体である。106は、口縁部内縁面に1条の沈線が施されている。全体的に横ナデ調整により仕上げられているが、底部の切り離し方法は観察できない。108は、口縁端部を丸く納めるもので、底部はヘラ切りにより切り離されているようである。
- 椀は、109の1個体である。口縁端部は薄く仕上げられ、底部は指オサエにより仕上げられている。
- 須恵器 杯A・杯B・直A・直B・鉢が出土している。
- 杯Aは、110～112の3個体である。底部はいずれも回転ヘラ切りにより切り離されている。この中で注目されるのが、112の底部は中央に「郡」の墨書きが認められる点である。



第37図 SD08出土土器（6）



第38図 SD08出土土器(7)

(巻首図版4)。この土器については、第3章にて検討する。

杯Bは113の1個体である。この土器の底部下面中央にも「井」の墨書きが認められる。

皿Aは114の1個体である。底部は回転ヘラ切りにより切り離され、ナデ調整により仕上げられている。

皿Bは115の1個体である。底部は、回転ヘラ削りにより切り離されている。

鉢は116の1個体で、底部を中心には残存する。外面はヘラ削りもしくはヘラナデ調整により、内面は指オサエの後横ナデ調整により仕上げられている。

時 期 出土土器から、弥生時代中期から奈良時代にかけて、数段階にわたって埋没していくものと考えられる。



1. 暗灰褐色シルト質粗繊砂
(明灰褐色シルト質極細砂
ブロック状に含む：埋め土)

SD09

検出状況 調査区北東半で検出した (第26図)。



第39図 SD09

S D 08の北東側に位置し、S D 08と平行する。南西—北東方向にはほぼ直線的にのびる溝で、南西端は、第1面(1)のS D 02に切られ、北東端は調査区内で収束している。

形状・規模 7.20m検出した。横断面はU字形をなし、検出面における幅は43cmを測り、最深部における検出面からの深さは12cmである。底部の標高は、ほぼ一定している。

埋没状況 1層からなる(第39図)。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 土器は出土していない。

時期 土器が出土していないため、時期の特定は困難である。

S D 1 0

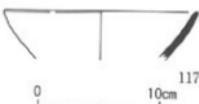
検出状況 調査区北東半で検出した(第26図)。S D 09の南東側に位置する。南南西—北北東方向に蛇行気味にのびる溝で、南南西端は調査区外へ伸び、北北東端は第1面(1)のS D 03に切られている。

形状・規模 14.50m検出した。横断面はやや深い皿形をなし、検出面における幅は1.91mを測り、最深部における検出面からの深さは27cmである。底部の標高は、ほぼ一定している。

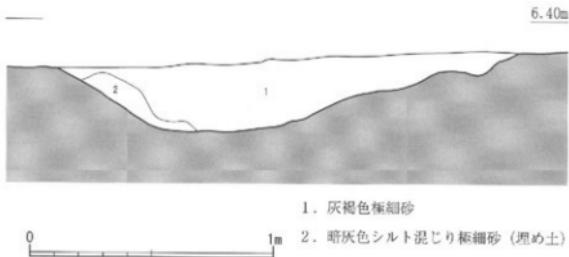
埋没状況 2層からなる(第41図)。少なくとも第2層に関しては、層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 須恵器の椀が1点(117)出土している(第40図)。平安時代～鎌倉時代に位置付けられるものである。

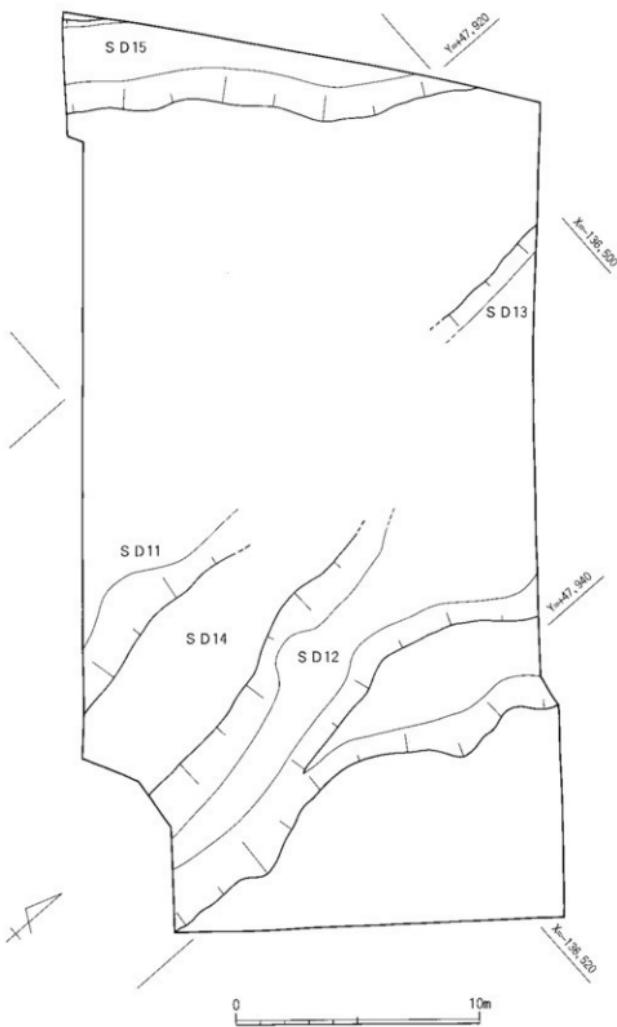
時期 出土土器から判断して、平安時代～鎌倉時代に位置付けられるものと考えられる。



第40図 S D 10出土土器



第41図 S D 10



第42図 第2面

第4節 第2面の調査

(1) 概要

5条の溝状遺構を検出している。

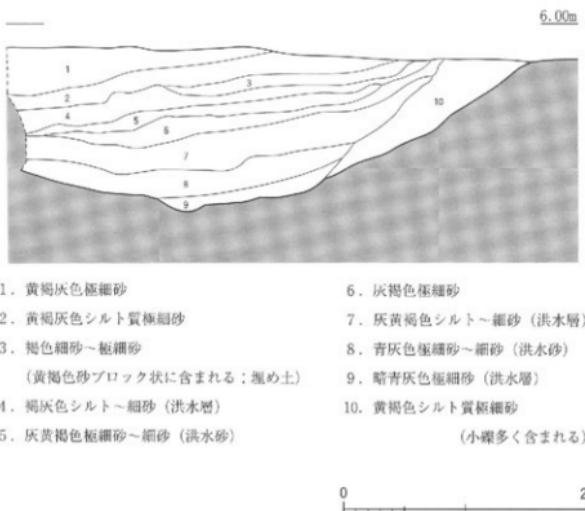
(2) 溝

SD11

検出状況 調査区南部で検出した(第42図)。東側肩部を検出したにとどまり、西側肩部は検出できなかった。北側についても、上面で検出した遺構の影響等から、確認することはできなかつた。

形状・規模 9.20m検出した。横断面は深い皿形をなすものと考えられ、検出面において幅4.32m残存し、最深部における検出面からの深さは1.28mを測る。底部のレベルは、検出した範囲では4.50mとほぼ一定している。

埋没状況 10層からなる(第43図)。層相から判断して、いずれの層も洪水に起因するものと考えられる。



第43図 SD11

出土遺物

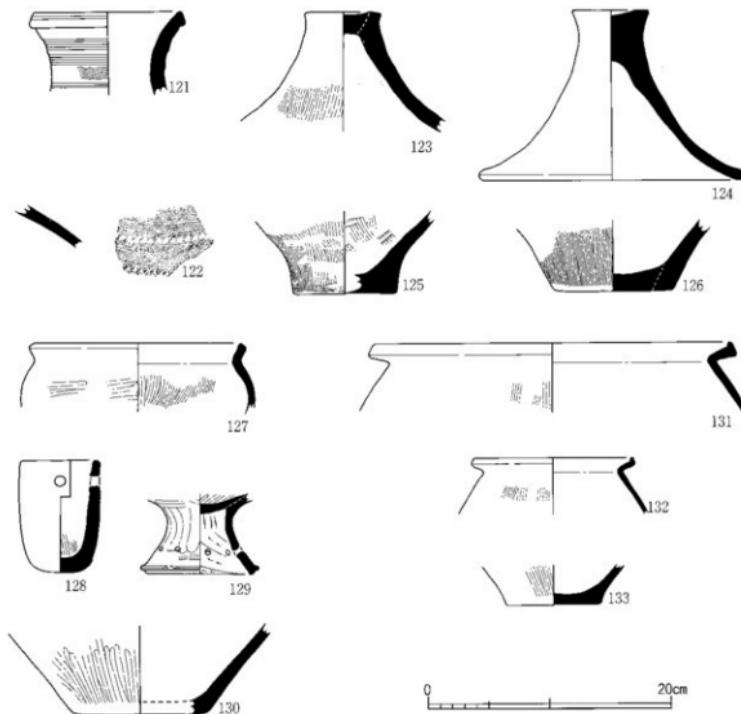
弥生時代前期末と中期の土器が出土している(第44図)。

前期末

壺・蓋・底部が出土している。

壺

口縁部片(121)と体部片(122)が出土している。121は、広口壺の口頭部で、外面には、上から櫛描直線文2単位、櫛描波状文1単位、櫛描直線文1単位が施されている。いずれ第44図の櫛描文とも5条を1単位としている。また、口縁端部には2条からなる半截竹管



第44図 SD11出土土器

文が施されている。他は、ナデ調整により仕上げられている。122は、広口壺の肩部と考えられる。外面に6条からなる横描直線文が2帯施され、それぞれの横描直線文の下に三角の連続刺突文が1列ずつ施されている。

蓋 2個体（123・124）図化した。2個体とも、同タイプに分類できるものである。123外縁はハケ調整後ナデ調整、内面は指ナデ調整により、仕上げられている。124は、内外面とも指オサエとナデ調整により仕上げられている。口縁部内外面には煤の付着が認められる。

底部 2個体（125・126）図化した。器種の特定は困難であるが、胎土の特徴から、当該期の土器と判断したものである。いずれも、外面はハケ調整により仕上げられている。内面は、125がハケ調整、126がナデ調整により仕上げられている。

中期 壺・壺・脚部・たこ壺・底部が出土している。

壺 短頸壺（127）が出土している。127は、鉢に分類される可能性も考えられるが、内面のハケ調整・外面のヘラミガキにより、短頸壺に分類した。口縁部は、内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

甕 4個体（130～133）図化した。法量的には異なるが、同タイプに分類されるものである。

130は、内面のヘラ削り調整から壺と判断した。外面はヘラミガキ、内面は弱いヘラ削りにより仕上げられている。133についても、内面のヘラナダ調整から、壺と判断した。口縁部片は、磨滅が著しいが、体部外面はハケ調整、内面はナダ調整、口縁部内外面は横ナダ調整により仕上げられている。

たこ壺 128の1個体を図化した。ほぼ完存するもので、口縁部下には径8mmの縦穴が焼成前に穿たれている。内面底部付近には、ハケ目が認められる。

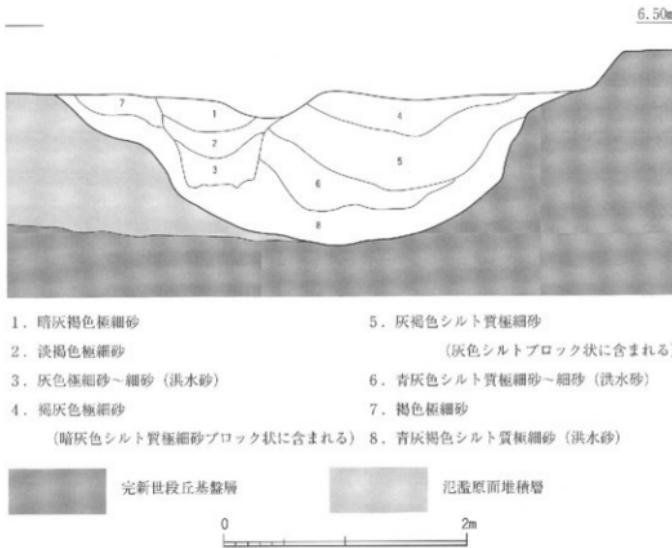
脚 部 129の1個体を図化した。外面は縱方向のヘラミガキ、内面下半はヘラ削り（右→左）により仕上げられている。また、径4mm大の円孔が、焼成前には等間隔に穿たれている。5個残存し、その残存状況から、当初は9箇所に穿たれていたものと考えられる。また、体部内外面も、ヘラ磨きにより仕上げられている。

時 期 出土土器から判断して、弥生時代前期末から中期にかけて埋没したものと考えられる。

SD12

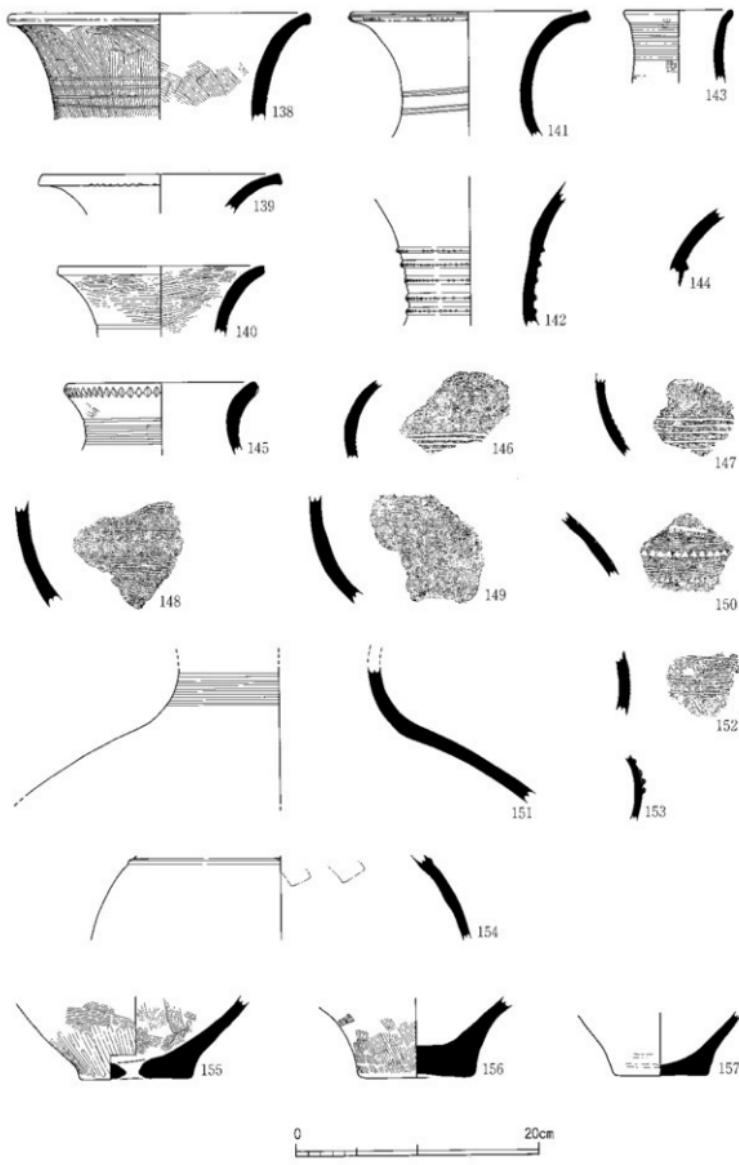
検出状況 調査区南部で検出した（第42図）。南北方向にはほぼ直線的にのびる溝であるが、北側の一部は上面で検出したSD08により途切れている。南側は、調査区外までのびている。SD11の東側に位置し、ほぼ平行する。なお、東側肩部は完新世段丘崖と一致する。

形状・規模 20.00m検出した。横断面は緩やかな逆台形をなし、検出面における幅4.30mを測り、最深部における検出面からの深さは1.27mを測る。底部のレベルは、検出した範囲では、4.67mとほぼ一定している。

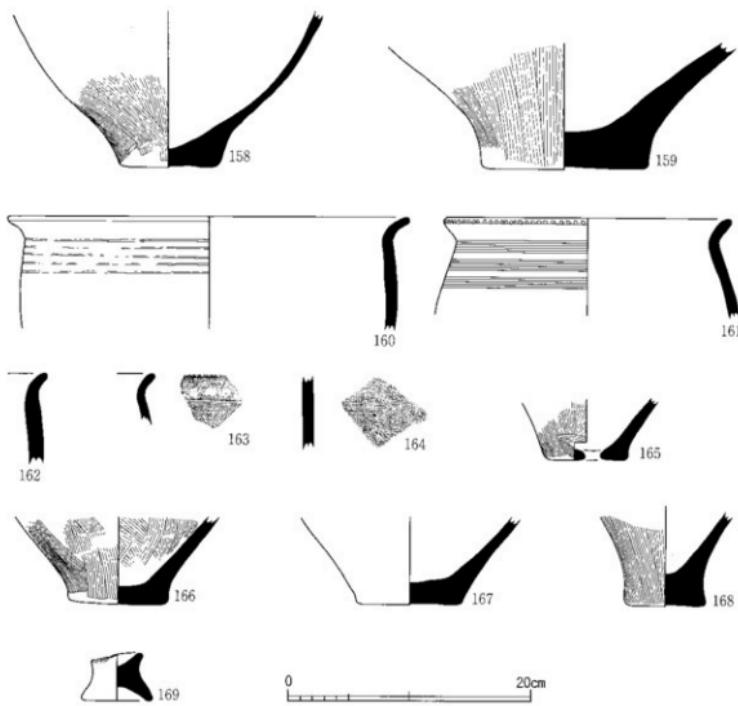


第45図 SD12

埋没状況	8層からなる（第45図）。ほぼ全体が洪水による埋没後、部分的に再掘削が行われている。これが第3層下面のラインである。再掘削後も、最終的には洪水により埋没している。
出土遺物	土器と石器が出土している。土器は、壺・甕・ミニチュアが出土している。
壺	口縁部を中心に残存する個体、頭部を中心に残存する個体、体部上半を中心に残存する個体、底部を中心に残存する個体、からなる。（第46図・第47図）
口縁部	138～141・143・145の6個体を図化した。143以外は、広口壺に分類されるものである。 138は、外面をハケ調整後、頭部付近に4条のヘラ描沈線が施されている。また、口縁端部にも1条のヘラ描沈線が施されている。139は、内面がナデ調整により仕上げられ、口縁端部下端にはキザミ目が施されている。140は、外面をハケ調整後、外面がヘラミガキにより仕上げられている。頭部付近には1条のヘラ描沈線が施されている。141は、内外面とも磨滅のため調整は観察できない。頭部に2条を単位とするヘラ描沈線が2単位、口縁端部に3条からなる櫛描直線文が、口縁端部下端にキザミ目が、それぞれ施されている。143は、直口壺に近い形態をなすものである。外面には、縦方向のハケ調整後、5条を単位とする櫛描直線文が連続して3単位、その下側にやや間隔をあけて2条残存する櫛描直線文が1単位認められる。連続する櫛描直線文は、帯状沈線に近い特徴を有するものである。145は、外面にわずかにハケ目が認められる以外は、調整は観察できない。頭部には、2条の深いヘラ描沈線が施され、各沈線の下側には3条からなる帯状沈線に近いヘラ描沈線が施されている。
頭部	142・144・146～149の6個体を図化した。 142は、断面三角形を呈する5条の突帯が貼り付けられ、その頂部にはキザミ目が施されている。内外面とも磨滅が著しく、調整は観察できない。144は、外面に断面三角形を呈する突帯が1条貼り付けられている。また、その下側には3条のヘラ描沈線が施されている。内外面ともナデ調整により仕上げられている。146は4条の、147は5条のヘラ描沈線が、外面に認められる。いずれも、内外面ともナデ調整により仕上げられている。148の外面には、上から、3条残存する櫛描直線文、6条からなる櫛描波状文・櫛描直線文・櫛描波状文・櫛描直線文・櫛描直線文・櫛描波状文、3条残存する櫛描直線文が施されている。内面は、ナデ調整により仕上げられている。149の外面には、上から、1条残存する櫛描直線文・6条からなる櫛描直線文・同櫛描直線文が施されている。以上の施文は、ハケ調整→ナデ調整の後施されている。また、内面はナデ調整により仕上げられている。
体部	150～154の5個体を図化した。 150は、外面に、櫛描直線文と三角刺突文のセットが3セット認められる。櫛描直線文は、いずれも6条からなる。内外面ともナデ調整により仕上げられている。151は、頭部から肩部にかけて残存する個体で、頭部に帯状沈線が3単位認められる。下側2単位は5条からなる。上側は2条しか残存しないが、当初は5条であったものと考えられる。内外面ともナデ調整により仕上げられている。152は、体部中位を中心に残存する小片である。上から、2単位の平行する半截竹管文・半截竹管による山形文・平行する3単位の半截竹管文・半截竹管による山形文が施されている。内面はナデ調整により仕上げられ、外面はヘラミガキの痕跡が認められる。153も、体部中位付近の小片である。外面に、断面三角



第46図 SD12出土土器(1)



第47図 SD12出土土器（2）

形をなす突帯が4条貼り付けられている。内外面ともナデ調整により仕上げられている。

154は、肩部を中心に残存する個体である。1条の突帯が認められるが、貼り付けかどうか、観察では明らかにはできなかった。

底 部 155～159の5個体を図化した。壺の底部との判別が難しいものも認められるが、形態的特徴から、壺の底部と判断したものである。調整が観察できるものは、外面がハケ調整、内面がナデ調整により仕上げられている。このなかで、155は、外面がハケ調整後ヘラミガキ、内面がハケ調整により仕上げられている。また、底部中央には、径1cmの穿孔が焼成後に施されている。

この他、図化できなかったが、流水文が描かれた小片も出土している。

壺 口縁部片・体部片・底部からなる。（第47図）

口縁部 160～163の4個体を図化した。いずれも如意形口縁を呈するもので、いわゆる瀬戸内型壺は出土していない。160の口縁部下外面には5条のヘラ描沈線が認められる。内外面とも、磨滅のため調整は観察できない。161の口縁部下外面には、3単位の横描直線文が施されている。また、口縁端部にはキザミ目が施されている。口縁部は内外面とも横ナデ調

整、体部内面はナデ調整により仕上げられている。163は、口縁部下外面に、7条からなる櫛描直線文と4条残存する櫛描直線文が施されている。口縁部は内外面とも横ナデ調整、体部内面はナデ調整により仕上げられている。

体 部 164の1個体を図化した。口縁部下の小片で、外面に6条からなる櫛描直線文が2帯認められる。その上側には櫛描波状文の一部が残存する。半截竹管文の可能性も考えられる。

底 部 165～168の4個体を図化した。磨滅が著しい167を除いては、外面はハケ調整により仕上げられている。また、内面については、166のハケ調整を除いては、ナデ調整により仕上げられている。この他、165の底部中央には、径1.3cmの穿孔が焼成後に行われている。

ミニチュア土器 169の1個体のみである。脚状を呈し、全体を指オサエにより仕上げられている。

石 器 石包丁1点(S 2)が出土している(第48図)。S 2は直線刃半月形の磨製石包丁で、頁岩あるいは硬度のある凝灰岩質と思われる。全面が丁寧に磨き上げられ研磨痕を残すが、背縁部と前面(右面)側の刃縁付近などは研磨痕が消失している。前面では斜めの帶状に消失部が認められる。刃縁は若干丸みをもつが鋭利さは保たれている。したがって、刃部を研磨しながら、よく使い込まれた石器ということができる。

時 期 出土土器から判断して、弥生時代前期末には埋没したものと考えられる。

S D 1 3

検出状況 調査区北部で検出した(第42図)。大半が上面で検出した遺構に切られており、西側肩部をわずかに検出したのみである。SD 11東側肩部およびSD 12の北側に位置し、方向性も、南北方向とほぼ一致する。このため、これらの遺構の延長の可能性も考えられるが、その確認がもてないため、別の遺構として報告する。

形状・規模 5.85m検出した。横断面は緩やかなU字形をなし、最深部における検出面からの深さは、調査区北側断面(第7図)において1.95mを測る。

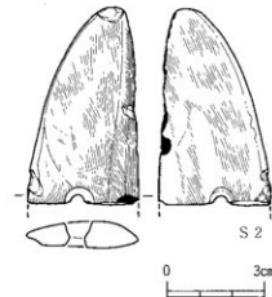
埋没状況 2層からなる。上から、灰色シルト質粗砂・灰色シルト質極細砂からなり、洪水に起因する層である。

出土遺物 壺(177)と脚(178)が出土している(第49図)。

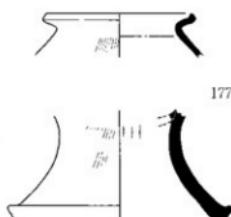
壺は、播磨において一般的なものであるが、胎土の特徴から生駒西麓産と判断される。

脚は、高杯に伴うもののかどうかは判断できない。外面をハケ調整、内面を板ナデ調整後、脚端部が横ナデ調整により仕上げられている。

時 期 出土土器から判断して、弥生時代中期と考えられる。



第48図 SD 12出土土器



第49図 SD 13出土土器

SD 14

検出状況

調査区南部で検出した（第42図）。北側を上面で検出した遺構に、西側をSD11に、東側をSD12に、それぞれ切られており、肩部すら検出できなかつた。埋土中から土器が出土することから、溝状遺構として報告する。ただし、当遺構については、完新世段丘が埋没する過程における堆積層の一部の可能性も考えられることを、断っておきたい。

形状・規模

14.40m検出した。肩部を検出していなため規模等は明らかにできないが、最深部における検出面からの深さは、2.15mを測る。

埋没状況

8層からなる（第50図）。第8層を除いては、洪水に起因する層である。その層相から判断して、短期間に堆積したものと考えられる。

出土物

弥生時代前期の壺と甕が出土しているが、とりわけ壺が量的に多く出土している（第51図・第52図）。

壺

口縁部を中心に残存する個体・頸部を中心に残存する個体・体部を中心に残存する個体・底部を中心に残存する個体からなる。

口縁部

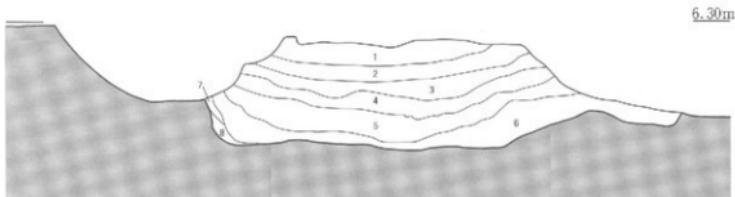
179～182・184～187の8個体を図化した。

179は口縁部から肩部にかけて残存する。口縁部から肩部にかけての外面をハケ調整後、頸部に6条のヘラ描沈線が施されている。内面は、肩部がナデ調整、口縁部が板ナデ調整により、仕上げられている。また、口縁端部には1条のヘラ描沈線が描かれ、その後キザミ目が施されている。

180も口縁部から頸部にかけて残存する。外面はハケ調整、口縁部内面はヘラミガキ、体部内面はナデ調整と指オサエにより仕上げられている。

181は、外面をハケ調整により仕上げた後、頸部に4条のヘラ描沈線が施されている。また、口縁端部にはキザミ目が施されている。

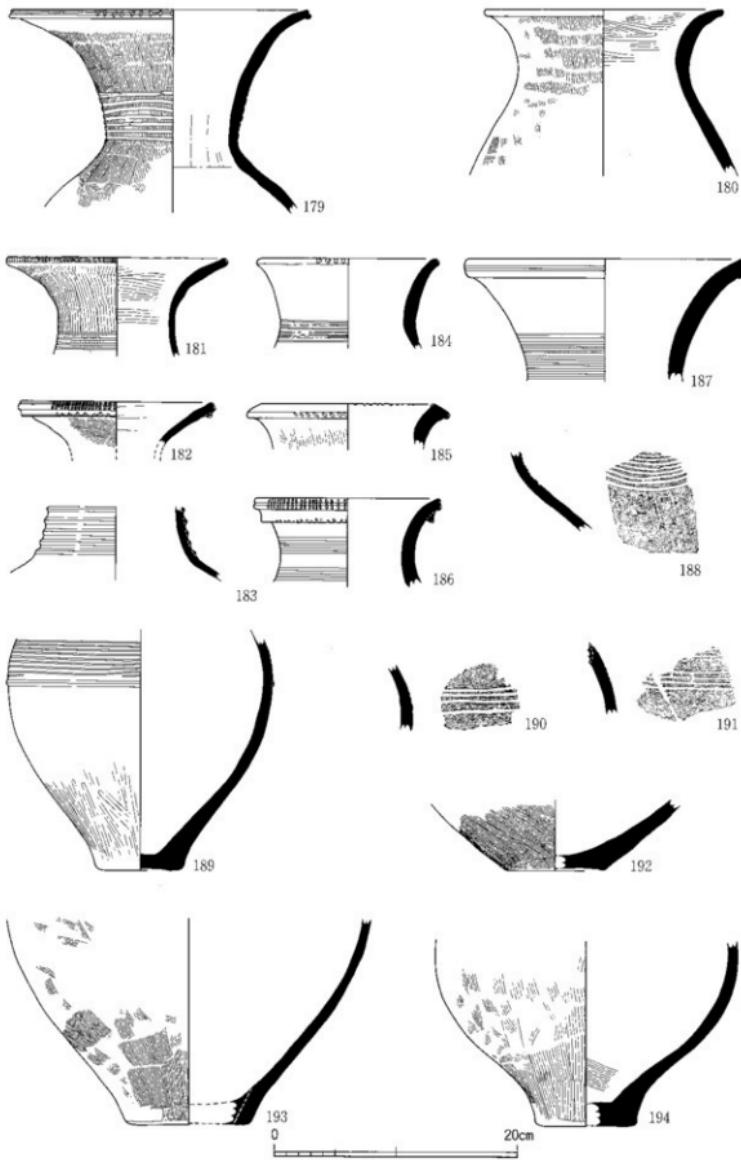
182は、外面がハケ調整、内面がナデ調整により仕上げられている。口縁端部下外面に突帯が貼り付けられるとともに、その頂部および口縁端部にキザミ目が施されている。184は、頸部外面に7条のヘラ描沈線が、口縁端部にキザミ目が施されている。内外面とも、



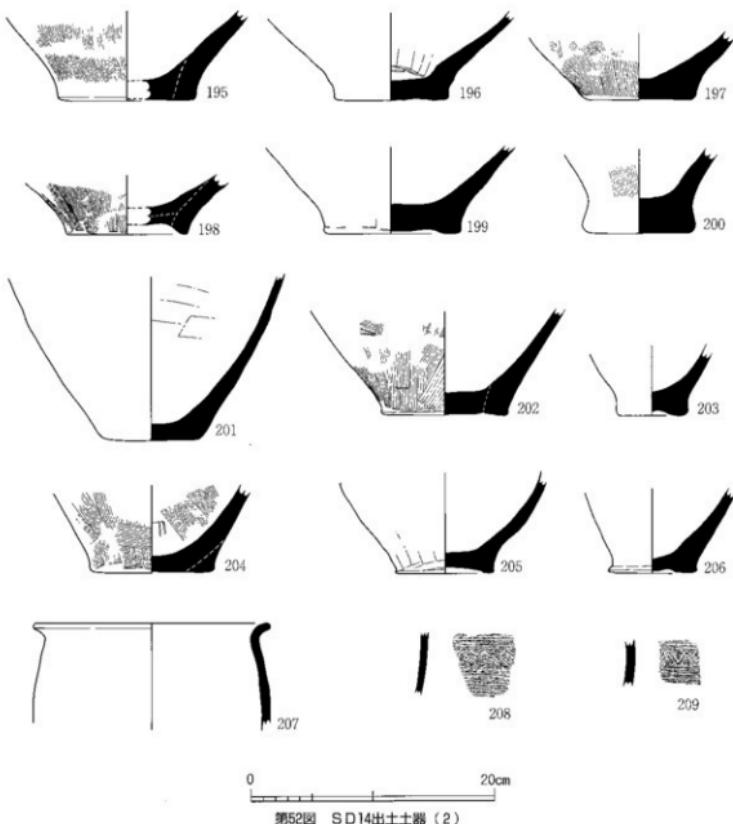
- | | | |
|-------------------|--------------------|---------------------|
| 1. 淡灰褐色細砂～中砂(洪流水) | 4. 青灰色シルト～細砂(洪流水) | 7. 暗灰色シルト(土壤層) |
| 2. 青灰色極細砂～細砂(洪流水) | 5. 青灰色シルト～細砂(洪流水) | 8. 青灰色細砂(段丘基盤層の崩落層) |
| 3. 青灰色極細砂～中砂(洪流水) | 6. 暗灰色シルト～極細砂(洪流水) | |



第50図 SD14



第51図 SD14出土土器(1)



ナデ調整により仕上げられている。185は、口縁端部の内外両頂部にキザミ目が施されている。外面はハケ調整、内面は横ナデ調整により仕上げられている。186は、頭部に7条と6条からなる櫛描直線文が描かれている。また、口縁端部下外間に突帯が貼り付けられ、その頂部にキザミ目が施されている。口縁端部は、1条のヘラ描沈線が描かれた後、キザミ目が施されている。内面はナデ調整により仕上げられている。187は、頭部外面に9条と10条からなる帯状沈線が、口縁端部に3条の帯状沈線が施されている。これらの帯状沈線は、掘り込みが浅く、櫛描文に近い状況を示している。

頭 部 183と188の2個体を図化した。183は、外面に5条の突帯が貼り付けられ、横ナデ調整により仕上げられている。内面は剥離が著しく、調整は観察できない。188は、9条のヘラ描沈線が施されている。外面はハケ調整、内面はナデ調整により仕上げられている。

体 部 189～191の3個体を図化した。

189は、底部まで残存する個体である。体部中位に8条のヘラ描沈線が施されている。

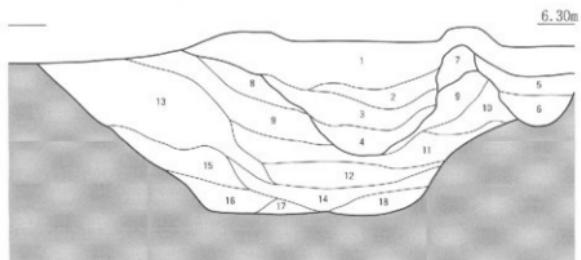
また、これらの沈線の下側に、突帯が1条貼り付けられている。体部外面下半はヘラミガキにより仕上げられ、他はヘラナデもしくはナデ調整により仕上げられている。

190は体部中位付近の小片である。4条のヘラ描沈線が施されている。外面はハケ調整、内面はヘラナデ調整により仕上げられている。191も、190と同様の小片である。外面に2条と4条のヘラ描沈線が施されている。外面は、ハケ調整後ヘラミガキ、内面はナデ調整により仕上げられている。

底 部 192~206の15個体を図化した。これらの中には、変に分類すべきものも含まれていると考えられる。多くの外面は、ハケ調整により仕上げられている。内面は、ナデもしくは板ナデ調整により仕上げられている。一部、ハケ調整によるものも認められる。

茎 量的にはわずかで、207~209の3個体を図化した。口縁部は、図化できなかった個体を含めて、全て如意形を呈する。207は、口縁部が内外面とも横ナデ調整、体部が内外面ともナデ調整により仕上げられている。208は体部の小片である。外面には、上から5条のヘラ描沈線、半截竹管による山形文が2段、4条からなる帯状沈線3単位が施されている。209も体部の小片である。上から、半截竹管文、半截竹管による山形文、半截竹管文3単位が施されている。内面はナデ調整により仕上げられている。

時 期 出土土器から判断して、弥生時代前期に堆積したものと考えられる。



- | | |
|----------------------|--------------------------|
| 1. 黄褐色極細砂 | 10. 明灰黄色シルト |
| 2. 黄褐色シルト質極細砂 | 11. 明黄灰色シルト～細砂 |
| 3. 暗灰色中砂～細砂 | 12. 灰色シルト混じり明灰黄色極細砂～細砂 |
| 4. 灰色シルト混じり灰色極細砂～細砂 | 13. 明黄灰色シルト質極細砂 |
| 5. 灰黄色シルト | 14. 灰色シルト～細砂 |
| 6. 灰色シルト | 15. 黄褐色シルト混じり暗灰褐色シルト質極細砂 |
| 7. 淡褐色シルト質極細砂（盛上） | 16. 暗黄褐色極細砂 |
| 8. 明黄色砂混じり茶褐色シルト質極細砂 | 17. 明黄灰色シルト質極細砂 |
| 9. 暗灰褐色シルト | 18. 明黄灰色シルト質極細砂 |



第53図 SD15

SD15

検出状況 検査区西部で検出した（第42図）。北東—南西方向にはほぼ直線的にのびる溝で、両端とも調査区外まで伸びている。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模 17.05m検出した。両側肩部を検出できたのは西側に限られ、大半は東側肩部のみの検出である。横断面は逆台形をなし、検出面における幅は3.85mを測る。最深部における検出面からの深さは、1.42mを測る。

埋没状況 18層からなる（第53図）。第8層～第18層（下層）と、第1層～第6層（上層：第54図）とに大きく分けることが可能である。下層が主に洪水に起因して堆積後、再掘削を受けている。これが、上層下面のラインである。また、第7層については明らかに盛土であることから、第4層及び第6層が下層となる平行する2条の溝が、意識して掘削されたものと考えられる。用水施設の可能性が考えられる。なお、上層についても自然堆積により埋没している。

なお、後述する土器の出土状況から、上層と下層とでは明らかに時期が異なる。



第54図 SD15上層検出状況

出土物 上層から弥生時代後期の土器が、下層から中期の土器が出土している（第55図）。

上層 壺とたこ壺が出土している。

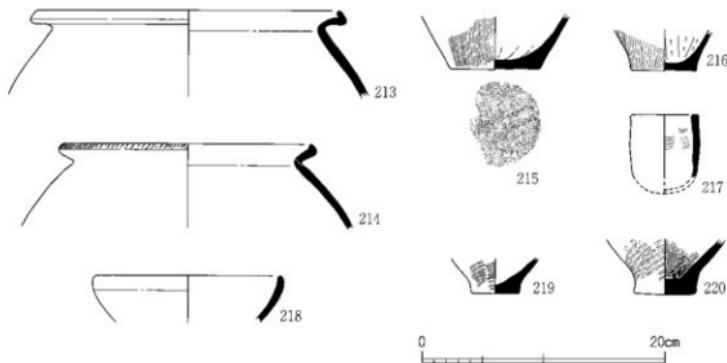
壺 213～216の4個体を図化した。完存するものはないが、ほぼ同タイプに分類されるものである。法量的に、大型（213・215）と小型（214・216）に分類できる。なお、214の口縁端部にはキザミ目が施されている。また、底部内面には縱方向のヘラ削りが施されている。215の底部外面は、ハケ調整により仕上げられている。

たこ壺 217の1個体を図化した。全体的に指オサエとナデ調整により仕上げられているが、内面の一部にハケ調整の痕跡が認められる。また、口縁部は弱い横ナデ調整により仕上げられている。

下層 壺と高坏が出土している。

高坏 218の1個体を図化した。楕形を呈する高坏の坏部である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部は指オサエにより仕上げられている。

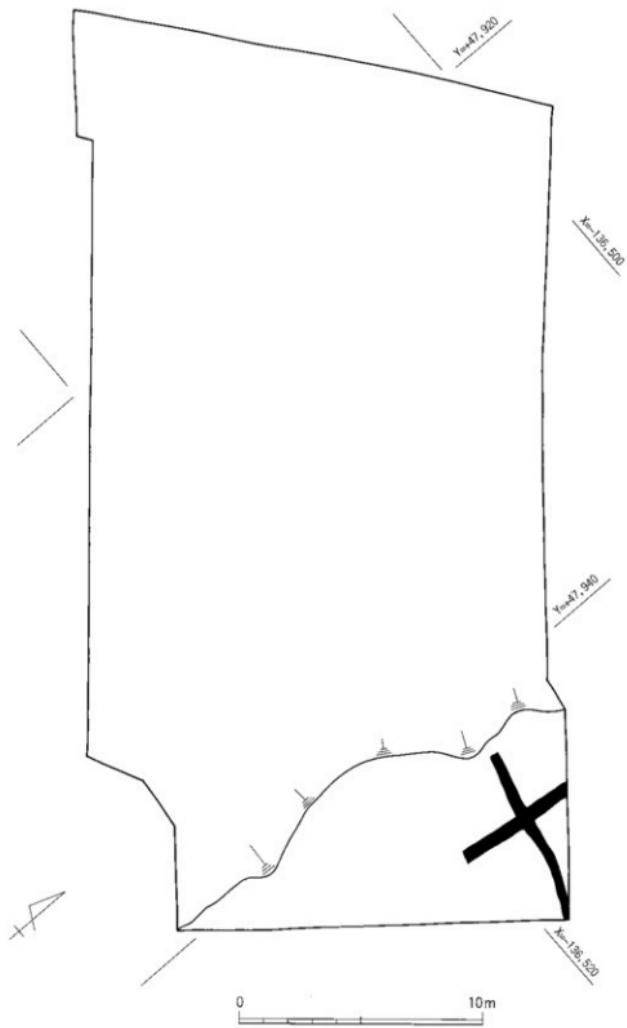
壺 219と220の2個体を図化した。いずれもいわゆるV様式系壺に分類されるもので、外面



第55図 SD15出土土器

は叩き整形により仕上げられている。内面は、219が板ナデ調整、220がハケ調整により仕上げられている。

時 期 出土土器から判断して、下層は弥生時代中期に、上層は弥生時代後期に、それぞれ埋没したものと考えられる。



第56図 第3面

第5節 第3面の調査

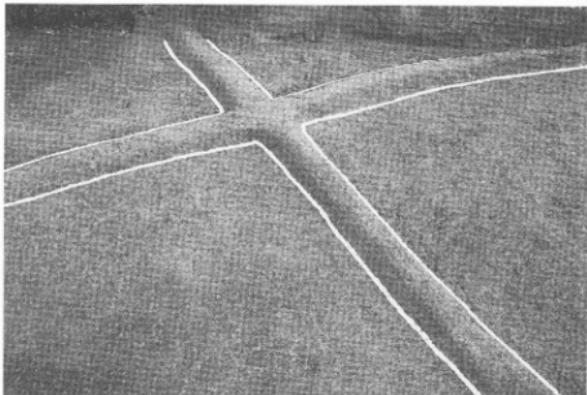
検出状況

調査区東隅で検出した。検出できたのは4区画分である（第57図）ただし、いずれの区画も全体を検出できたものはない。畦畔は、小畦畔に分類されるもので、その特徴は「美乃利Ⅰ」と同じである。底部における幅40cm、水田面との比高11~13cmを測る。水田面の標高は、北東区画で6.47m、北西区画で6.49m、南東区画で6.46m、南西区画で6.45mと、4面とも大きな差は認められない。

検出した層序・標高から判断して、『美乃利Ⅰ』V区第4面検出水田に連続するものと考えられる。

時期

『美乃利Ⅰ』の報告から、弥生時代前期に位置付けられる。



第57図 水田跡検出状況

第3章 まとめ

第1節 遺物

はじめに

今回の調査では、弥生時代前期から鎌倉時代にかけての土器が出土している。具体的には、弥生時代・古墳時代・飛鳥時代・奈良時代・平安時代・鎌倉時代の土器が出土している。当節では、時代ごとに土器の特徴を検討していくことにする。

ところで、多くの時期の土器については、「美乃利Ⅰ」において、すでに若干の検討がおこなわれている。そこで、当節では、「美乃利Ⅰ」での検討結果と対照させる形でまとめていくことにする。前報告で未検討の土器については、その都度検討していくことにする。

1. 弥生時代

前期・中期・後期の各時期の土器が出土している。

前期

壺・甕・蓋・ミニチュア土器が出土している。

壺

「美乃利Ⅰ」での分類、広口壺A・広口壺B・広口壺C・直口壺が出土している。上記の分類の細分型式に該当しないものとして、143・180・186を指摘することができる。

まず、143については、直口壺の範疇で理解すべきものと考えられる。口径が小さいため、別型式とすべきものと考えられる。180については、広口壺Aの範疇で理解できるものである。形態的にはA 2に近いが、体部への施文が確認できないため、断定は困難である。186は広口壺Cに分類されるものである。施文方法において、「美乃利Ⅰ」では認められなかつたものである。新たな細分型式を設定する必要がある。いずれにしても、「美乃利Ⅰ」同様、前期末に位置付けられるものと考えられる。

甕

「美乃利Ⅰ」では、逆L字形口縁甕と如意形口縁甕の2タイプが認められた。しかし、今回の報告分では、前者のタイプが認められない点が、一つの特徴として指摘できる。また、出土した如意形口縁甕は、AとBに分類されるもので、「美乃利Ⅰ」で認められないタイプのものは出土していない。

蓋

いずれも壺蓋で、「美乃利Ⅰ」で分類したA・Bと同タイプのものが出土している。

ミニチュア

脚状を呈するもので、「美乃利Ⅰ」と類似する。

中期

壺・甕・高坏・器台・複合土器が出土している。一方、今回の調査では鉢の出土は認められなかった。他の形式については、いずれも「美乃利Ⅰ」の分類で理解できるものである。また、時期的にも差は認められない。

後期

壺・高坏・鉢が出土している。壺は出土していない。壺と高坏については、「美乃利Ⅰ」の分類で理解できるものである。鉢(91)については、同タイプのものは認められず、新たな型式として加えるべきものである。ただし、時期的には、「美乃利Ⅰ」と同時期と考えられる。

2. 古墳時代

中期の土器が出土している。当該期の土器については、『美乃利Ⅰ』では出土が認められなかったものである。ただし、今回の調査においてもその量は多くはない。器種としては、土師器と須恵器が出土している。

土師器 角杯については、第1表のとおり、当遺跡例も含めて、全国で約16例出土している。⁽¹⁾ 年代的にも、6世紀前半の例が多く、当遺跡例ともほぼ合致するものである。しかし、当遺跡出土例は、先端まで中空ではなく、形態的にも角状をなさない。このような例は、他に認められない。また、当遺跡と同じ土師質のものは、同じ兵庫県の柿坪遺跡例を含めてわずか数例に限られる。

このように、当遺跡出土の角杯は、極めて特異な例といえるのではなかろうか。他遺跡出土例は、角杯の本来の形態を保持しているのに対して、本遺跡例は、その機能のみ保持されているものと考えられる。

須恵器 杯蓋と壺が出土している。杯蓋については、T K23型式に比定できるものである。また、壺についても、ほぼ同時期のものを見て、矛盾はない。

小結 以上、上記の遺物は古墳時代中期末から後期初頭に位置付けられるものと考えられる。

第1表 出土角杯一覧

遺跡名	所在地	出土遺構	種別	時期
美乃利遺跡	兵庫県加古川市大野	溝	土師器	6世紀初頭
柿坪遺跡	兵庫県朝来市柿坪	竪穴住居跡	土師器	古墳時代
龜田遺跡	兵庫県揖保郡太子町	包含層	須恵器	古墳時代
西岩田遺跡	大阪府東大阪市西岩田	包含層	須恵器	6世紀前半
大耳尾2号墳	京都府京丹後市	木棺外	須恵器	6世紀前半
小槻大社古墳群(10号墳)	滋賀県栗東市	周溝	須恵器	5世紀後半
赤根川金ヶ崎塚跡	明石市魚住町金ヶ崎字大池下	窪跡	須恵器	6世紀初頭
獅子塚古墳	福井県三方郡美浜町郷市	横穴式石室	須恵器	6世紀初頭
興道寺塚跡	福井県三方郡美浜町	窪跡	須恵器	6世紀前半
中村塚遺跡	石川県羽咋郡	溝	須恵器	6世紀後半
天神山遺跡	石川県加賀市	竪穴住居跡	須恵器	6世紀前半
上久津呂中屋遺跡	石川県水見市上久津呂中屋地内	包含層	須恵器	6世紀~7世紀頃
明地遺跡	山口県熊毛郡田布施町	竪穴住居跡	土師器	5世紀前半~中葉
福徳治裏山古墳群1号墳	岐阜県関市	横穴住居跡	須恵器	6世紀前半
切畑遺跡	佐賀県神埼郡神埼町	溝(S D140)	土師器	6世紀前半
隈西小田1号墳	福岡県	墳丘内	須恵器	6世紀前半

3. 飛鳥時代

須恵器の杯身と壺が出土している。杯身に関しては、『美乃利Ⅰ』においても若干出土が認められ、当該期に位置付けられている。

壺に関しては、今回初めて報告する器種である。口縁部までは残存しないが、体部の規模が小さいことから、杯身とはほぼ同時期に位置付けられるものと考えられる。

4. 奈良時代

土師器と須恵器が出土している。

土師器 杯A・皿A・椀が出土している。これらの器種については、いずれも『美乃利Ⅰ』で報告されているものであり、年代的にも、同様の時期に位置付けられるものと考えられる。特に、105の皿Aについては、外面はb手法により、口縁部内面に一段の放射状暗文を施すもので、平城宮Ⅱ以降に比定される⁽²⁾。類例が大阪城跡74次調査に認められ、平城宮Ⅲに比定されている。

須恵器 杯A・杯B・皿A・皿B・杯B蓋が出土している。いずれも『美乃利Ⅰ』で報告されているものであり、年代的にも同様の時期に位置付けられるものと考えられる。

「郡」 このなかで注目すべきは、「郡」と墨書きされた杯Aである。「郡」は、律令期の行政単位を意味するものと考えられる。当時、美乃利遺跡の所在する一帯は、賀古郡に比定されている。賀古郡の郡衙については、野口庵寺北西の方格地割が候補の一つとなっている。美乃利遺跡とは、直線で約2km離れており、当遺跡はその説には該当しない。

なお、当遺跡においても、『美乃利Ⅰ』で報告したように、当該期の掘立柱建物跡が数棟検出されている。しかし、建物・柱穴の規模から判断して、直接郡衙と結びつけることは困難である。

以上から、この墨書き器から郡衙と直結させることは困難である。

5. 平安時代～鎌倉時代

当該期の遺物は多くはない。主に須恵器が出土している。椀を中心に出土しているが、『美乃利Ⅰ』で報告した内容で理解できるものである。

S D02から出土した土器が「中世Ⅱ」に該当する以外は、「中世Ⅰ」に該当するものと考えられる。

[註]

(1) 岩崎信志「田布施町・明地遺跡の角杯形土器について」『山口県史研究』第3号 1995

第1表は当該文献に、新出資料を追加したものである。

(2) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅷ』1976

(3) 松尾信裕『大阪城跡VI』2002

第2節 埋没過程

ステージI～IXの9段階からなる（第58図～第66図）。なお、これらのエレベーション図は、調査区主軸ライン付近における、検出遺構のレベルをもとに復元した模式図である。

ステージI（第58図）

- 検出面 第3面に対応する。土壤層Ⅲの上面にあたる。
 地形環境 繩文時代中期以降に形成された中州を中心に、晩期までに自然堤防が形成される⁽¹⁾。当ステージに対応する土壤層Ⅲの下層にも土壤層が認められる（第7図）ことから、数段階にわたって自然堤防が形成されてきたものと考えられる。また、当ステージで水田跡が検出されていることから、微視的には、自然堤防のなかでも微凹地に相当するものと考えられる。
 検出遺構 水田が開発される。今回の調査で検出できたのは、完新世段丘面にあたる箇所に限られるが、当初はより南西側でも開発されていたものと考えられる。
 時期 『美乃利I』の成果を参照すると、弥生時代前期に位置付けられる。

ステージII（第58図）

- 検出面 層位的には土壤層Ⅱの上面に、検出面としては第2面に対応する。
 地形環境 第3面を覆うように洪水砂が堆積し、自然堤防が前ステージより一層拡大する。
 検出遺構 平面的に検出できたのは、次ステージに形成される完新世段丘面上に限られる。この範囲においては、遺構は検出されなかった。
 時期 『美乃利I』の成果を参照すると、弥生時代前期に位置付けられる。

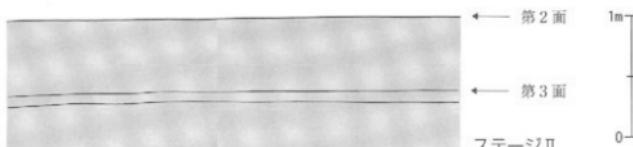
7.00m



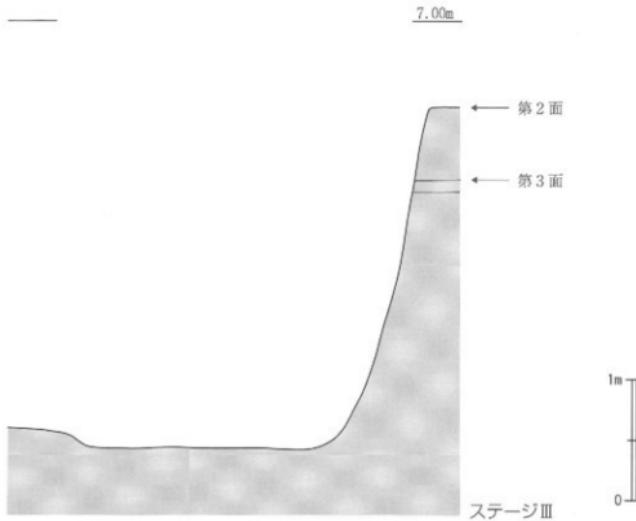
← 第3面

Stage I

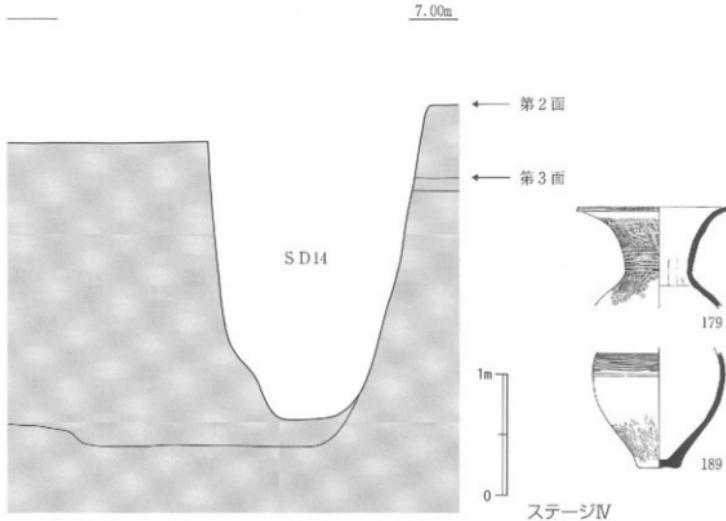
7.00m



第58図 埋没過程(1)



第59図 埋没過程（2）



第60図 埋没過程（3）

ステージⅢ（第59図）

地形環境 段丘化がおこり、調査区中央部に段丘崖が形成される。この結果、その東側が完新世段丘Ⅰ面に、西側がその氾濫原面となる。段丘面と氾濫原面との比高は2.80mに及ぶ。

時期 弥生時代前期末に位置付けられる。

ステージⅣ（第60図）

検出面 第2面に対応する。

地形環境 泛濫原面に洪水砂が堆積する。当ステージ以降、段丘面上では堆積は認められない。

検出遺構 SD14が掘削される。洪水砂の堆積は水平ではなく、段丘崖沿いはやや凹地となっていたものと考えられ、この凹地を利用してSD14が掘削されたものと考えられる。

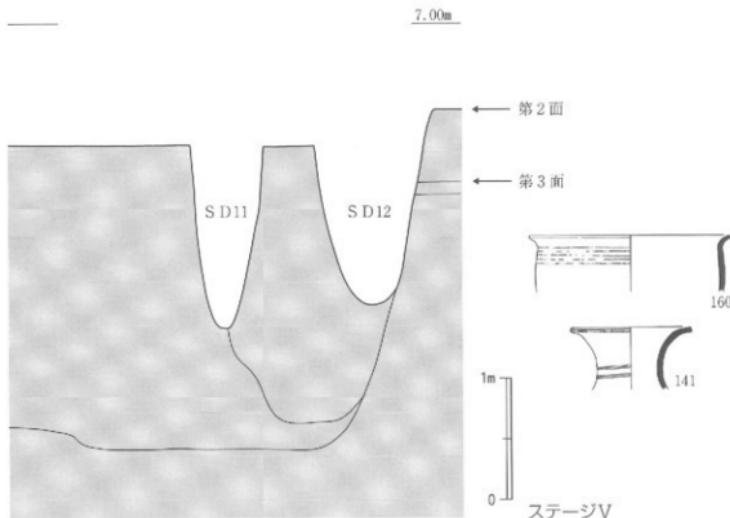
時期 弥生時代前期末に位置付けられる。

ステージⅤ（第61図）

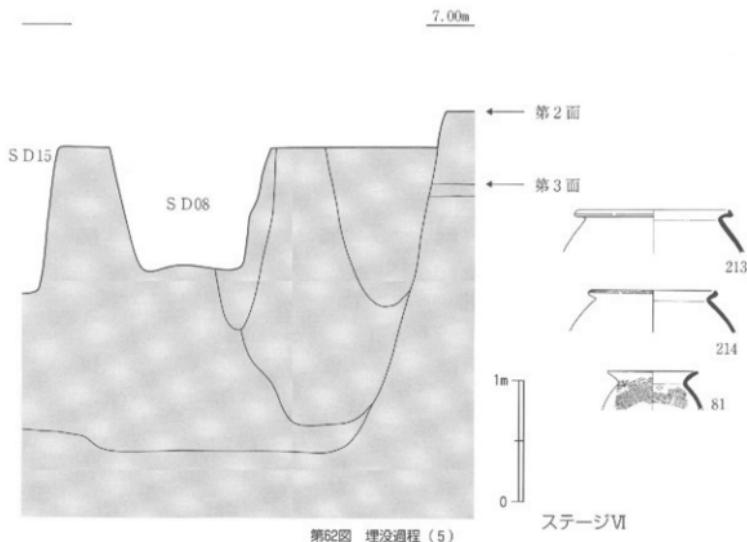
検出面 第2面に対応する。

地形環境 泛濫原面において、洪水砂が堆積する。このため、前ステージで検出されたSD14もほぼ埋没したものと考えられる。その層相（第50図）から判断して、一気に埋没したのではなく、幾度かの洪水により埋没している。

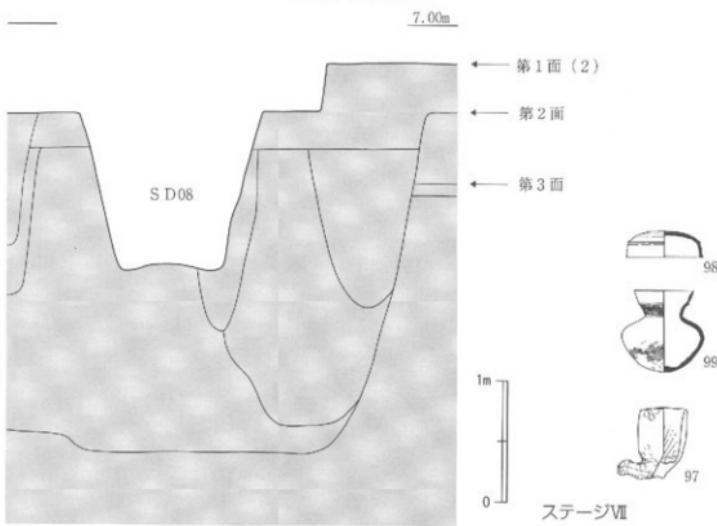
検出遺構 SD11とSD12が掘削される。前ステージでSD14が果たしていた機能を継続させるために掘削されたものと考えられる。このため、SD14と平面的にはほぼ一致し、方向も同じである。また、SD12の東側の肩は段丘崖と一致する。なお、SD11とSD12が全く



第61図 埋没過程（4）



第62図 埋没過程(5)



第63図 埋没過程(6)

同時期に機能していたのかについては、調査成果からは判断できない。ただし、出土遺物から判断して、SD 12のほうがより長く機能していたようである。

時期　弥生時代前期～中期に位置付けられる。

ステージVI（第62図）

- 検出面** 第2面に対応する。
- 地形環境** 沼澤原面において、洪水砂が堆積する。このため、前ステージで検出されたS D11とS D12は完全に埋没する。両溝とも、その層相（第43図・第45図）からみて、一気に埋没したのではなく、幾度かの洪水により埋没している。
- 検出遺構** S D08とS D15が対応する。
- 時期** 出土土器からみる限り、弥生時代中期には掘削され、後期に埋没する。なお、S D15は、出土土器及び層位から上層と下層とに大きく分けることができる。よって、上層としたものは、本来はS D08と同じ第1面（2）に伴うものであった可能性が高い。逆に、S D08は当ステージ段階にはすでに掘削され、第1面（2）まで存続したものと考えられる。

ステージVII（第63図）

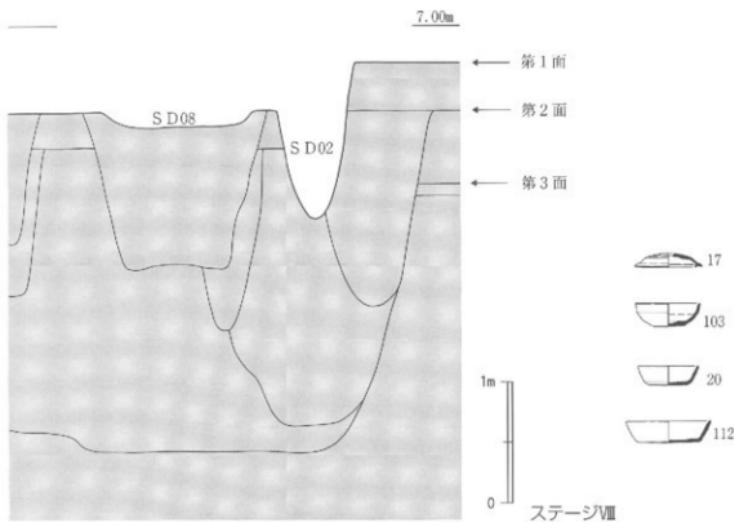
- 検出面** 第1面（2）に対応する。
- 地形環境** 沼澤原面において、洪水砂が堆積する。この結果、沼澤原面の大半が埋没する。
- 検出遺構** 沼澤原面ではS D08が、段丘面ではS D09が対応する。
- 時期** S D08は、前ステージよりさらに埋没する。当段階（第IVステージ：20ページ）が6世紀代に位置付けられることから、当該期に位置付けられる。

ステージVIII（第64図）

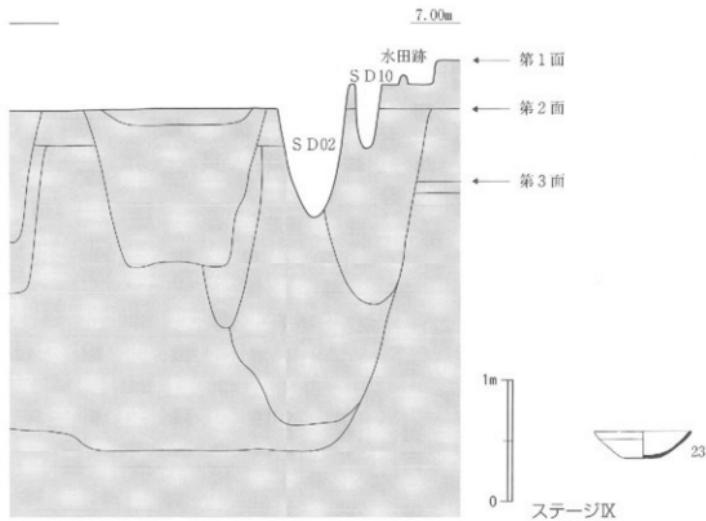
- 検出面** 第1面（2）に対応する。
- 地形環境** 沼澤原面において、洪水砂が堆積し、沼澤原面の大半が埋没する。
- 検出遺構** 沼澤原面ではS D08が、沼澤原との境ではS D02が対応する。
- 時期** S D08は、当ステージで完全に埋没する。この段階の出土土器から判断して、7世紀～8世紀に位置付けられる。また、S D02については、検出したのは次の第1面であるが、出土土器から、7世紀まで遡ることができる。

ステージIX（第65図）

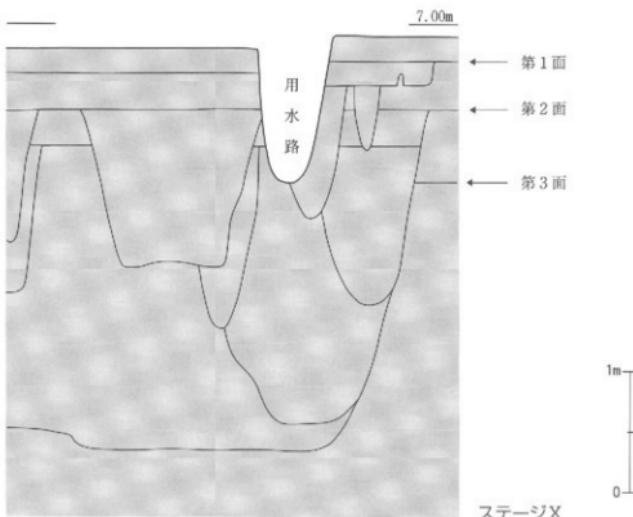
- 検出面** 第1面に対応する。
- 地形環境** 前ステージと比較して、大きな変化は認められない。
- 検出遺構** 沼澤原面ではS D01・S D02・S D04～S D07が、段丘面上ではS D03・S D10と水田跡が対応する。
- 時期** 多くの遺構は、平安時代後期から鎌倉時代初頭に位置付けられる。一方、水田跡に関しては、近世以降に位置付けられる。



第64図 埋没過程（7）



第65図 埋没過程（8）



第66図 埋没過程(9)

ステージX（第66図）

- 検出面** 現地表面に対応する。
- 地形環境** 沼澤原面に洪水砂が堆積し、調査前の地表面とほぼ同じになる。ただし、この段階においても完全に平坦化するのではなく、沼澤原面と段丘面とは約40cmの段差が存在する。また、段丘面上においても、水田跡が人為的に埋められる。
- 検出遺構** SD02をやや西側へ平行移動させた形で、用水路が掘削されている。SD02を踏襲するものと考えられる。
- 時期** 近世以降、現代までである。

〔註〕

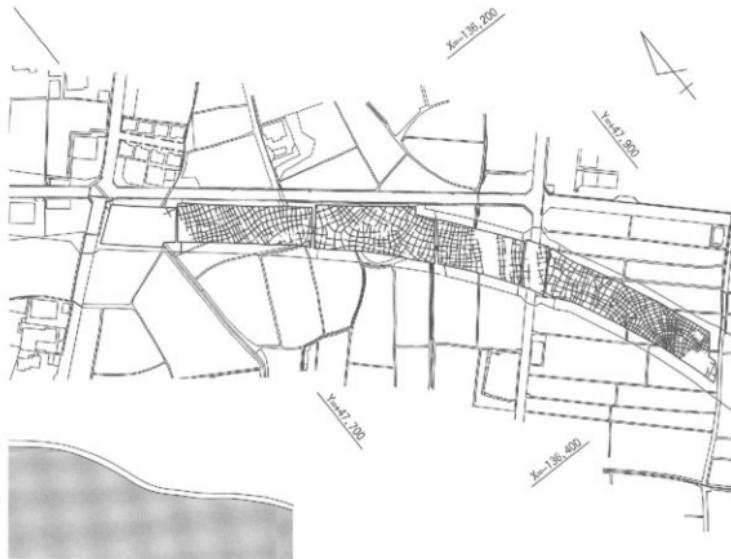
(1) 高橋 学「加古川下流域平野の地形環境分析」『美乃利遺跡——級河川別府川河川改良事業に伴う発掘調査報告書—』兵庫県教育委員会 1997

第3節 総括

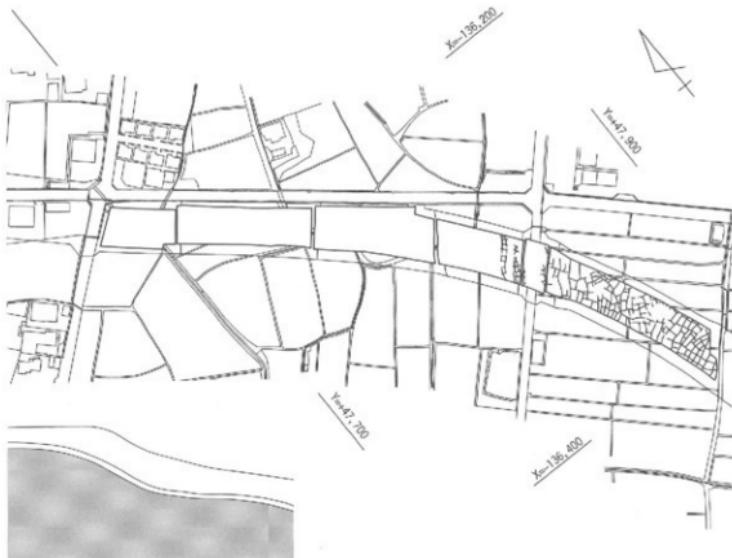
はじめに 『美乃利Ⅰ』において、土地利用の変遷を12期にわけてまとめている。本節では、上記の12期との対応を検討し、本報告のまとめとしたい。ただし、『美乃利Ⅰ』では検出されなかった時代の造構が、今回検出されていることから、これを踏まえて、新たな段階設定を行うこととする。また、ここで表記するステージとは、前節での検討結果を踏まえたものである。

第1期〔ステージI〕

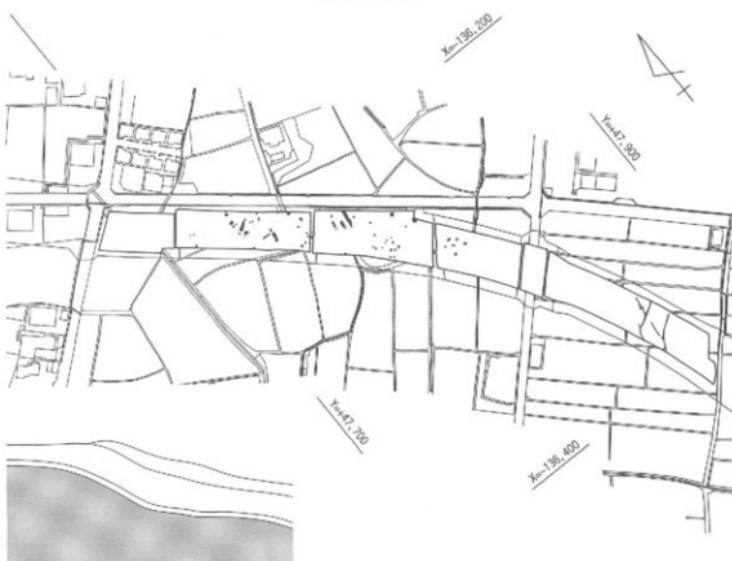
- 「美乃利Ⅰ」 第1期に相当する。
 地形環境 調査区全域が自然堤防上に立地していたものと考えられる。これは、『美乃利Ⅰ』のV区から面的に続くものである。ただし、後世の段丘化に伴い、自然堤防が残存するのは調査区東隅に限られる。この箇所におけるレベルは、V区とは顕著な差は認められない。
 土地利用 水田として利用されていた。土壤層Ⅲ上面で検出したことから、『美乃利Ⅰ』第4面で検出した水田跡と一連の造構と考えられる。
 時期 今回の調査では、この水田跡を切るかたちで完新世段丘崖が検出されている。そして、この段丘崖の埋没が弥生時代前期末まで遡ることが明らかとなった。以上から、当該期の水田跡の時期が、弥生時代前期末以前に位置付けられることが明らかとなった。



第67図 第1期



第68図 第2期



第69図 第3期

第2期〔ステージⅡ〕

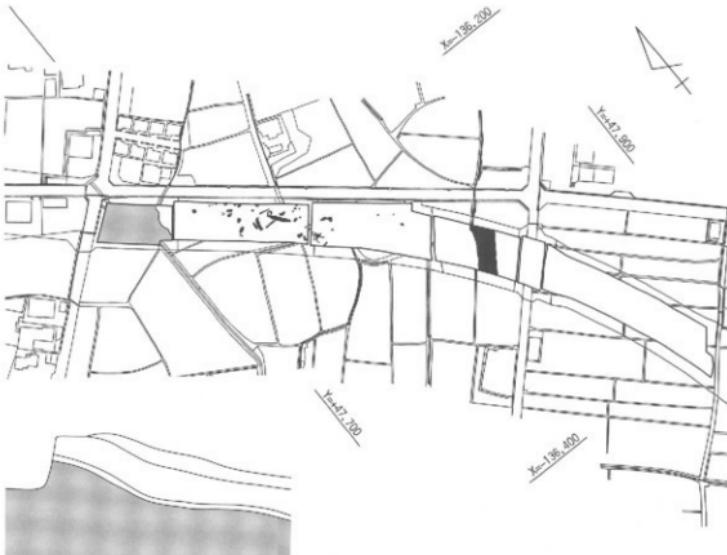
- 「美乃利Ⅰ」 第2期に相当する。
地形環境 今回の調査区においては、前段階との変化は認められない。
土地利用 土地利用の痕跡は認められない。
時期 当段階は、段丘化以前の段階であることから、弥生時代前期末以前に位置付けられる。

第3期

- 「美乃利Ⅰ」 第3期に相当する。
地形環境 今回の調査区においては、前段階との変化は認められない。
土地利用 土地利用の痕跡は認められない。
時期 当段階も、段丘化以前の段階であることから、弥生時代前期末以前に位置付けられる。

第4期〔ステージⅢ〕

- 「美乃利Ⅰ」 第4期に相当する。
地形環境 段丘化が起こり、調査区東隅は完新世段丘Ⅰ面となる。東隅を除く西側一帯は、その氾濫原面となる。
土地利用 泛濫原面は、土地利用が不可能となる。段丘面上では、土地利用の痕跡は認められない。
時期 泛濫原底部から出土した土器から、弥生時代前期末に位置付けられる。



第70図 第4期

第5期 [ステージIV・V]

『美乃利I』 当該報告では設定できなかった段階である。出土土器からの設定は困難であるが、遺構相互の関係から設定できた段階である。

地形環境 洪水による氾濫原面の埋没が進行する。埋没は一定ではなく、特に段丘崖に沿って顕著な微凹地が形成される。

土地利用 段丘崖に沿う微凹地を利用して、SD14が掘削される。水路としての機能が考えられる。さらに、この溝の埋没後、SD11とSD12が掘削される。SD14の機能を引き継ぐものと考えられる。洪水による埋没→再掘削を繰り返していたものと考えられる。

なお、段丘面上での土地利用の跡は認められない。

時期 SD11・SD12・SD14から出土した土器から、弥生時代前期末に位置付けられる。

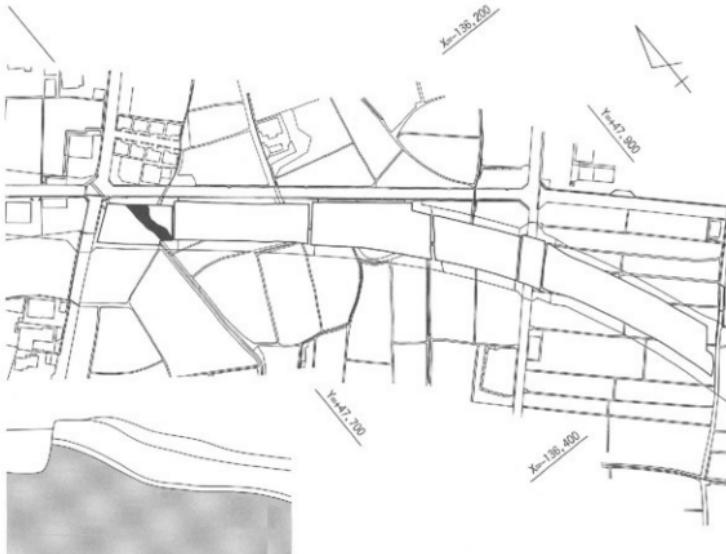
第6期 [ステージVI]

『美乃利I』 第5期に相当する。

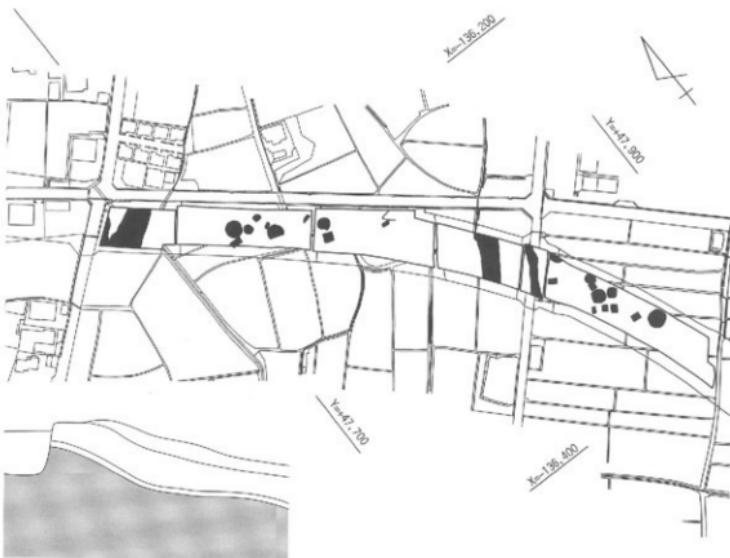
地形環境 泛濫原面の埋没がさらに進行する。段丘面においては、地形環境の変化は認められない。

土地利用 泛濫原面がほぼ埋没した段階で、SD15が掘削される。水路としての機能が考えられる。また、やや遅れてSD08も掘削される。『美乃利I』Ⅲ区で検出したSD48とほぼ同規模の溝であることから、両者がセットで機能をしていたことも考えられる。これを前提とすると、Ⅳ区からV区で検出した住居跡群を区画する機能が考えられる。

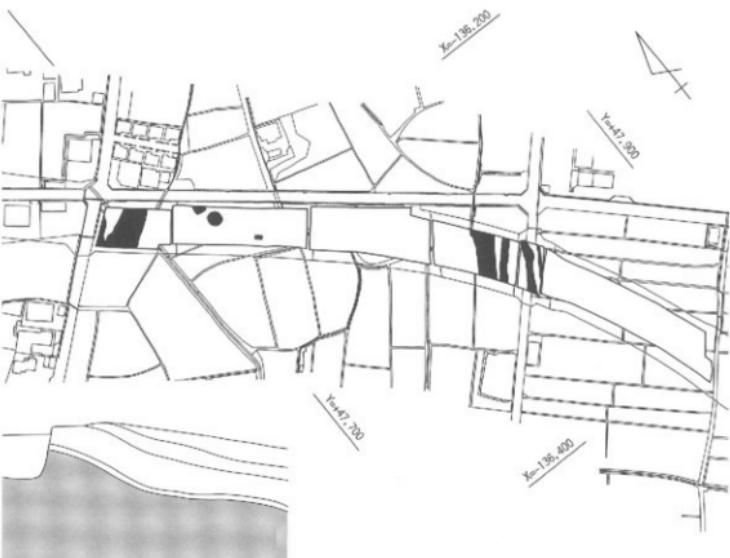
時期 SD15・SD08から出土した土器から、弥生時代中期後半に位置付けられる。



第71図 第5期



第72図 第6期



第73図 第7期

第7期〔ステージVI〕

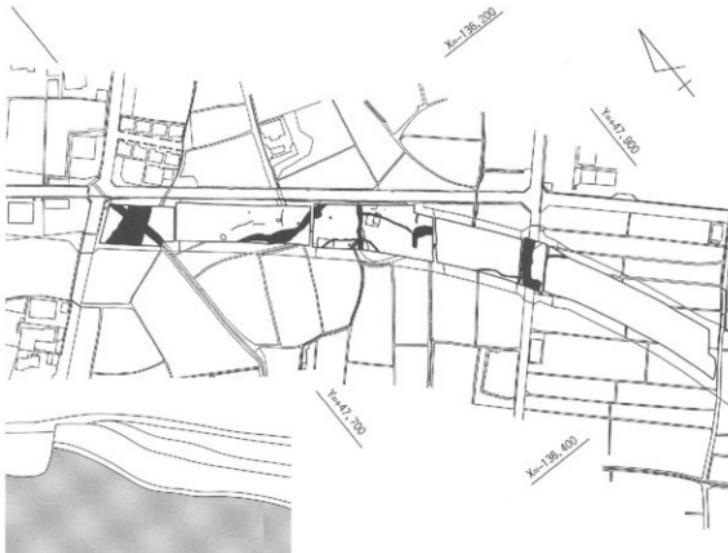
- 『美乃利I』 第6期に相当する。
- 地形環境 沼澤原面の埋没がほぼ鈍化する。段丘面においては、地形環境の変化は認められない。
- 土地利用 S D15とS D08が依然機能している。S D08については、『美乃利I』Ⅱ区からⅢ区にかけて検出した溝群とセットとなって機能していたものと考えられる。S D15については、その断面形から水路として機能していたものと考えられる。
- 時期 S D08から出土した土器から、弥生時代後期に位置付けられる。

第8期〔ステージVII〕

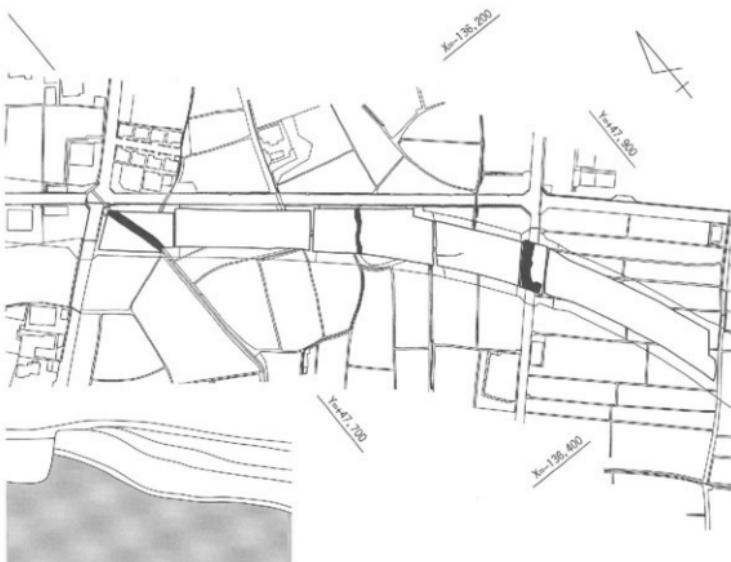
- 『美乃利I』 当該報告では設定できなかった段階である。
- 地形環境 沼澤原面の埋没がほぼ終了する。段丘面においては、地形環境の変化は認められない。
- 土地利用 S D08が依然機能している。
- 時期 S D08から出土した土器から、古墳時代後期に位置付けられる。

第9期〔ステージVIII〕

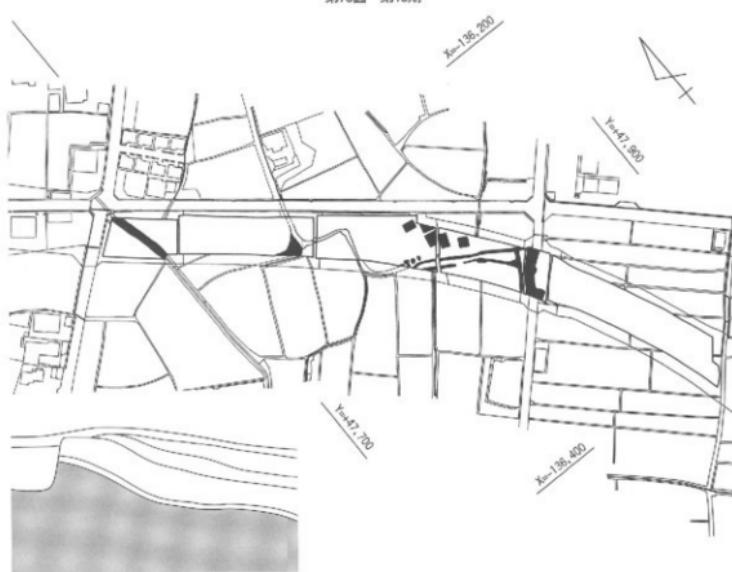
- 『美乃利I』 第7期に相当する。
- 地形環境 沼澤原面の埋没が終了する。段丘面においては、地形環境の変化は認められない。
- 土地利用 S D08が依然機能している。『美乃利I』Ⅱ区で検出した溝とは方向性を異にすることから、条里との直接的な関係は考えられない。新たにS D02も掘削される。
- 時期 S D02・S D08から出土した土器から、飛鳥時代～奈良時代に位置付けられる。



第74図 第9期



第75図 第10期



第76図 第11期

第10期【ステージⅢ】

『美乃利Ⅰ』 第8期に相当する。

地形環境 沈没原面の埋没がほぼ埋没し、氾濫原面がほぼ平坦化する。ただし、段丘崖は完全には埋没しない。段丘面においては、地形環境の変化は認められない。

土地利用 微凹地を利用したSD02が存在する。水路としての機能が考えられる。

時期 『美乃利Ⅰ』における検討結果から、平安時代前期に位置付けられる。

第11期【ステージⅣ】

『美乃利Ⅰ』 第9期に相当する。

地形環境 地形環境の変化は認められない。

土地利用 前期に引き続き、SD02が存在する。水路としての機能が考えられる。

時期 『美乃利Ⅰ』における検討結果から、平安時代中期に位置付けられる。

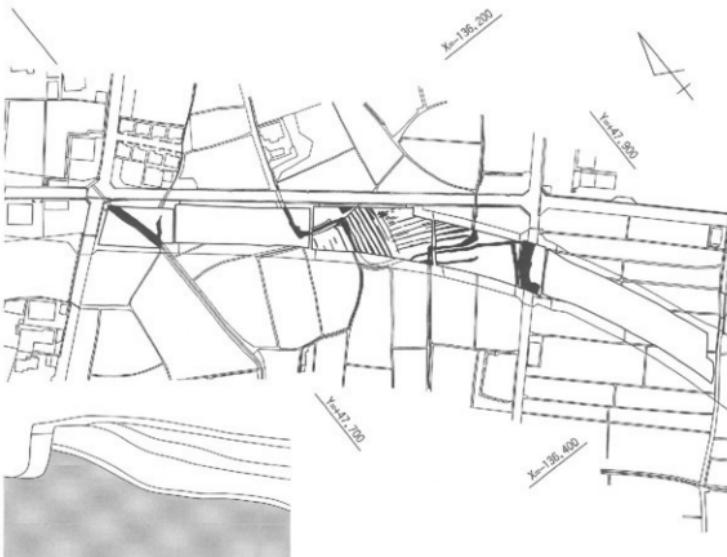
第12期【ステージⅤ】

『美乃利Ⅰ』 第10期に相当する。

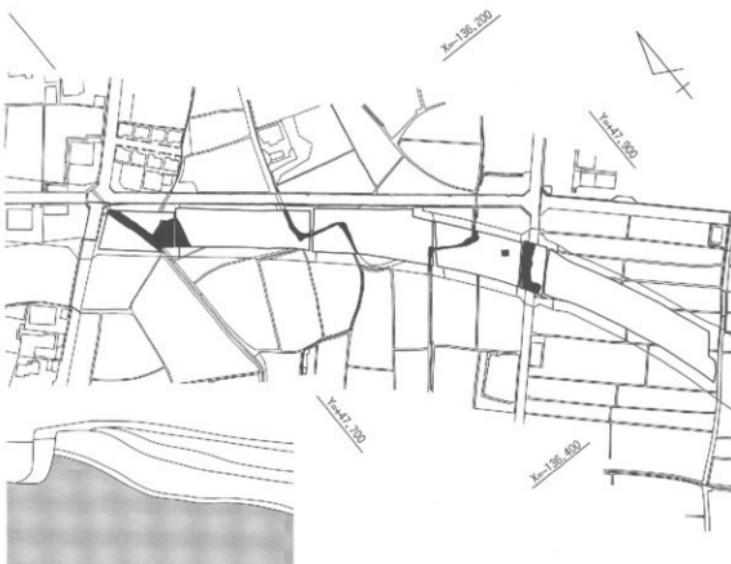
地形環境 地形環境の変化は認められない。

土地利用 前期に引き続き、SD02が存在する。SD10も新たに掘削される。

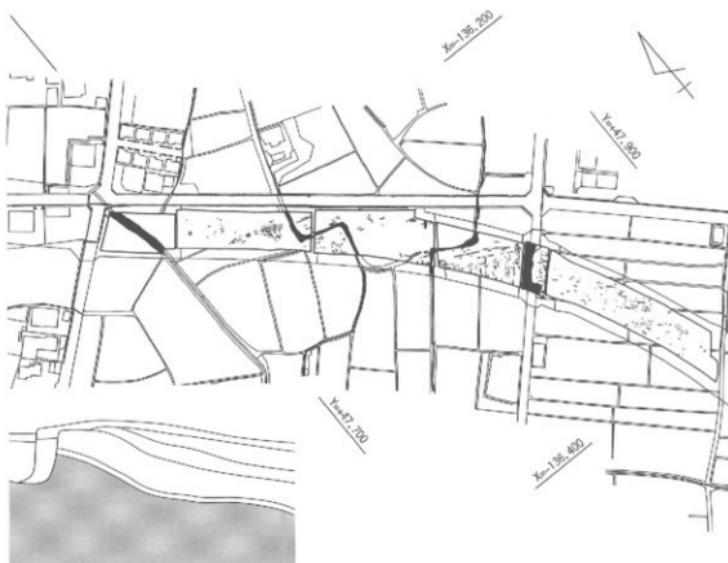
時期 『美乃利Ⅰ』における検討結果から、平安時代末～鎌倉時代初頭に位置付けられる。



第77図 第12期



第78図 第13期



第79図 第14期

第13期 [ステージX]

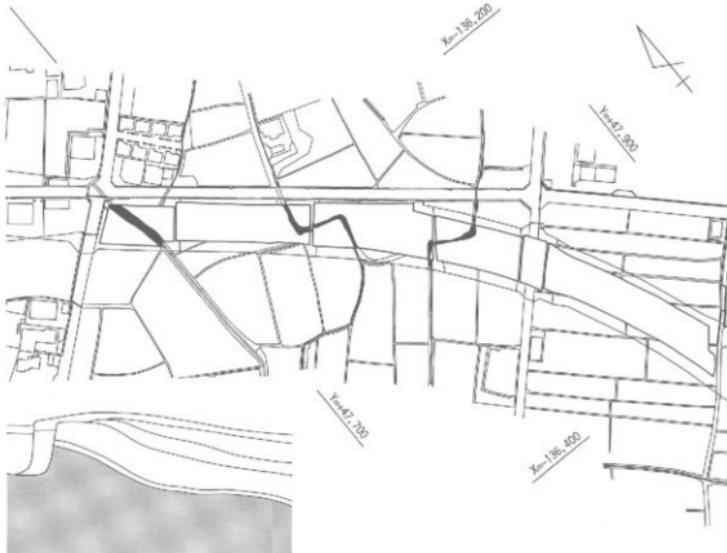
- 『美乃利Ⅰ』 第11期に相当する。
- 地形環境 地形環境の変化は認められない。
- 土地利用 前期に引き続き、SD02が水路として存在する。また、段丘面上で水田が営まれる。V区で検出したものと一連のものである。
- 時期 『美乃利Ⅰ』における検討結果から、近世以降に位置付けられる。

第14期 [ステージX]

- 『美乃利Ⅰ』 第12期に相当する。
- 地形環境 地形環境の変化は認められない。
- 土地利用 SD02が再掘削を繰り返し、水路として存在する。また、段丘面上で営まれていた水田が一端埋められ、新たな水田として営まれる。
- 時期 『美乃利Ⅰ』における検討結果から、近世以降に位置付けられる。

第15期 [ステージX]

- 『美乃利Ⅰ』 第12期以降に相当する。
- 地形環境 地形環境の変化は認められない。
- 土地利用 SD02が機能し続け、前期以来の水田が営まれ続ける。
- 時期 調査直前までの時期にあたる。



第80図 第15期

美乃利遺跡出土土器観察表

No	遺構名	種別	器種	残存状況	口径(cm)	頸径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	焼成
1	包含層	弥生	鉢	口縁部若干・底部1/3	11.6		12.0	4.2	9.1	
2	包含層	弥生	高杯	脚底部1/3・脚柱部完存			18.5	9.4		
3	包含層	須恵器	杯	口縁部1/12~底部1/7	16.1			10.0	5.9	不良
4	包含層	須恵器	杯 B	口縁部1/10~底部合計で1/4	16.1			12.2	4.5	良
5	包含層	須恵器	碗	底部2/3				4.3	2.7	良
6	包含層	須恵器	碗	口縁部1/6~底部1/2	17.7			7.6	6.7	良
7	包含層	須恵器	捏鉢	口縁部破片					4.6	
8	包含層	備前	壺	底部1/12			25.0	8.2	良	
9	包含層	土師器	小皿	口縁部1/2弱~底部5/6	9.6			5.4	1.4	
10	包含層	須恵器	杯 B	口縁部1/4~底部1/3	12.6			9.2	4.1	良
11	包含層	須恵器	碗	口縁部1/18~底部1/2弱	13.0			6.5	5.2	良
12	S D01	須恵器	小皿	口縁部5/6~底部完存	10.3			6.0	2.2	
13	S D01	須恵器	碗	口縁部1/4~底部3/4	11.8			6.1	4.2	
14	S D01	須恵器	碗	ほぼ完存	12.8			5.8	5.1	良
15	S D01	須恵器	碗	底部1/3				6.0	2.0	
16	S D02	土師器	壺	口縁部1/20	45.0				4.7	
17	S D02	須恵器	杯 G 盖	口縁部~天井1/3 つまみ欠損	8.7		2.4			良
18	S D02	須恵器	杯 B 盖	口縁部~天井1/6	12.8				1.3	
19	S D02	須恵器	杯 B 盖	つまみのみ完存					1.3	
20	S D02	須恵器	杯 A	口縁部~底部1/3	9.6		6.0	3.2		良
21	S D02	須恵器	杯 A	口縁部~底部1/4	12.4			9.0	3.5	良
22	S D02	須恵器	高杯	口縁部1/10~脚注完存~脚据1/4	9.9			8.0	9.3	良
23	S D02	須恵器	碗	口縁部1/8~底部完存	15.6			6.3	4.5	
24	S D02	瓦	平瓦	破片						
25	S D02	瓦	平瓦	破片						
26	S D03	須恵器	杯 B 盖	口縁部1/5~つまみ完存	9.6				2.0	良
27	S D03	須恵器	杯 B	底部1/4弱			12.5	1.9		
28	S D03	須恵器	碗	底部1/4			5.9	1.4	良	
29	S D03	染付	碗	口縁部~底部1/6	9.8			5.0	2.7	良
30	S D05	土師器	碗	底部3/4				8.8	2.7	
31	土器溜	土師器	杯	底部1/2				6.6	1.7	
32	土器溜	須恵器	口縁部1/2~底部完存	15.0			5.7	5.5	良	
33	土器溜	須恵器	捏鉢	底部1/2			12.7	6.0	良	
34	S D08	弥生	蓋	つまみ部完存				9.3		
35	S D08	弥生	底部	底部3/4				7.6	6.5	
36	S D08	弥生	底部	底部完存			9.6	11.8		
37	S D08	弥生	底部	底部完存			9.3	12.1		
38	S D08	弥生	広口壺	口縁部1/8	21.9	15.0			5.3	
39	S D08	弥生	広口壺	口縁部1/10	21.2	15.8			8.4	
40	S D08	弥生	広口壺	口縁部1/8	17.8				3.6	
41	S D08	弥生	広口壺	口縁部1/3	17.2	11.3			6.6	
42	S D08	弥生	広口壺	口縁部1/3	13.5	8.7			5.8	
43	S D08	弥生	広口壺	底部完存・体部1/2			16.7	6.6	16.4	
44	S D08	弥生	広口壺	頸部2/3・体部1/6		9.2	25.5		17.5	

色調	胎土	備考	挿図	写真
にぶい黄澄～灰褐	1～1.5mm大のチャート・長石含む		8	
にぶい黄澄	1～2.5mm大のチャート・雲母含む	脚柱径3.0cm	8	14
灰白	1～3mm大の石粒含む		9	
灰～灰白	0.5～1mm大の石粒含む		9	
灰白～灰	0.5～2mm大の石粒含む		9	
灰～灰白	1～3mm大の石粒含む		9	14
灰	0.5mm大の石粒含む		9	
橙～赤灰	1～7mm大の石粒多く含む		9	
灰黄褐	0.5～2mm大の石粒含む		10	14
灰白	1.5mm大の石粒含む		10	14
灰白	0.5～2.5mm大の石粒含む		10	14
淡赤橙	1～3.5mm大の石粒含む		14	14
浅黄澄	1～1.5mm大の石粒含む		14	14
灰	1～8mm大の石粒含む		14	14
灰	0.5～1mm大の石粒含む		14	
にぶい橙	1～1.5mm大の石粒含む		16	15
灰	1～1.5mm大の石粒含む		16	
灰～灰白	0.5mm大の石粒若干含む		16	
灰～灰白	0.5mm大の石粒若干含む		16	
灰～灰白	0.5～2mm大の石粒少し含む		16	15
灰白	1mm大の石粒少し含む		16	15
灰白	1～2mm大の石粒含む	脚柱径2.7cm	16	15
灰白～浅黄澄	1mm大の石粒含む		16	15
灰白～橙	1～2.5mm大の石粒含む	長 8.2cm 巾 5.7cm 厚2.0cm	16	
浅黄澄～灰白	1～7mm大の石粒多く含む	長10.1cm 巾10.4cm 厚1.9cm	16	
灰白	1mm大の石粒少し含む		18	
灰～灰白	1～3mm大の石粒含む		18	
灰	0.5～1mm大の石粒含む		18	
白・青	密		18	
にぶい橙～浅黄澄	1～1.5mm大の石粒含む		21	
灰白	1～3mm大の石粒含む		25	
灰	1～5.5mm大の石粒含む		25	15
灰白	1～8mm大の石粒含む		25	
灰黄褐～橙	1～4mm大の石英・長石・チャート・雲母非常に多く含む		32	
灰黄	1～3.5mm大のチャート・長石・雲母多く含む		32	
灰白～浅黄澄	1～3mm大の長石・チャート・雲母・クサリレキ多く含む		32	
にぶい黄澄	1～5mm大のチャート・長石・雲母多く含む		32	
灰黄	雲母・長石の細粒含む		32	
にぶい黄澄	雲母・長石・チャートの細粒含む		32	
灰黄	1.5mm大の長石・チャート・雲母若干含む		32	
灰白～灰黄	0.5～1.5mm大の石英・長石・雲母・クサリレキ含む		32	15
灰白	0.5～2mm大のチャート・雲母・クサリレキ含む		32	
にぶい黄澄	1～2mm大の長石・雲母・チャート含む		32	15
灰黄褐	1～3mm大の石英・長石・チャート・雲母わずかに含む		32	16

美乃利遺跡出土土器觀察表

No	遺構名	種別	器種	残存状況	口径 (cm)	頸径 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	焼成
45	S D08	弥生	全形	底部～体部ほぼ完存			21.3	6.7	21.5	
46	S D08	弥生	無頸壺	口縁部1/5	18.0	17.5	20.0		6.4	
47	S D08	弥生	無頸壺	口縁部1/8	17.0				3.0	
48	S D08	弥生	無頸壺	口縁部1/8弱	18.0				3.9	
49	S D08	弥生	直口壺	口縁部1/4弱	23.1	16.4			11.1	
50	S D08	弥生	直口壺	口縁部1/8	14.2				7.2	
51	S D08	弥生	直口壺	わずか					5.6	
52	S D08	弥生	直口壺	口縁部1/5	15.0	12.2			8.4	
53	S D08	弥生	直口壺	口縁部1/8	15.1	13.3			9.4	
54	S D08	赤生	壺	口縁部1/4弱	10.4	7.7			6.4	
55	S D08	弥生	壺	口縁部1/4弱	27.2	25.6			7.7	
56	S D08	弥生	壺	II縁部1/2弱	27.8	26.3			10.8	
57	S D08	弥生	壺	口縁部1/4弱	15.8	13.9			7.8	
58	S D08	弥生	壺	口縁部1/4	14.8	13.1			6.5	
59	S D08	弥生	壺	口縁部1/5	14.5	12.3			3.1	
60	S D08	弥生	壺	口縁部1/8	12.8	11.0			3.6	
61	S D08	弥生	壺	口縁部1/6	14.2	13.1			4.8	
62	S D08	弥生	壺	口縁部1/3	12.1	10.2	14.0		8.7	
63	S D08	弥生	壺	底部1/2				7.0	5.6	
64	S D08	弥生	壺	底部完存				7.4	5.7	
65	S D08	弥生	壺	坏部1/2弱	22.3		30.0		6.1	
66	S D08	弥生	高坏	脚柱部完存					10.4	
67	S D08	弥生	高坏	脚部1/4				14.1	13.8	
68	S D08	弥生	高坏	脚柱部完存					8.1	
69	S D08	弥生	高坏	脚部2/3					6.8	
70	S D08	弥生	脚部	脚部完存				13.6	10.2	
71	S D08	弥生	脚部	脚部1/5				10.5	6.7	
72	S D08	弥生	脚部	脚部1/4				12.6	7.2	
73	S D08	弥生	釐合土器	体部1/8			27.0		5.2	
74	S D08	弥生	器台	脚部1/8弱			30.4		12.1	
75	S D08	弥生	たこ壺	口縁部～体部1/2	5.1	7.6			7.5	
76	S D08	弥生	たこ壺	口縁部～体部1/3	5.7	8.0			8.2	
77	S D08	弥生	広口壺	口縁部1/7	13.8	11.4			5.3	
78	S D08	弥生	底部	底部完存				6.4	5.0	
79	S D08	弥生	壺	口縁部1/5	33.8	30.0			11.2	
80	S D08	弥生	壺	口縁部1/4弱	16.4	13.1	17.8		8.4	
81	S D08	弥生	壺	口縁部若干・頸部1/4	14.3	11.3			6.4	
82	S D08	弥生	壺	口縁部1/4強	13.9	12.0	15.0		7.7	
83	S D08	弥生	壺	口縁部1/8	15.0	11.8	14.6		6.8	
84	S D08	弥生	壺	II縁部1/4弱	14.6	12.4			5.0	
85	S D08	弥生	壺	口縁部1/8	13.6	10.2			4.8	
86	S D08	弥生	壺	口縁部1/4弱	13.8	11.4			3.5	
87	S D08	弥生	壺	底部完存				4.0	3.9	
88	S D08	弥生	壺	底部完存				5.4	4.3	

色調	胎 土	備 考	写 真 拂 図
灰白	1~2mm大の長石・チャート含む		32 16
灰黄	雲母・長石・チャートの細粒含む		32
灰黄~灰黄褐	雲母・長石の細粒含む		32
灰黄褐~褐灰	長石・雲母の細粒含む		32
灰白	雲母・長石・チャートの細粒含む		33 16
灰黄褐	雲母・長石の細粒含む		33
灰黄褐	0.5~2mm大の雲母・長石・チャート・クサリレキ若干含む		33 16
にぶい黄橙~褐灰	雲母・長石の細粒含む		33
灰黄	雲母・長石の細粒含む		33
灰黄褐	0.5~2mm大の雲母・長石・チャートわずかに含む	生駒西麓産	33
淡黄~灰白	1~1.5mm大のチャート・長石・雲母含む		33
淡黄~灰白	1~2mm大のチャート・長石・雲母・クサリレキ含む		33
灰白~にぶい黄橙	長石・雲母・クサリレキの細粒含む	口縁部外面焼付着	33
にぶい黄橙	雲母・長石・クサリレキの細粒含む	口縁部外面焼付着	33
灰黄	長石・雲母の細粒含む	外面焼付着	33
にぶい黄橙	長石・雲母・クサリレキの細粒含む		33
灰黄	長石・雲母・チャート含む	口縁部外面焼付着	33
灰白~灰黄	長石・雲母の細粒含む		33 16
暗灰黄	1mm大の雲母・長石わずかに含む		33
淡黄~灰黄	雲母・長石・チャートの細粒含む		33
にぶい黄橙~灰白	1mm大の雲母・長石わずかに含む		33 16
灰黄	雲母・長石の細粒含む	穿孔径0.7cm 脚柱径3.8cm	33 17
浅黄橙~にぶい黄橙	雲母・長石・クサリレキの細粒含む	穿孔径0.4cm 脚柱径4.5cm	33 17
にぶい黄	1~3mm大の石英・長石・チャート・雲母多く含む	脚柱径3.2cm	34
灰白	1mm大の雲母・チャートわずかに含む	脚柱径5.0cm	34
褐灰~にぶい黄橙	1~3mm大の長石・チャート・雲母含む	脚柱径5.2cm	34 16
浅黄	長石・雲母の細粒含む		34
にぶい黄褐	0.5~1.5mm大のチャート・長石・雲母わずかに含む	脚柱径6.0cm	34
灰黄	雲母・長石の細粒含む		34 17
灰黄褐~浅黄	1~2.5mm大の長石・チャート・雲母含む	穿孔径2.8cm (推定)	34 17
にぶい黄橙~灰黄褐	1~2.5mm大の石英・長石・チャート・雲母含む		34
灰黄褐	1~3mm大のチャート・長石・雲母含む		34
にぶい黄橙~灰黄褐	1~2.5mm大の石英・長石・チャート・雲母多く含む		34
浅黄	1~2mm大のチャート・長石・雲母含む		34
にぶい黄褐~灰黄褐	1~4mm大の石英・長石・チャート・雲母含む		34
にぶい黄橙	チャート・長石・雲母の細粒含む		34
にぶい黄橙~灰白	1~3mm大のチャート・長石・雲母含む		34
灰白	1~5.5mm大のチャート・長石・クサリレキ多く含む		34
灰黄褐~褐灰	0.5~2mm大の石英・長石・チャート・雲母含む		34 17
にぶい黄橙	1mm大のチャート・長石・雲母わずかに含む	口縁部外面焼付着	34
灰白	1~6mm大のチャート・長石含む		34
にぶい黄橙	1~3mm大の雲母・長石・チャート多く含む	口縁部外面焼付着	34
にぶい黄橙~灰黄褐	1~3mm大の雲母・長石・チャート・クサリレキ含む		34
灰黄	1~2mm大の長石・チャート・雲母含む		34

美乃利遺跡出土土器観察表

No	遺構名	種別	器種	残存状況	口径(cm)	頸径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	焼成
89	S D08	弥生	高壺	口縁部1/8	27.1				3.4	
90	S D08	弥生	高壺	口縁部わずか・体部1/6	24.7				3.5	
91	S D08	弥生	鉢	口縁部1/4・底部1/2	14.7			4.2	7.3	
92	S D08	弥生	壺	体部わずか						
93	S D08	弥生	壺	体部わずか						
94	S D08	弥生	壺	体部わずか						
95	S D08	弥生	壺	頸部わずか						
96	S D08	土師器	直口壺	ほぼ完存、口縁部のみ1/5欠損	10.6	7.1	15.7		16.2	
97	S D08	土師器	角杯	ほぼ完存	7.2	11.7				
98	S D08	須恵器	杯蓋	完存	12.3				4.3	普通
99	S D08	須恵器	壺	ほぼ完存	9.6	6.0	13.4		13.6	
100	S D08	須恵器	杯	ほぼ完存	10.0			5.4	3.3	良
101	S D08	須恵器	杯	口縁部2/3～底部完存	11.2				3.4	良
102	S D08	須恵器	杯	口縁部1/2～底部完存	9.8			5.6	3.6	良
103	S D08	須恵器	杯	口縁部1/2弱～底部強	10.4			5.3	3.9	良
104	S D08	須恵器	匙	頸部～底部完存		3.2	8.1		9.9	良
105	S D08	土師器	皿	口縁部7/8～底部完存	12.9			7.7	2.4	
106	S D08	土師器	杯A	口縁部1/10	13.4			10.7	2.8	
107	S D08	土師器	皿	口縁部1/15～底部1/6	14.7			11.1	2.3	
108	S D08	土師器	杯A	口縁部1/6～底部1/3	14.0			11.0	3.4	
109	S D08	土師器	椀	口縁部若干～底部1/6	16.9			9.3	4.5	
110	S D08	須恵器	杯A	口縁部～底部1/2弱	13.7			9.7	3.5	良
111	S D08	須恵器	杯A	口縁部～底部1/12	13.7			10.6	3.0	良
112	S D08	須恵器	杯A	口縁部1/4弱～底部2/3	13.6			10.1	3.6	不良
113	S D08	須恵器	杯B	口縁部1/4～底部1/3	12.8			8.6	3.9	良
114	S D08	須恵器	皿A	口縁部～底部1/4	20.4			16.7	2.2	良
115	S D08	須恵器	皿B	口縁部～底部合計で1/3弱	27.5			22.0	4.2	良
116	S D08	須恵器	鉢	底部2/5				10.5	5.9	良
117	S D10	須恵器	椀	口縁部1/15	15.8				4.0	良
121	S D11	弥生	壺	口縁部1/5	12.0	9.2			6.8	
122	S D11	弥生	壺	わずか					3.5	
123	S D11	弥生	蓋	つまみ部完存					9.7	
124	S D11	弥生	蓋	つまみ完存・口縁部1/4	21.1				14.0	
125	S D11	弥生	底部	底部1/2弱				8.5	6.8	
126	S D11	弥生	底部	底部1/2				9.6	5.9	
127	S D11	弥生	短頸壺	口縁部わずか・体部1/8	17.0	17.0	19.2		5.6	
128	S D11	弥生	たこ壺	口縁部2/3・底部完存	6.1				9.3	
129	S D11	弥生	脚部	脚部1/2				8.8	6.6	
130	S D11	弥生	壺	底部1/7				11.0	7.4	
131	S D11	弥生	壺	口縁部わずか	29.0	26.9			5.7	
132	S D11	弥生	壺	口縁部1/5	12.8	11.5			4.7	
133	S D11	弥生	壺	底部1/2				7.8	3.3	
134	S D11	弥生	壺	体部わずか						
135	S D11	弥生	壺	口縁部わずか						

色調	胎土	備考	排	写真
灰黄 にぶい黄橙	1~2mm大の長石・雲母・チャート・石英含む		35	
	1~3.5mm大の石英・長石・チャート多く含む		35	
灰黄	1~2.5mm大の石英・長石・チャート・雲母含む		35	18
			18	
			18	
			18	
			18	
にぶい黄橙	1~1.5mm大の石粒少し含む		36	18
灰黄褐	1~2.5mm大の石粒多く含む		36	19
灰	1~2mm大の石粒含む		36	19
灰	1~5mm大の石粒含む		36	18
灰白	1~1.5mm大の石粒含む		37	19
灰	1~3mm大の石粒含む		37	19
灰	0.5~2mm大の石粒含む		37	19
灰	1~2.5mm大の石粒含む		37	19
灰白	0.5~2.5mm大の石粒含む	穿孔径1.3cm	37	20
灰白	1mm大の石粒含む		38	20
にぶい橙~灰白	1mm大の石粒含む		38	20
浅黄橙~橙	1~2mm大の石粒含む		38	
にぶい橙~浅黄橙	1~4.5mm大の石粒含む		38	
浅黄橙	1~2mm大の石粒含む		38	
灰白	0.5~1mm大の石粒含む		38	20
灰白	1mm大の石粒含む		38	
灰白	1~1.5mm大の石粒含む	火だすき有 墨書「郡」	38	
灰白	1mm大の石粒少し含む		38	20
灰白	1~1.5mm大の石粒含む	墨書「井」?	38	21
灰	0.5~1.5mm大の石粒含む		38	21
灰	1~2mm大の石粒含む		38	
灰白	0.5~2mm大の石粒含む		40	
灰黄褐~黒褐	1~4mm大のチャート・長石含む		44	21
にぶい黄橙	1~3mm大のチャート・長石多く含む		44	21
浅黄橙	1~3.5mm大のチャート・長石・クサリレキ多く含む	つまみ径6.1cm	44	
にぶい橙~灰褐	1~4mm大のチャート・長石・クサリレキ非常に多く含む		44	21
灰黄褐~にぶい黄橙	1~3mm大の石英・長石・チャート多く含む		44	
にぶい黄橙~灰黄褐	1~5mm大のチャート・長石非常に多く含む		44	
浅黄	雲母・長石含む		44	
灰白	雲母・長石の細粒含む		44	21
灰白	1~2mm大のチャート・長石・雲母含む	透孔径4.5cm	44	21
にぶい黄橙~暗灰	雲母・長石の細粒含む		44	
にぶい黄橙~灰白	雲母・クサリレキの細粒含む		44	
にぶい黄橙~灰黄褐	雲母・長石・クサリレキの細粒含む		44	
灰黄	雲母・長石の細粒含む		44	
			22	
			22	

美乃利遺跡出土土器観察表

No	遺構名	種別	器種	残存状況	口径(cm)	頸径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	焼成
136	S D11	弥生	壺	体部わずか						
137	S D11	弥生	壺	体部わずか						
138	S D12	弥生	広口壺	口縁部1/4弱	24.1	17.3			8.8	
139	S D12	弥生	広口壺	口縁部わずか	19.3				3.2	
140	S D12	弥生	広口壺	口縁部わずか	16.7				5.8	
141	S D12	弥生	広口壺	口縁部1/2・頸部2/3	19.1	10.6			10.3	
142	S D12	弥生	壺	頸部1/3		10.1			11.8	
143	S D12	弥生	直口壺	口縁部1/4	8.7	7.3			6.0	
144	S D12	弥生	壺	わずか					6.3	
145	S D12	弥生	広口壺	口縁部1/4	15.4	12.5			6.0	
146	S D12	弥生	壺	わずか					6.4	
147	S D12	弥生	壺	頸部わずか					6.7	
148	S D12	弥生	壺	わずか					8.8	
149	S D12	弥生	壺	わずか					8.9	
150	S D12	弥生	壺	わずか					5.2	
151	S D12	弥生	壺	頭部1/4		16.5			11.3	
152	S D12	弥生	壺	わずか					5.2	
153	S D12	弥生	壺	わずか					5.4	
154	S D12	弥生	壺	体部1/8					7.0	
155	S D12	弥生	壺	底部完存				9.2	6.9	
156	S D12	弥生	壺	底部1/2					9.7	6.5
157	S D12	弥生	壺	底部完存					7.8	5.2
158	S D12	弥生	壺	底部完存					8.3	12.9
159	S D12	弥生	壺	底部完存			13.7		10.4	
160	S D12	弥生	壺	口縁部わずか・体部1/8	32.4	30.4	31.4		9.2	
161	S D12	弥生	壺	口縁部1/4	23.1	21.5			8.1	
162	S D12	弥生	壺	口縁部わずか					7.5	
163	S D12	弥生	壺	わずか					4.2	
164	S D12	弥生	壺	わずか					6.0	
165	S D12	弥生	壺	底部完存					6.9	5.1
166	S D12	弥生	壺	底部完存					8.2	7.2
167	S D12	弥生	壺	底部完存					8.6	7.3
168	S D12	弥生	壺	底部完存					6.5	7.8
169	S D12	弥生	ミニチュア	ほぼ完存					5.8	2.9
170	S D12	弥生	壺	腹部わずか						
171	S D12	弥生	壺	体部わずか						
172	S D12	弥生	壺	体部わずか						
173	S D12	弥生	壺	体部わずか						
174	S D12	弥生	壺	体部わずか						
175	S D12	弥生	壺	小片						
176	S D12	弥生	壺	小片						
177	S D13	弥生	壺	口縁部1/5	11.8	10.3			3.6	
178	S D13	弥生	脚部	脚部1/4弱				16.6	9.6	
179	S D14	弥生	壺	口縁部わずか・頸部完存	24.0	10.8			16.8	

色調	胎土	備考	写真 番号
にぶい黄橙～灰白	1～5mm大のチャート・長石多く含む	46	22
橙～にぶい赤橙	1～5mm大のチャート・長石非常に多く含む	46	22
灰黄褐	1～3mm大の石英・長石・チャート含む	46	
にぶい橙～浅黄橙	1～6mm大のチャート・長石非常に多く含む	46	22
にぶい黄澄～浅黄橙	1～4mm大のチャート・長石・クサリレト非常によく含む	46	
にぶい黄澄	1～3mm大のチャート・長石・石英含む	46	22
灰黄	1～2.5mm大のチャート・長石含む	46	23
明黄褐～にぶい黄澄	1～3mm大の石英・長石・チャートやや多く含む	46	23
灰黄褐	1～4mm大のチャート・長石多く含む	46	
橙	1～4mm大の石英・長石・チャート多く含む	46	
にぶい黄澄	1～3mm大のチャート・長石含む	46	
灰黄褐～にぶい黄澄	1～3mm大のチャート・長石・石英含む	46	23
にぶい黄澄～灰白	1.5～2mm大のチャート含む	46	23
にぶい橙～灰白	1～5mm大のチャート・長石多く含む	46	23
浅黄橙～橙	1～3mm大の石英・長石・チャート多く含む	46	23
浅黄橙～灰	0.5～3mm人のチャート・長石含む	46	23
にぶい黄澄～灰白	1～5mm大のチャート・長石多く含む	46	
にぶい黄澄～橙	1～3mm大の石英・長石・チャート多く含む	46	24
灰黄褐～橙	1～5mm大のチャート・長石多く含む	46	
灰白～にぶい橙	1～4.5mm大の石英・長石・チャート多く含む	46	
灰黄褐～にぶい黄澄	1～4mm大の石英・長石・チャート非常に多く含む	47	
浅黄橙～灰白	1～5mm大のチャート・長石非常に多く含む	47	
にぶい橙～にぶい黄澄	1～4.5mm大の石英・長石・チャート非常に多く含む	47	
にぶい黄澄	1～5mm大のチャート・長石多く含む	47	
黄灰～暗灰黄	1～6mm大の石英・長石・チャート多く含む	47	
黄灰	1～2mm大の長石含む	47	
にぶい橙～灰白	1～3mm大のチャート・長石含む	47	24
灰黄褐	1～4.5mm大の石英・長石・チャート非常に多く含む	47	24
灰黄褐	1～4mm大のチャート・長石・石英含む	47	
灰白～橙	1～4mm大のチャート・長石非常に多く含む	47	
灰白～灰黄褐	1～2.5mm大の石英・長石・チャート多く含む	47	
灰白	1～4mm大の石英・長石・チャート多く含む	47	24
			24
			25
			25
			25
			25
黒褐～褐灰	雲母・長石の細粒含む	生駒西麓産	49
灰白～灰黄	雲母・長石の細粒含む		49
灰黄褐	1～5mm大の石英・長石・チャート多く含む		51 25

美乃利遺跡出土土器観察表

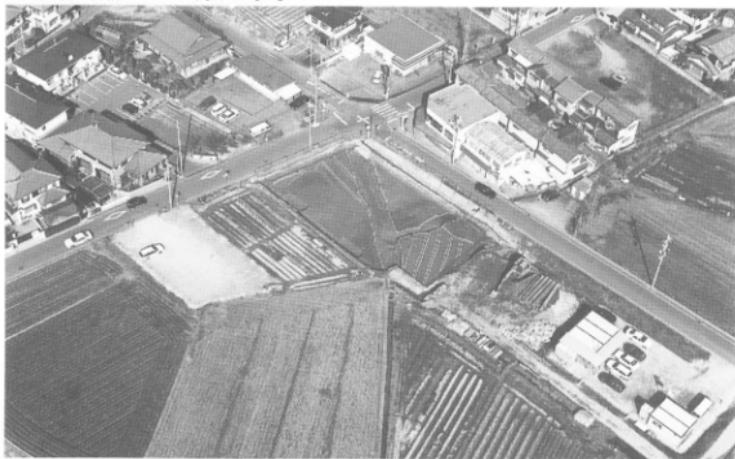
No	遺構名	種別	器種	残存状況	口径 (cm)	頸径 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	焼成
180	SD14	弥生	壺	口縁部1/8	19.2	14.0			13.7	
181	SD14	弥生	壺	口縁部ほぼ完存	17.6	9.6			8.2	
182	SD14	弥生	壺	口縁部1/7	15.3				3.6	
183	SD14	弥生	壺	頸部1/4強					6.0	
184	SD14	弥生	壺	口縁部わずか・頸部1/4強	14.0	11.0			7.4	
185	SD14	弥生	壺	口縁部1/4	14.1				3.7	
186	SD14	弥生	壺	口縁部1/6	14.8	10.9			7.3	
187	SD14	弥生	壺	口縁部1/5	22.2	12.7			10.1	
188	SD14	弥生	壺	わずか					6.5	
189	SD14	弥生	壺	底部～体部1/2			22.0	7.2	19.8	
190	SD14	弥生	壺	小片					5.3	
191	SD14	弥生	壺	わずか					5.9	
192	SD14	弥生	壺	底部1/2弱					8.2	5.8
193	SD14	弥生	壺	底部1/3					10.3	17.0
194	SD14	弥生	壺	底部～体部1/3			24.7	8.4	15.3	
195	SD14	弥生	壺	底部1/2					11.2	7.4
196	SD14	弥生	壺	底部完存					9.3	7.2
197	SD14	弥生	壺	底部完存					8.7	5.6
198	SD14	弥生	壺	底部1/3					9.8	4.9
199	SD14	弥生	壺	底部完存					11.2	7.2
200	SD14	弥生	壺	底部完存					9.3	6.9
201	SD14	弥生	壺	底部完存					7.9	13.5
202	SD14	弥生	壺	底部完存					10.3	8.8
203	SD14	弥生	壺	底部完存					5.8	5.8
204	SD14	弥生	壺	底部1/2					10.2	7.2
205	SD14	弥生	壺	底部完存					8.0	8.4
206	SD14	弥生	壺	底部完存					7.2	7.1
207	SD14	弥生	壺	口縁部1/12	18.9	17.6				8.9
208	SD14	弥生	壺	わずか						5.1
209	SD14	弥生	壺	わずか						3.8
210	SD14	弥生	壺	頸部わずか						
211	SD14	弥生	壺	体部わずか						
212	SD14	弥生	壺	頸部わずか						
213	SD15	弥生	壺	口縁部1/5	24.6	22.5			7.1	
214	SD15	弥生	壺	口縁部1/5	20.5	18.7			6.9	
215	SD15	弥生	壺	底部2/3				7.5	4.5	
216	SD15	弥生	壺	底部完存					5.4	3.3
217	SD15	弥生	たこ壺	口縁部1/4弱	5.5					5.3
218	SD15	弥生	高坏	口縁部1/7	15.0					3.8
219	SD15	弥生	壺	底部1/10					4.0	2.9
220	SD15	弥生	壺	底部完存					5.2	4.6

色調	胎土	備考	挿写真
褐灰～灰黄褐	1～3mm大の石英・長石・クサリレキ多く含む		51 25
褐灰	1～4mm大のチャート・長石多く含む		51 26
黄灰～黒褐	1～3.5mm大の石英・長石・チャート多く含む		51
灰黄	1～4mm大のチャート・長石非常に多く含む		51
灰黄	1～4mm大の石英・長石・チャート多く含む		51
浅黄橙～橙	1～6mm大の石英・長石・チャート非常に多く含む		51
浅黄橙～にぶい橙	1～4mm大の石英・長石・チャート多く含む		51 26
にぶい橙～橙	1～5mm大の石英・長石・チャート非常に多く含む		51 26
にぶい黄橙～灰黄褐	1～3mm大の石英・長石・チャート含む		51 26
浅黄橙～灰貴	1～4mm大のチャート・長石非常に多く含む		51 26
黒～黄灰	1～3mm大の石英・長石・チャート含む		51 26
灰黄褐～暗灰	1～4mm大の石英・長石・チャート多く含む		51 27
黒褐～暗灰黄	1～3.5mm大の石英・長石・チャート多く含む		51
褐灰～にぶい橙	1～4mm大の石英・長石・チャート多く含む		51
浅黄橙～黄灰	1～5mm大の石英・長石・チャート非常に多く含む		51
浅黄橙～灰黄褐	1～4mm大の長石・石英・チャート非常に多く含む		52
灰白～にぶい黄橙	1～4.5mm大の石英・チャート・雲母非常に多く含む		52
灰褐～にぶい黄橙	1～3mm大の石英・長石・チャート非常に多く含む		52
浅黄橙～橙	1～5mm大のチャート・長石・雲母多く含む		52
灰黄褐～にぶい黄褐	1～4mm大の石英・長石・チャート非常に多く含む		52
にぶい黄褐～灰黄褐	1～7mm大のチャート・長石非常に多く含む		52 27
灰黄褐～黑褐	1～5mm大の石英・長石・チャート非常に多く含む		52 27
にぶい黄橙～褐灰	1～4mm大の石英・長石・チャート非常に多く含む		52
橙～にぶい橙	1～3mm大の石英・長石・チャート多く含む		52
暗灰黄～灰黄褐	1～3mm大の石英・長石・チャート非常に多く含む		52
褐灰～灰黄褐	1～4mm大のチャート・長石多く含む		52 27
灰黄	1～3mm大のチャート・長石多く含む		52
灰白～にぶい黄橙	1～2.5mm大の石英・長石・チャート非常に多く含む		52 27
褐灰～灰黄褐	1～2mm大の石英・長石含む		52 27
にぶい黄橙	1～2.5mm大の石英・チャート含む		52 28
			28
			28
灰白	0.5～2mm大のチャート・クサリレキ含む		55
にぶい橙～橙	0.5～1.5mm大の長石・チャート多く含む		55
にぶい黄橙～灰白	0.5～1.5mm大の雲母・長石若干含む		55
褐灰	0.5～1.5mm大のチャート・長石・雲母含む		55
灰白	0.5～1.5mm大のチャート・雲母含む		55
にぶい黄褐～灰黄褐	0.5～1.5mm大の石英・長石・チャート・雲母含む		55
淡赤橙～明赤橙	0.5～1mm大の石粒含む		55
灰黄褐～橙	1～3.5mm大の石英・長石・チャート・雲母多く含む		55

写 真 図 版



写真図版1 第1面



南上空から



北東上空から

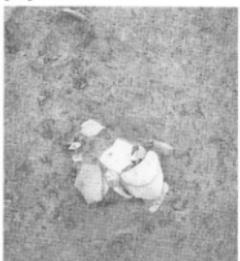


南西上空から

写真図版2 第1面



写真図版3 第1面



S D 01
(左) 12出土状況
(中) 13出土状況
(右) 14出土状況



S D 02 南から



S D 03 北から



水田跡全景 南から



畦畔断面 南から

写真図版5 第1面 (2)



南上空から



北西上空から



南西上空から

写真図版6 第1面 (2)



真上から



全景 北東から

写真図版7 第1面（2）



S D 08全景
南西から



S D 08全景
南西から



S D 08北壁
南西から

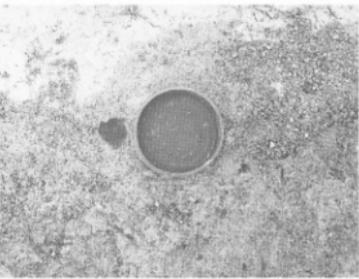
写真図版8 第1面 (2)



S D08
44・45他出土状況



S D08
(左) 36出土状況
(右) 96出土状況



S D08
(左) 97出土状況
(右) 98出土状況



S D08
(左) 99出土状況
(右) 104出土状況

写真図版9 第2面



全景 南上空から



全景 北西上空から



全景 南西上空から



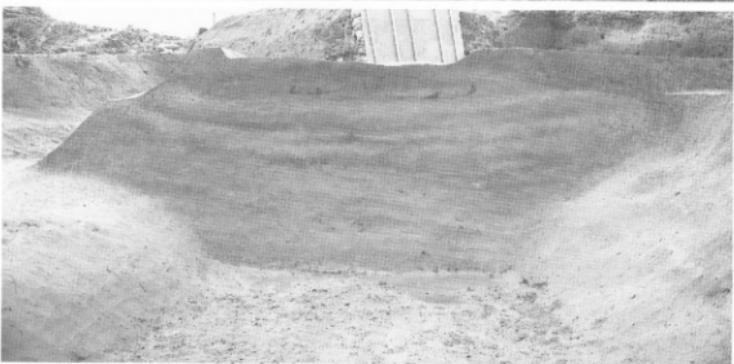
写真図版11 第2面



SD11 南から



SD12 南から



SD14 北から



写真図版13 完新世段丘



調査前 南西から



完新世段丘崖 北から



完新世段丘崖 西から

写真図版14 出土遺物



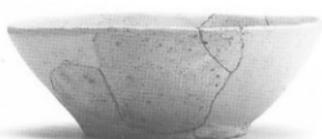
11



12



2

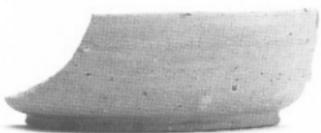


6



13

9



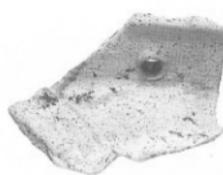
10



14

包含層出土土器 (2・6・9~11) SD01出土土器 (12~14)

写真図版15 出土遺物



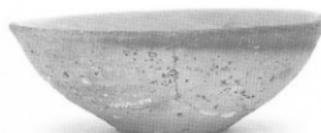
16



20



21



23



32



41



43



22

S D02出土土器（16・20～23） 土器溜出土土器（32） S D08出土土器（41・43）

写真図版16 出土遺物



44



51



45



62



65



49



70

写真図版17 出土遺物



66



67



73



83



74

S D 08出土土器 (66・67・73・74・83)

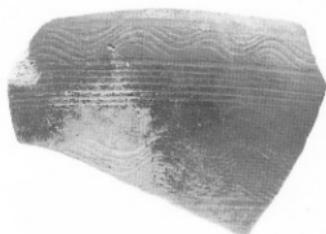
写真図版18 出土遺物



91



95



92



96



93



94



99

写真図版19 出土遺物



97



98



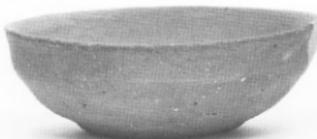
101



100



102

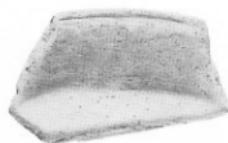


103

写真図版20 出土遺物



104



106



110



105



112

S D 08出土土器 (104~106・110・112)

写真図版21 出土遺物



113



124



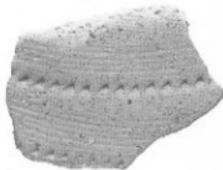
115



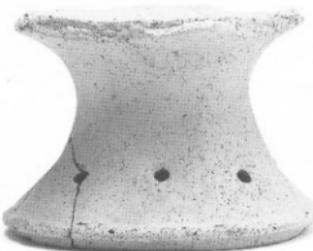
128



121



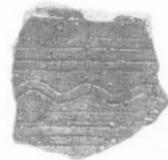
122



129

S D08出土土器 (113・115) S D11出土土器 (121・122・124・128・129)

写真図版22 出土遺物



137

134



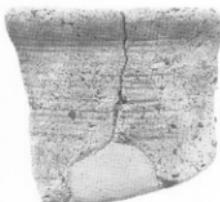
135



138



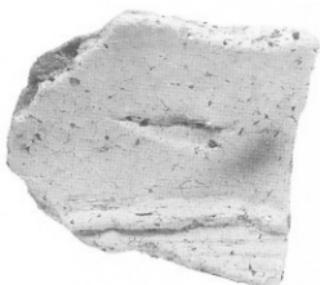
136



141

S D11出土土器 (134~137) S D12出土土器 (138・141・143)

写真図版23 出土遺物



144



150



145



151



149



152



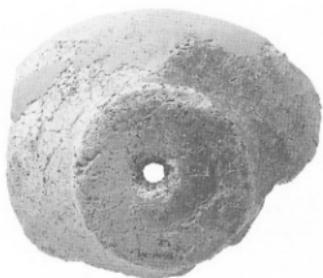
153

写真図版24 出土遺物



155

165



164

170

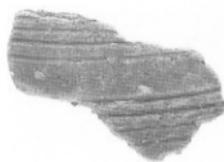


169

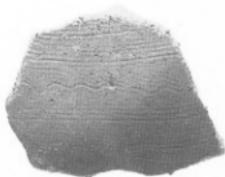
171

S D12出土土器 (155・164・165・169~171)

写真図版25 出土遺物



172



173



176

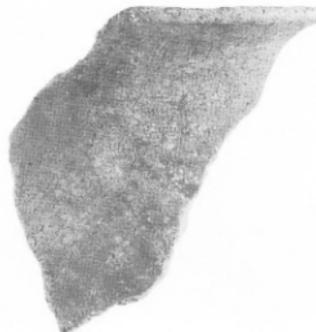


179

174



175



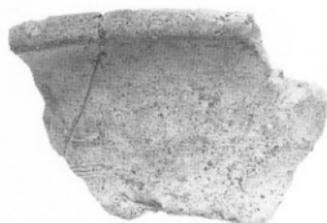
180

S D12出土土器 (172~176) S D14出土土器 (179・180)

写真図版26 出土遺物



181



182



186



187



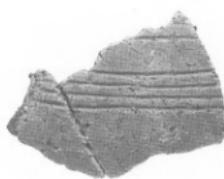
188



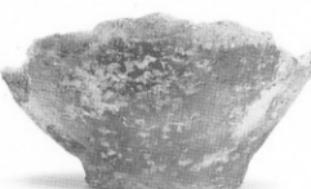
189

S D14出土土器 (181・186~190)

写真図版27 出土遺物



191



205



200



207



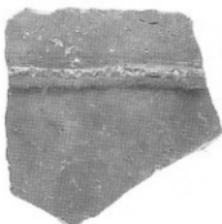
201



208

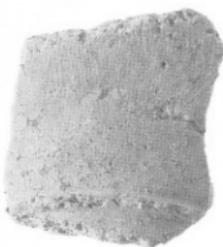
S D 14出土土器 (191・200・201・205・207・208)

写真図版28 出土遺物



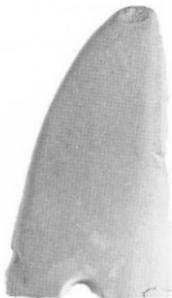
209

211



210

212



S 1



S 2

S D14出土土器 (209~212) 第1面出土石器 (S 1) S D12出土石器 (S 2)

報告書抄録

ふりがな	みのりいせきに							
書名	美乃利遺跡II							
調書名	一級河川別府川河川改修事業に伴う発掘調査							
卷次	兵庫県文化財調査報告 第296号							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	山田清朝・藤田淳							
編集機関								
所在地	〒652-0032 兵庫県神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL 078-531-7011							
発行年月日	西暦2006年(平成18年)3月20日							
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
	市町村	遺跡調査番号						
美乃利遺跡	兵庫県加古川市 かこがわし 加古川町大野	280210	970365	34度 46分 17秒	134度 51分 14秒	平成9年11月26日 ～ 平成10年3月13日	681m ²	一級河川 別府川河 川改修事 業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
美乃利遺跡	集落跡	弥生時代前期	溝	土器	完新世段丘崖			
		弥生時代中期	溝	土器				
		弥生時代後期	溝	土器				
		古墳時代中期	溝	土師器・須恵器	角杯(土師器)			
		飛鳥時代	溝	土師器・須恵器				
		奈良時代	溝	土師器・須恵器	墨書き土器「郡」			
		平安時代～鎌倉時代	溝	土師器・須恵器				

兵庫県文化財調査報告 第296冊

美乃利遺跡Ⅱ

—一級河川別府川河川改修事業に伴う発掘調査—

2006（平成18）年3月20日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号
TEL 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会
〒650-0011 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 交友印刷株式会社
〒650-0047 神戸市中央区港島南町5丁目4-5
